岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第243集

龍ケ馬場遺跡発掘調査報告書

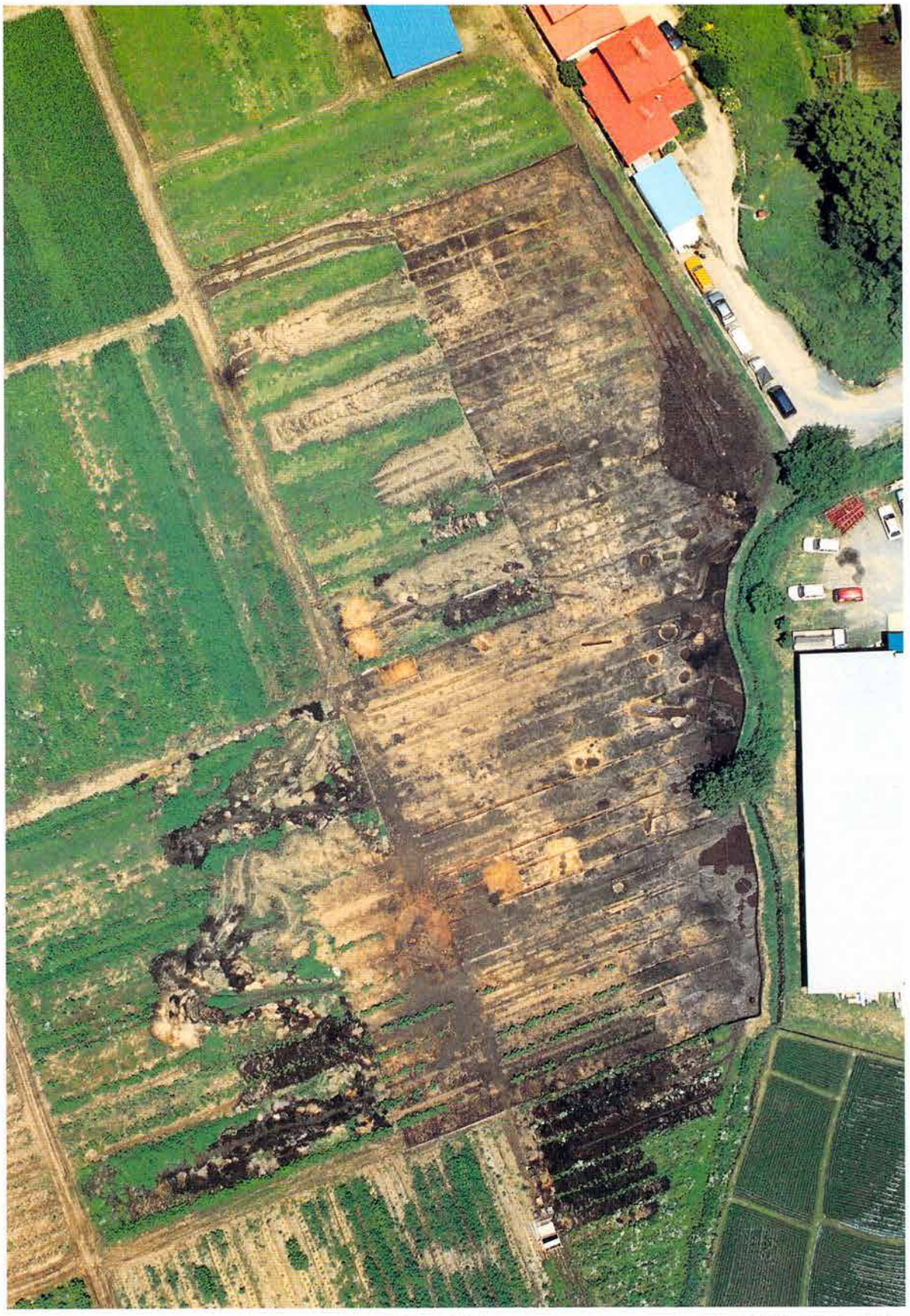
岩手県立胆沢病院建設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

龍ケ馬場遺跡発掘調査報告書

岩手県立胆沢病院建設関連遺跡発掘調査

調査後全景－1　　空中撮影（直上遠景）



調査後全景－2　　空中撮影（直上近景）

1号炭窯　　完掘後全景

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600ケ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化財を保存し、後世に伝えていくことは県民に課せられた責務であります。

一方、社会資本の充実も重要な一施策であり、特にも近年進行しつつある社会の高齢化などに伴う地域医療の充実はもっとも急がれるところであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整の下に、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録・保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手県立胆沢病院の建設に先立ち、岩手県医療局からの委託を受け、発掘調査した龍ケ馬場遺跡の発掘調査の結果をまとめたものです。龍ケ馬場遺跡は胆沢扇状地を形成する堀切段丘上に立地し、調査の結果、平安時代の竪穴住居跡や炭窯などが発見されています。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成にご協力、ご援助を賜りました岩手県医療局、岩手県蚕業試験場、水沢市教育委員会、胆沢町教育委員会などの関係各位に衷心より謝意を表します。

平成8年3月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　千　葉　浩　一

例　言

1　本報告書は岩手県水沢市龍ケ馬場61ほかに所在する龍ケ馬場遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2　本遺跡の調査は、岩手県立胆沢病院の建設に伴って、遺跡の一部が消滅するために、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会、岩手県医療局の協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3　本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号および遺跡調査略号は次のとおりである。

遺跡番号　ＮＥ26-1254・ＲＢ－94

4　調査面積は3,980㎡である。野外調査は平成６年４月14日から７月22日にわたって実施した。調査資料の整理作業は平成６年11月１日から平成７年３月31日まで実施した。

5　発掘調査は伊東　格・鎌田　勉が担当した。室内整理作業および報告書の作成は伊東　格が担当した。

6　各種鑑定にあたっては下記の方々にお願いした。

火山灰の螢光Ｘ線分析　　三辻利一（奈良教育大学）

炭化材の樹種同定　　早坂松次郎（岩手県木炭協会）

土坑出土木製品の樹種同定　　木工舎「ゆい」

7　野外調査にあたっては、水沢市教育委員会・胆沢町教育委員会および地元の方々のご協力をいただいた。

8　本遺跡から出土した遺物および調査資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　次

序
例言

本　文

Ⅰ　調査に至る経過……2
Ⅱ　立地と環境……2
　1　遺跡の立地と地形……2
　2　遺跡の位置と環境……4
　3　基本層序……4
　4　周辺の遺跡……7
Ⅲ　調査と室内整理の方法……12
　1　調査方法……12
　2　室内整理方法……12
Ⅳ　調査の結果……17
　1　陥し穴状遺構……17
　2　竪穴住居跡……17
　3　炭窯……39
　4　土坑……42
　5　遺構外の出土遺物……54
Ⅴ．まとめと考察……56
付編　分析・鑑定の結果……62
　1　龍ケ馬場遺跡出土火山灰の螢光X線分析…62
　2　龍ケ馬場遺跡出土材の樹種……64
　3　龍ケ馬場遺跡出土木炭の分析・調査……65

図版目次

第1図　遺跡位置図……1
第2図　胆沢扇状地を中心とした段丘面分布……3
第3図　基本層序……4
第4図　遺跡周辺の地形図……5・6
第5図　周辺の遺跡……11
第6図　調査範囲・グリッド配置図……13
第7図　遺構配置図……15・16
第8図　1号陥し穴状遺構平面・埋土断面……17
第9図　1号竪穴住居跡平面・埋土・カマド断面……19
第10図　1号竪穴住居跡出土遺物－1……20
第11図　1号竪穴住居跡出土遺物－2……21
第12図　2号竪穴住居跡平面・埋土・カマド断面……23
第13図　2号竪穴住居跡出土遺物……24
第14図　3号竪穴住居跡平面・埋土・カマド断面……26
第15図　3号竪穴住居跡出土遺物……27
第16図　4号竪穴住居跡平面・埋土・カマド断面……28
第17図　4号竪穴住居跡出土遺物……29
第18図　5号竪穴住居跡平面・埋土・カマド断面……31
第19図　5号竪穴住居跡出土遺物……32
第20図　6号竪穴住居跡平面・埋土断面……34
第21図　6号竪穴住居跡カマド・土坑断面・掘り方平面……35
第22図　6号竪穴住居跡貼り床・土坑断面・出土遺物－1……36
第23図　6号竪穴住居跡出土遺物－2……37

第24図　6号竪穴住居跡出土遺物－3……38
第25図　1号炭窯平面・埋土断面－1……40
第26図　1号炭窯埋土断面－2出土遺物……41
第27図　1・2号土坑平面・埋土断面……42
第28図　3号土坑平面・埋土断面……43
第29図　3号土坑出土遺物－1……44
第30図　3号土坑出土遺物－2……45
第31図　4・5・6・7号土坑平面・埋土断面……46
第32図　8・9・10号土坑平面・埋土断面……49
第33図　11・12号土坑平面・埋土断面……50
第34図　12号土坑出土遺物……51
第35図　13・14・15号土坑平面・埋土断面・出土遺物……52
第36図　16・17・18号土坑平面・埋土断面……54
第37図　18号土坑出土遺物・遺構外出土遺物……55

写　真　図　版　目　次

写真図版1　調査区全景……71
写真図版2　1号炭窯跡と周辺の土坑・1号陥し穴状遺構……72
写真図版3　1号竪穴住居跡－1……73
写真図版4　1号竪穴住居跡－2……74
写真図版5　2号竪穴住居跡……75
写真図版6　3号竪穴住居跡……76
写真図版7　4号竪穴住居跡－1……77
写真図版8　4号竪穴住居跡－2……78
写真図版9　5号竪穴住居跡……79
写真図版10　6号竪穴住居跡……80
写真図版11　1号炭窯……81
写真図版12　1・2・3号土坑……82
写真図版13　4・5・6号土坑……83
写真図版14　8・9・10号土坑……84
写真図版15　12・14・15号土坑……85
写真図版16　16・17・18号土坑……86
写真図版17　出土遺物－1……87
写真図版18　出土遺物－2……88
写真図版19　出土遺物－3……89
写真図版20　出土遺物－4……90
写真図版21　出土遺物－5……91
写真図版22　出土遺物－6……92

水沢
真城
高田
姉体町
高根
前田
東大畑
佐倉河
元宿
高野長英旧宅
水沢観測所
福原
大鐘町
南塩加羅
東館
若草
夢井橋
北宮田
面塚
古屋敷
桜木
中谷木
大畑
荒谷
五輪
北半郷
石畑
五味田
堰田
千刈田
古城
郷田
石田
田中
本木
宇南田
午房谷地
西光田
板谷
大明神
塚田
小道
水路
界田
広表
谷地
鶴田
前谷地
浅野
濁川
神谷地
糀谷田
片子沢
森
桜屋敷
西野
北笹森
笹森
小山
長檀
上長根
中畳沢
畳沢
北畳沢
前畳沢
十文字
柴山
斎藤
後大畑
前大畑
本成沢
松ノ木沢
畑地
中谷地
栗生沢
明後沢
小林
横道
板子沢
高殿
白山
内屋敷
合野
学堂
五輪
内城
吹張
水口
北野
畑田
川尻
谷地田
南白山
南新田
上野
本宿
森林
高代寺
砂子田
妥害
北町
幅
西館
折居館
折居町
上林
下林
東北本線
りくちゅうおりく鉄道
見分森自然公園
見分森
長檀
大深沢
上畳沢
北畳沢
中畳沢
大鐘館
馬場
若馬場
真城館
高田館
東館
桜木橋
水沢工業団地
東堂
元宿
四丑橋
大畑
東沖田
東市場
前田中
花園町
神明町
東中通
大目通り
台町
泉町
酒屋
競馬場
南塩加羅
石名坂
殿野
起
車堂
樽田
水口前
向田
大檀
高根
水口
檜葉田
内城
明後沢
学堂
合野
内屋敷
白山
高殿
丑子
横道
古城
小林
明後沢
中の森
西屋
川原
砂子田
妥害
北町
幅
栗生沢
松ノ木沢
畑地
中谷地
高代寺
明後沢
西屋
中の森
小林
横道
板子沢
高殿
白山
内屋敷
合野
学堂
五輪
内城
吹張
水口
北野
畑田
川尻
谷地田
南白山
南新田
上野
本宿
森林
高根

Ⅰ　調査に至る経過

龍ケ馬場遺跡に対する発掘調査は、岩手県医療局（以下医療局）が事業主体となって実施する「岩手県立胆沢病院新築移転工事」に伴って、当遺跡が移転予定地である岩手県立蚕業試験場敷地内に位置することから、事業実施に先だって実施した緊急発掘調査である。

「岩手県立胆沢病院新築移転工事」は既存の施設が老朽化してきたことと、最近の医療技術の高度化に伴って最新の医療設備を完備した施設にすることを目的とした事業であるが、事業の実施に伴って岩手県医療局は、平成４年度に事業予定地内に埋蔵文化財包蔵地の有無の確認について岩手県教育委員会事務局文化課（以下文化課）に問い合わせをした。問い合わせを受けた文化課は、同年度に事業予定地内に対する詳細な分布調査を実施したが、その結果平安時代の土師器や須恵器が地表面から採取されたことにより、埋蔵文化財包蔵地と認定した上、医療局にその旨を回答した。

回答を受けた医療局では、事業設計の確定をまって、平成５年度に文化課に対し事業予定地内について埋蔵文化財の試掘調査の実施を依頼した。依頼を受けた文化課では、事業予定地内が試験桑園であり、まだ各種の試験を実施中であったことから、試験に支障のない部分から平成５年５月20日以降数回に分けて詳細な試掘調査を実施した。試掘の結果、北部から西部では削平が著しく遺物・遺構とも発見できなかったが、南部では遺物の出土だけではなく住居跡の存在も確認されたことにより、医療局にはこの区域が掘削工事範囲であれば、本調査が必要である旨を回答した。

回答を受けた医療局では、文化課から「平成６年度事業に係わる埋蔵文化財の発掘調査について」の事業照会に対して、平成６年度の事業として取り上げるよう依頼をした。

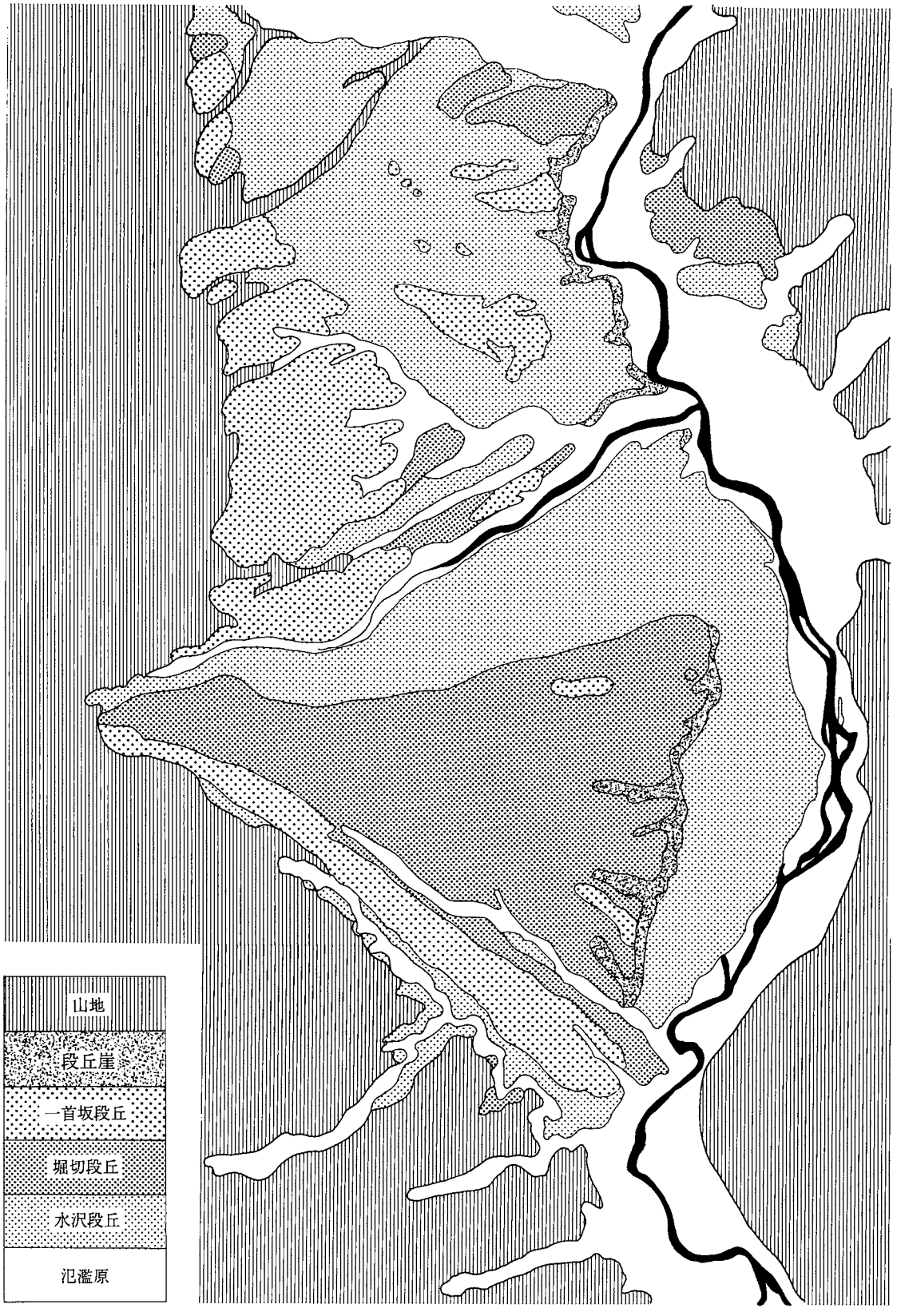
事業集約をした文化課は、医療局に対して平成６年度の㈶岩手県文化振興事業団（以下事業団）の受託事業として発掘調査を実施する旨を通知し、併せて平成６年１月18日付教文第861号で事業団にも平成６年度の受託事業とした旨を通知した。

通知を受けた事業団は、平成６年４月１日付で医療局長と事業団理事長との間で契約を締結し、平成６年４月14日～同年７月22日まで調査し、７月22日に撤収した。

Ⅱ　立地と環境

１　遺跡の立地と地形

本遺跡の所在する水沢市は岩手県を南北に貫いて流れる北上川の中流域に位置し、北は金ケ崎町、東は江刺市、南は東山町、前沢町、西は胆沢町と境を接している。北上川は全長249㎞、流域面積10,150㎢の東北一の大河で、中流域の右岸においては新第３紀層の砂岩、凝灰岩を基盤とする台地、扇状地の末端に浸食崖を形成する。北上川に注ぐ支流のうち、大きな河川はほとんどが奥羽山脈に源を持つことから、奥羽山脈支流から運び込まれる砂礫量は、北上山脈支流から運ばれるそれに比べて著しく多く、北上川の西では大小の段丘や扇状地、河岸平野および起伏量の小さい丘陵地が互いに入り組む構造となって、古来から人々に生活の場を提供してきた。水沢市においてもこの傾向はそのまま現れ、中心部を南流する北上川によって分断される東部と西部は著しい対照を示している。西部地域は、胆沢町の若柳、市野々を扇頂部とする広大な胆沢扇状地の東半に位置する。この扇状地は、南端の高位面段丘から北へ、順次低位の上野原、横道、堀切、福原



第２図　胆沢扇状地を中心とした段丘面分布
長谷地質調査事務所（1981）による

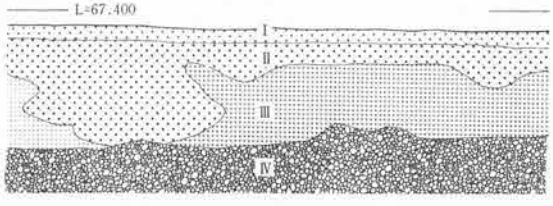
の各段丘へと続き、これらの北と東に接して低位段丘である水沢面が広がる。この水沢面は北常から北下巾付近にかけて南北約1.5㎞の沖積低地が東西にはしり谷底平野を形成する。一方、姉体地区から前沢町白鳥川にいたる地区は、国道４号線西方の段丘から流出する小河川による開析が進み、無数の沖積地を形成するとともに削り残された多くの微高地が存在する。一方、東部地域は北上山地が近くに迫る丘陵地帯で、標高90ｍ以上の侵食面と標高50～90ｍの段丘面が認められ、多くの小支谷によって分断されている。本遺跡はこのような北上川西部地域に広がる広大な胆沢扇状地を形成する中位段丘である堀切段丘上に立地している。

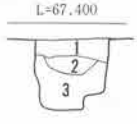
2　遺跡の位置と環境

本遺跡は東日本旅客鉄道東北本線水沢駅の南西約２㎞に位置し、胆沢段丘を構成する中位段丘である堀切段丘上に立地している。今回の調査の範囲は岩手県蚕業試験場の桑園で、現況は桑畑である。調査区は全面にわたって植栽時に掘られた排水・施肥のための溝によって撹乱されている。西から東にわずかに傾斜している。調査区の南東縁は用水路によって区切られており湧水が著しい。調査した面積は3,980㎡、調査区の標高は約67ｍである。同地点は北緯39度07分、東経141度08分付近である。

3　基本層序

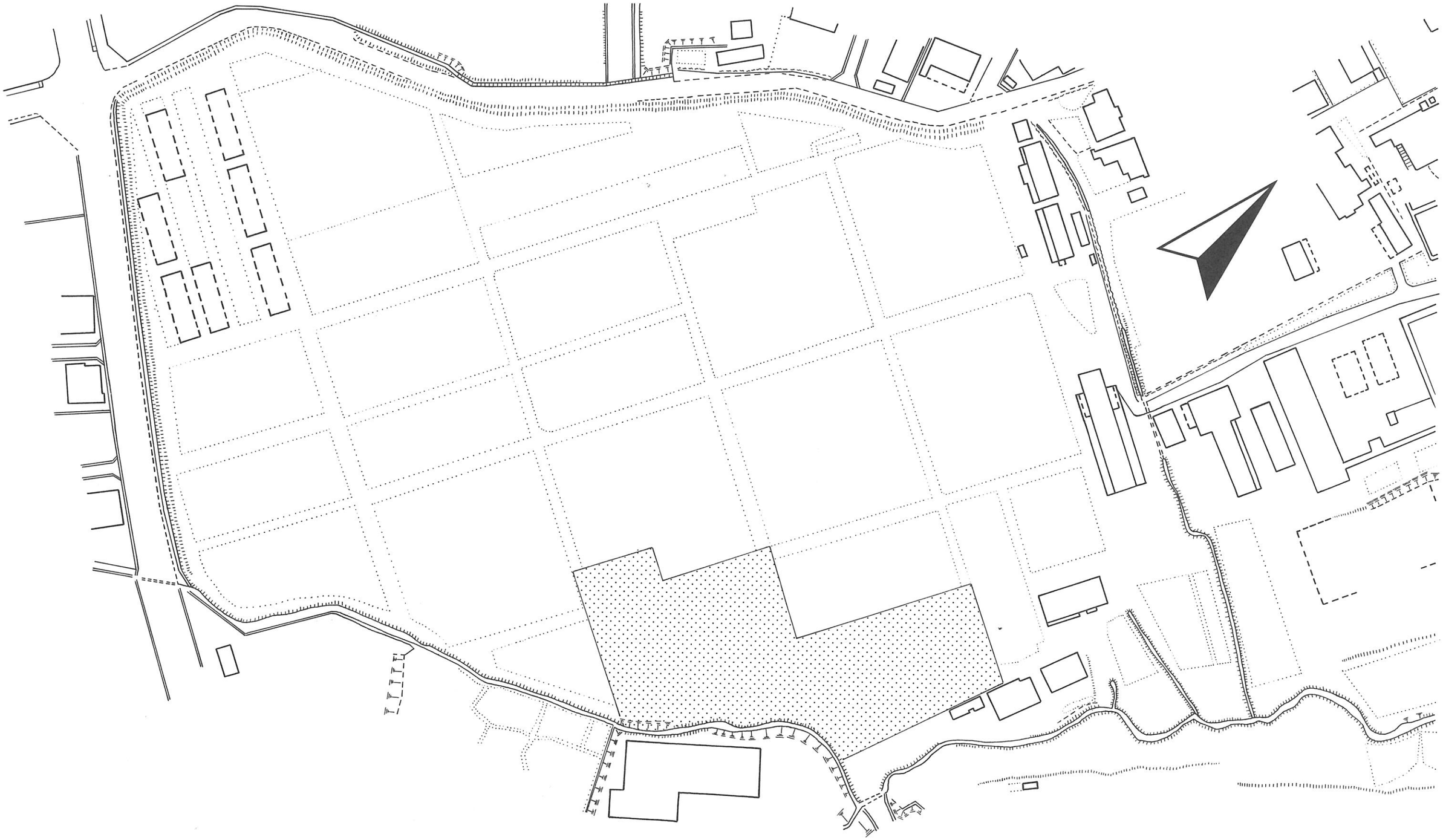
調査区全域にわたってほぼ一様な状況を呈する。Ⅰ層は表土、Ⅱ層は耕作土で黒褐色土、Ⅲ層は暗褐色粘土質土、Ⅳ層は黄褐色粘土である。遺構の検出面はⅢ・Ⅳ層である。部分的に桑苗植栽による撹乱が見られ、植栽痕がⅣ層に及ぶ場合も見られる。また、全面にわたって、圃道と並行して排水・施肥のための溝が掘られており、ほとんどの遺構が削平を受けている。





耕作溝断面
1．10YR2/2　黒褐色土　腐植土　地山起源の10YR4/4褐色から10YR6/6明黄褐色の粘質土を粒状またはブロック状に含む
2．径10㎜前後の桑の枝　隙間には１の10YR2/2黒褐色の腐植土層が入る　密度は低い
3．10YR2/2　黒褐色土　腐植土　地山起源の10YR4/4褐色から10YR6/6明黄褐色の粘質土を粒状またはブロック状に含む　１よりも高密度

第３図　基本層序・耕作溝断面図



第４図　遺跡周辺の地形図

１：1,000

4　周辺の遺跡

遺跡の分布状況をみると、谷底平野の西部には縄文時代の里槍遺跡があり、東部には弥生時代中期の常磐広町遺跡をはじめとして、平安時代の横枕Ⅱ、東沖之目Ⅰ・Ⅱ、石橋遺跡などに代表される慶徳遺跡群が占地している。国道4号線西方の段丘上には縄文時代早期の駈上遺跡、前・中期の中島遺跡が占地し、段丘縁端部には真城ケ丘団地遺跡をはじめとする平安時代の遺跡が占地している。国道4号線東方の沖積地の微高地上には、縄文時代後期の石名坂遺跡、弥生時代中期の橋本遺跡、平安時代の林前遺跡が占地している。このように水沢西部地域では、沖積面に接する段丘縁端部を占地の基本とする遺跡は縄文時代晩期、古墳時代から奈良時代のものがみられるが、とくに古墳時代から奈良時代の遺跡に関しては、谷底平野に接する段丘縁端部に集中しており、この沖積面と集落占地が強い関係をもつものと解される。一方、谷底平野においては、縄文時代晩期、弥生時代、平安時代の遺跡がみられ、縄文時代晩期と弥生時代の遺跡は、小河川沿いの自然堤防上に占地するなど、沖積低地への進出が見られるが、古墳時代・奈良時代の遺跡はみられず、この頃には、一時、低地進出が衰退するものと解される。平安時代になると占地の巾は拡大し、従来の段丘縁端部に加え、沖積低地や段丘面内部にも進出し始める。これに対し、水沢市東部地区は北上山地が近くに迫る丘陵地帯で、標高90m以上の侵食面と標高50～90mの段丘面が認められ、多くの小支谷により分断されている。遺跡の分布状況は大田代川と小田代川流域の丘陵部と大久保川の流域に集中している。大田代川の河口南岸に接する丘陵端部に縄文時代早期の鵜ノ木住吉遺跡と後・晩期の鵜ノ木遺跡が占地している。また、この丘陵南に接する沖積地に弥生時代の南鵜ノ木台地遺跡がある。

平安時代の遺跡は、上記の遺跡と占地の状況をほとんど同じくし、丘陵縁端部周辺を集落占地の基本としているようである。古墳時代・奈良時代の遺跡は、現在のところ、東部地区ではみられず、その占地は西部地区の低位段丘面を小範囲に限定されていたものと解される。

以上のように、水沢市内の遺跡は沖積低地と強い関係をもちながら、これと接する段丘面、丘陵面に展開している。これらの地域は最近の市街地の拡大、並びに農地の基盤整備に係わる土木工事の増加している地域でもある。とくに国道4号線沿いから東にかけての谷底平野、市街地東部の水沢低位段丘面、市街地南西の福原周辺においてその傾向がみられる。

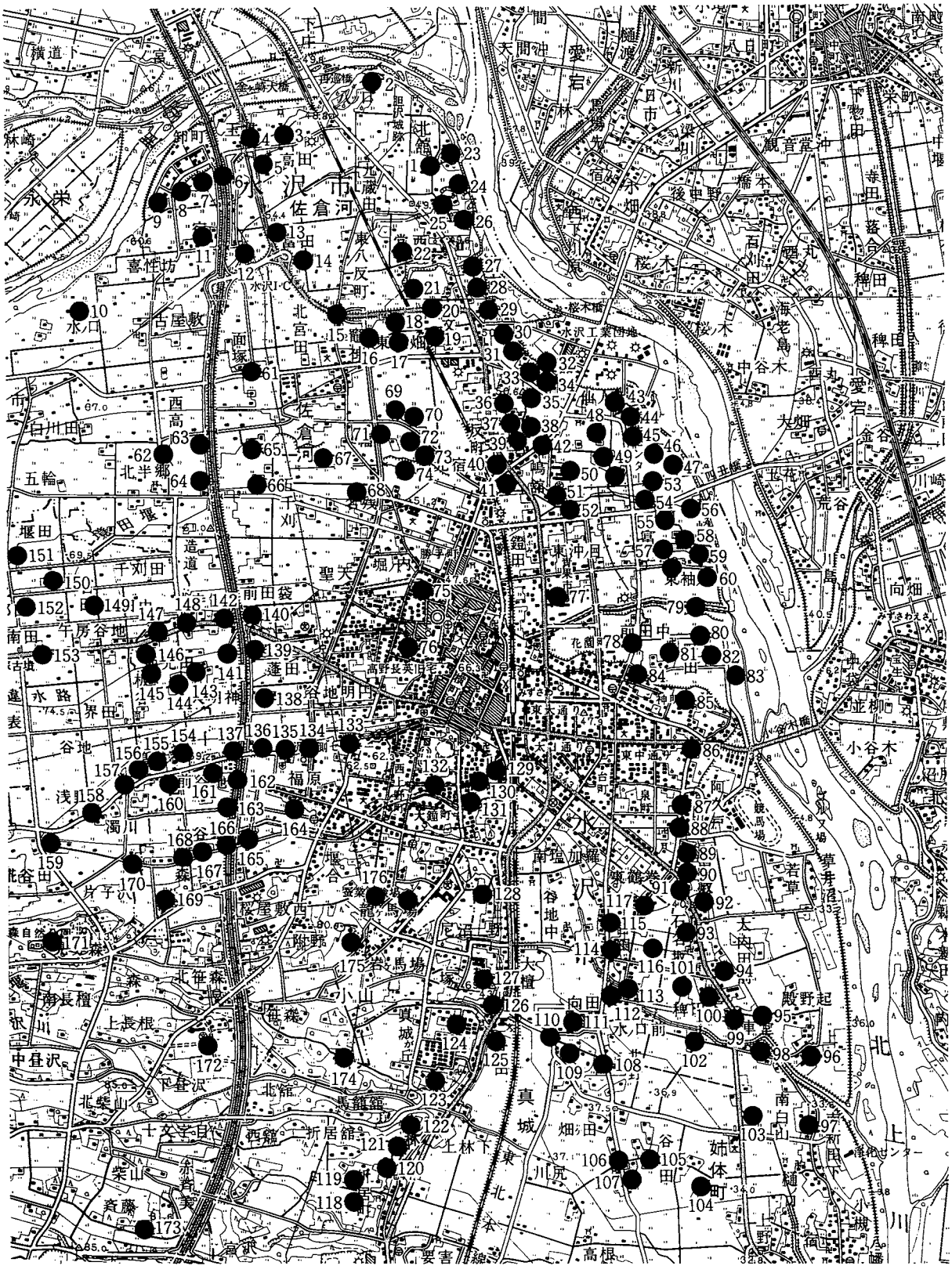
周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡台帳	遺跡名	所在地	時代	内容
1	NE06－1236	胆沢城	水沢市佐倉河字八幡	平安	城柵跡　国指定遺跡
2	NE06－0261	八ツ口	水沢市佐倉河八ツ口	奈良・平安	集落跡　土師器・須恵器
3	NE06－1104	玉貫前	水沢市佐倉河字玉貫	奈良	集落跡　土師器・須恵器
4	NE06－1102	玉貫	水沢市佐倉河字玉貫	奈良	集落跡　土師器・須恵器
5	NE06－1133	膳性	水沢市佐倉河字膳性	古墳～平安	集落跡　土師器・須恵器等
6	NE06－1048	今泉	水沢市佐倉河字今泉	古墳～平安	集落跡　土師器・須恵器等
7	NE06－1046	今泉Ⅱ	水沢市佐倉河字今泉	奈良・平安	集落跡　土師器・須恵器
8	NE06－1055	今泉Ⅲ	水沢市佐倉河字今泉	奈良・平安	集落跡　土師器・須恵器
9	NE06－1063	喜正坊	水沢市佐倉河字喜正坊	奈良・平安	集落跡　土師器
10	NE05－2345	崩田	水沢市佐倉河字崩田	奈良・平安	散布地　土師器・須恵器
11	NE06－1096	宿	水沢市佐倉河字宿	奈良・平安	集落跡　土師器・須恵器
12	NE06－2100	富田(A)	水沢市佐倉河字富田	縄文・平安	散布地　縄文土器・土師器等
13	NE06－1193	富田(B)	水沢市佐倉河字富田	縄文	散布地　縄文土器・石器
14	NE06－2115	獅子鼻	水沢市佐倉河字獅子鼻	平安	散布地　土師器・須恵器
15	NE06－2169	大曽根	水沢市佐倉河字大曽根	縄文	散布地　縄文土器・石器等
16	NE06－2262	東大畑Ⅰ	水沢市佐倉河字東大畑	縄文・平安	集落跡　土師器・須恵器
17	NE06－2283	東大畑	水沢市佐倉河字東大畑	平安	土師器・須恵器・石器等
18	NE06－2273	東大畑Ⅱ	水沢市佐倉河字東大畑	平安	散布地　須恵器
19	NE06－2277	竈堂Ⅱ	水沢市佐倉河字中田	中世	集落跡
20	NE06－2268	竈堂	水沢市佐倉河字竈堂	平安	散布地・祠社土師器
21	NE06－2246	杉本Ⅰ	水沢市佐倉河字杉本	縄文	散布地　縄文土器(晩期)等

No.	遺跡台帳	遺 跡 名	所　在　地	時　代	内　　容
22	NE06－1294	伯済寺	水沢市佐倉河字薬師堂	平安	集落跡　土師器・須恵器
23	NE06－1218	北館	水沢市佐倉河字北館	奈良・平安	散布地　土師器・須恵器
24	NE06－1248	祇園	水沢市佐倉河字祇園	平安	集落跡　土師器・須恵器
25	NE06－1277	権現堂	水沢市佐倉河字権現堂	奈良	集落跡　土師器
26	NE06－1289	八幡巾	水沢市佐倉河字八幡巾	縄文	集落跡　縄文土器(後期)等
27	NE06－2320	藤古	水沢市佐倉河字藤古	縄文・平安	集落跡　須恵器
28	NE06－2341	白井坂Ⅰ	水沢市佐倉河字白井坂	中世	城館跡　空堀・複郭
29	NE06－2351	白井坂Ⅱ	水沢市佐倉河字白井坂	中世	城館跡　空堀・複郭
30	NE06－2378	吹張Ⅰ	水沢市佐倉河字吹張	平安	散布地　土師器
31	NE06－2383	吹張Ⅱ	水沢市佐倉河字吹張	平安	散布地　土師器
32	NE16－0305	下河原館	水沢市佐倉河字下河原館	縄文	散布地　縄文土器(晩期)
33	NE16－0304	東館Ⅰ	水沢市佐倉河字東館	中世	散布地　陶器
34	NE16－0315	東館Ⅱ	水沢市佐倉河字東館	平安	散布地　土師器
35	NE16－0324	根岸	水沢市佐倉河字根岸	縄文	散布地　縄文土器(晩期)等
36	NE16－0323	天井ノ町	水沢市佐倉河字天井ノ町	縄文	散布地　縄文土器
37	NE16－0333	瓦ヶ田	水沢市佐倉河字瓦ヶ田	縄文	散布地　縄文土器(晩期)
38	NE16－0339	仙人西	水沢市佐倉河字仙人	平安	集落跡　土師器・須恵器
39	NE16－0353	車堂	水沢市佐倉河字車堂	縄文	散布地　縄文土器
40	NE16－0381	下河原釜石	水沢市佐倉河字釜石	平安	散布地　土師器
41	NE16－1303	嶋館西	水沢市佐倉河字嶋館	縄文・平安	散布地　土師器・須恵器等
42	NE16－0365	佐野原	水沢市佐倉河字佐野原	縄文・平安	集落跡　土師器・須恵器等
43	NE17－0032	仙人東	水沢市佐倉河字仙人	弥生・平安	集落跡　土師器・須恵器等
44	NE17－0043	沢田	水沢市佐倉河字沢田	縄文・平安	散布地
45	NE17－0063	東鍛冶屋	水沢市佐倉河字東鍛冶屋	縄文・平安	散布地　土師器・石器
46	NE17－0076	蟹沢	水沢市佐倉河字蟹沢	平安	集落跡　須恵器
47	NE17－0087	蟹沢Ⅱ	水沢市佐倉河字蟹沢	縄文	散布地　フレーク
48	NE17－0051	南桜沢	水沢市佐倉河字南桜沢	平安	散布地　土師器・須恵器
49	NE17－0081	高谷	水沢市佐倉河字高谷	縄文・平安	散布地　土師器・須恵器等
50	NE16－0388	道下東	水沢市佐倉河字道下東	縄文	散布地　縄文土器・石器
51	NE16－1309	嶋館東	水沢市佐倉河字嶋館	縄文	散布地　縄文土器
52	NE16－1319	嶋館	水沢市佐倉河字嶋館	中・近世	城館跡　堀・土塁
53	NE17－0095	矢中	水沢市佐倉河字矢中	平安	散布地　土師器・須恵器
54	NE17－1014	矢中Ⅱ	水沢市佐倉河字矢中	縄文	散布地　フレーク
55	NE17－1026	惣前町	水沢市佐倉河字惣前町	弥生・平安	散布地　土師器
56	NE17－1028	杉ヶ崎	水沢市佐倉河字杉ヶ崎	縄文・平安	散布地　土師器・フレーク
57	NE17－1055	横枕	水沢市佐倉河字横枕	縄文・平安	散布地　土師器・須恵器等
58	NE17－1047	中前田	水沢市佐倉河字中前田	弥生・平安	集落跡　弥生土器・土師器等
59	NE17－1057	東袖ノ目	水沢市佐倉河字東袖ノ目	平安	集落跡　土師器
60	NE17－1180	久根妻	水沢市佐倉河字久根妻	奈良	散布地　非ロクロ土師器等
61	NE16－0102	面塚	水沢市佐倉河字面塚	古墳・奈良	散布地　土師器・須恵器
62	NE16－ 073	高山	水沢市佐倉河字高山	古墳	集落跡　竪穴住居跡・土師器
63	NE16－0067	西大畑	水沢市佐倉河字西大畑	古墳・平安	集落跡　土師器・須恵器
64	NE16－0097	五千刈	水沢市佐倉河字五千刈	縄文	散布地　縄文土器
65	NE16－0160	西館	水沢市佐倉河字西館	平安	散布地　土師器
66	NE16－1101	稲荷田	水沢市佐倉河字稲荷田	平安	散布地　土師器
67	NE16－0177	幅下	水沢市佐倉河字幅下	縄文	散布地　縄文土器(中期)
68	NE16－1109	里槍	水沢市佐倉河字里槍	縄文	集落跡　縄文土器(晩期)等
69	NE16－0243	西光田Ⅰ	水沢市字西光田	平安	集落跡　土師器・須恵器
70	NE16－0244	道本	水沢市佐倉河字道本	平安	散布地　土師器・須恵器
71	NE16－0252	東幅	水沢市佐倉河字東幅	縄文	散布地　縄文土器
72	NE16－0265	久田	水沢市佐倉河字久田	平安	散布地　土師器・須恵器
73	NE16－0276	南久田	水沢市佐倉河字久田	平安	散布地　土師器・須恵器
74	NE16－0284	中城	水沢市字中城	縄文	散布地　縄文土器
75	NE16－2206	女子高校跡地	水沢市字搦手町	平安	散布地　土師器・須恵器
76	NE16－2254	新小路	水沢市字新小路	縄文	散布地　縄文土器(晩期)等
77	NE16－2308	石橋	水沢市佐倉河字石橋	平安	集落跡　土師器・須恵器
78	NE17－2033	常磐広町	水沢市佐倉河字広町	弥生・奈良・平安	散布地　弥生土器・石鏃・管玉

No.	遺跡台帳	遺 跡 名	所　在　地	時　代	内　　容
79	NE17－2018	北田Ⅰ	水沢市佐倉河字北田	平安	集落跡　須恵器
80	NE17－2038	北田Ⅱ	水沢市佐倉河字北田	弥生・奈良・平安	散布地　土師器・鉄滓
81	NE17－2047	野田	水沢市佐倉河字野田	縄文・平安	散布地　土師器・石鏃
82	NE17－2140	北田Ⅲ	水沢市佐倉河字北田	弥生・平安	集落跡　弥生土器・土師器
83	NE17－2152	跡呂井御蔵場	水沢市佐倉河字瀬ノ上	縄文	集落跡　縄文土器(後期)等
84	NE17－2063	蛇塚	水沢市佐倉河字中陣馬	不明	塚跡　メノウ勾玉
85	NE17－2087	跡呂井	水沢市神明町	中世	城館跡　空堀・複郭
86	NE27－0100	杉の堂	水沢市佐倉河字杉の堂	縄文・平安	散布地　縄文土器(後・晩期)
87	NE27－0078	沼尻	水沢市真城字沼尻	平安	散布地　土師器
88	NE27－0098	大学Ⅰ	水沢市真城字大学	縄文・平安	集落跡　土師器・須恵器等
89	NE27－1029	大学Ⅱ	水沢市真城字大学	縄文・平安	散布地　土師器・フレーク
90	NE27－1029	垣ノ内Ⅱ	水沢市真城字垣ノ内	縄文・平安	散布地　縄文土器・土師器等
91	NE27－1047	垣ノ内Ⅰ	水沢市真城字垣ノ内	中世	散布地　陶器
92	NE27－1069	石名坂	水沢市姉体町字石名坂	縄文	集落跡　縄文土器・石鏃
93	NE27－2039	上姉体館	水沢市姉体町字寺田	中世	城館跡　空堀・複郭
94	NE27－2069	大内田前	水沢市姉体町字大内田	平安	散布地　土師器・須恵器
95	NE27－2154	姉体車堂Ⅲ	水沢市姉体町字車堂	平安	散布地　土師器・須恵器・須恵器
96	NE27－2196	北白山	水沢市姉体町字北白山	平安	散布地　土師器・須恵器
97	NE37－0143	目細	水沢市姉体町字目細	平安	散布地・環濠・須恵器等
98	NE27－2194	元天神前Ⅱ	水沢市姉体町字天神前	平安	散布地　土師器・須恵器
99	NE27－2152	姉体車堂Ⅱ	水沢市姉体町字車堂	平安	散布地　土師器・須恵器
100	NE27－2048	小水ノ口	水沢市字水ノ口	平安	散布地　土師器・須恵器
101	NE27－2053	水の口	水沢市姉体町字水の口	平安	散布地　須恵器
102	NE27－2079	水ノ口前東	水沢市字水ノ口	平安	散布地　土師器
103	NE37－0113	根無	水沢市姉体町字根無	平安	散布地　土師器・須恵器
104	NE37－0099	島田Ⅰ	水沢市真城字島田	平安	散布地　土師器・須恵器
105	NE37－0074	寺ヶ前Ⅲ	水沢市真城字谷地田	平安	散布地　土師器
106	NE37－0072	寺ヶ前Ⅱ	水沢市真城字谷地田	平安	散布地　土師器
107	NE37－0093	寺ヶ前Ⅰ	水沢市真城字谷地田	平安	散布地　土師器
108	NE27－2092	北野Ⅱ	水沢市真城字北野	平安	集落跡　土師器・須恵器等
109	NE26－2389	北野Ⅲ	水沢市真城字北野	平安	集落跡　土師器・須恵器
110	NE27－2387	金田Ⅰ	水沢市真城字金田	平安	集落跡　土師器・須恵器
111	NE27－2359	日立構内	水沢市真城字北野	縄文	集落跡　縄文土器
112	NE27－2051	向田	水沢市姉体町字向田	平安	散布地　須恵器
113	NE27－2024	林前Ⅱ	水沢市姉体町字林前	平安	散布地　土師器・須恵器
114	NE27－2001	林前南館	水沢市姉体町字林前	縄文・平安	城館跡　土師器・石器
115	NE27－1070	林前Ⅰ	水沢市姉体町字林前	平安	集落跡　土師器・須恵器
116	NE27－1084	林前館	水沢市姉体町字林前	中世	城館跡　単郭
117	NE27－1044	北余目	水沢市姉体町字北余目	平安	散布地　土師器
118	NE36－1200	堤ヶ沢Ⅰ	水沢市真城字堤ヶ沢	平安	集落跡　土師器・須恵器
119	NE36－0280	堤ヶ沢Ⅱ	水沢市真城字堤ヶ沢	平安	集落跡　土師器・須恵器
120	NE36－0283	中林Ⅲ	水沢市真城字中林	平安	散布地　土師器・須恵器
121	NE36－0253	中林Ｂ	水沢市真城字中林	平安	集落跡　土師器・須恵器
122	NE36－0245	中林Ａ	水沢市真城字中林	平安	集落跡　土師器・須恵器
123	NE36－0206	黒田助	水沢市真城字黒田助	縄文	散布地　縄文土器・石鏃
124	NE26－2269	雷神Ⅰ	水沢市真城字雷神	平安	集落跡　土師器・須恵器
125	NE26－2362	高田	水沢市真城字高田	平安	集落跡　土師器・須恵器
126	NE26－2341	大壇	水沢市真城字大壇	平安	集落跡　土師器・須恵器
127	NE26－2321	上野	水沢市真城字上野	平安	散布地　土師器・須恵器
128	NE26－1320	須江	水沢市真城字須江	平安	集落跡　土師器・須恵器
129	NE26－0342	梨畑	水沢市東上野町	縄文・平安	散布地　縄文土器(中期)等
130	NE26－0350	小山崎	水沢市真城字小山崎	縄文・平安	散布地　縄文土器(中期)等
131	NE26－0269	東上野	水沢市東上野町	縄文	散布地　縄文土器(中期)等
132	NE26－0256	駒形神社公園	水沢市東上野町	縄文	散布地　縄文土器(中期)等
133	NE26－0220	駈上	水沢市西上野町	縄文	散布地　縄文土器(早期)
134	NE26－0126	高屋敷	水沢市字高屋敷	平安	集落跡　土師器・須恵器
135	NE26－0124	北田	水沢市佐倉河字北田	縄文・平安	集落跡　縄文土器・土師器等
136	NE26－0123	南矢中Ⅱ	水沢市字南矢中	平安	集落跡　土師器・須恵器

No.	遺跡台帳	遺 跡 名	所　在　地	時　代	内　　容
137	NE26－0039	南矢中	水沢市字南矢中	平安	集落跡　土師器・須恵器
138	NE16－2182	一本杉	水沢市字大明神	平安	散布地　土師器
139	NE16－2141	後田	水沢市字後田	平安	集落跡　土師器・須恵器
140	NE16－2111	水山	水沢市字水山	平安	散布地　土師器
141	NE16－2059	足袋針Ⅱ	水沢市字足袋針	平安	集落跡　土師器・須恵器
142	NE16－2018	石田	水沢市字西光田	奈良・平安	散布地　土師器
143	NE16－2066	足袋針Ⅰ	水沢市字足袋針	縄文・平安	集落跡　縄文土器・土師器等
144	NE16－2075	大明神Ⅱ	水沢市字大明神	平安	集落跡　土師器・須恵器
145	NE16－2053	西光田Ⅲ	水沢市字西光田	平安	散布地　土師器
146	NE16－2043	西光田Ⅱ	水沢市字西光田	平安	集落跡　土師器・須恵器
147	NE16－2023	西光田Ⅰ	水沢市字西光田	平安	散布地　土師器・須恵器
148	NE16－2016	寺領	水沢市字寺領	奈良・平安	散布地　土師器・須恵器
149	NE15－2308	石田Ⅰ・Ⅱ	胆沢町南都田字石田	平安	散布地　土師器・須恵器
150	NE15－1394	机地	胆沢町南都田字机地	奈良・平安	散布地　土師器
151	NE15－1362	堰田	胆沢町南都田字堰田	平安	散布地　土師器
152	NE15－2312	沢田	胆沢町南都田字沢田	奈良・平安	散布地　土師器
153	NE15－2353	宇南田	胆沢町南都田字宇南田	平安	集落跡　土師器
154	NE26－0035	鶴田Ⅰ	胆沢町南都田字鶴田	平安	散布地　土師器
155	NE26－0043	鶴田古墳群	胆沢町南都田字鶴田	奈良	古墳群　末期古墳
156	NE26－0041	鶴田Ⅱ	胆沢町南都田字鶴田	縄文・平安	散布地　縄文土器・土師器等
157	NE25－0367	浅野前	胆沢町南都田字浅野	縄文・古代	散布地　縄文土器・土師器等
158	NE25－0387	浅野	胆沢町南都田字浅野	縄文・古代	散布地　縄文土器・土師器等
159	NE25－1313	方子坂	胆沢町南都田字片子坂	縄文・古代	散布地　縄文土器・土師器等
160	NE26－0054	濁川	胆沢町南都田字濁川	縄文・平安	集落跡　縄文土器・土師器等
161	NE26－0048	西田Ⅰ	水沢市字西田	平安	集落跡　土師器・須恵器
162	NE26－0150	西田Ⅱ	水沢市字西田	平安	集落跡　土師器・須恵器
163	NE26－0170	前谷地	水沢市字前谷地	平安	集落跡　土師器・須恵器
164	NE26－0175	福原	水沢市字福原	平安	集落跡　土師器・須恵器
165	NE26－1101	袖谷地Ⅳ	水沢市字袖谷地	縄文・平安	集落跡　土師器・須恵器等
166	NE26－1019	袖谷地Ⅰ	水沢市字袖谷地	平安	集落跡　土師器・須恵器
167	NE26－1017	袖谷地Ⅲ	水沢市字袖谷地	平安	集落跡　土師器・須恵器
168	NE26－1025	袖谷地Ⅱ	水沢市字袖谷地	平安	散布地　土師器・須恵器等
169	NE26－1064	森下Ⅱ	水沢市字森下	縄文	散布地　縄文土器(前期)
170	NE25－1020	合野	胆沢町南都田字合野	縄文	散布地　縄文土器・石鏃
171	NE25－1375	見分森	水沢市字見分森	平安	生産跡　土師器・須恵器
172	NE26－2098	中島	胆沢町小山字大深沢	縄文・古代	散布地　縄文土器(中期)等
173	NE36－1032	壇山	胆沢町小山字斉藤	縄文・古代	散布地　縄文土器・土師器等
174	NE26－2189	南笹森	胆沢町小山字南笹森	縄文	散布地　縄文土器・石鏃等
175	NE26－1199	附野森	胆沢町小山字附野森	縄文・中世	散布地　縄文土器・陶磁器
176	NE26－1254	龍ヶ馬場	水沢市龍ヶ馬場	平安	集落跡　土師器・須恵器



第５図　周辺の遺跡　　１：50,000 北上・水沢

Ⅲ　調査と室内整理の方法

1　調査方法

(1)調査区の地区割りと遺構の命名

調査区の地区割りの設定は以下のようにおこなった。公共座標軸第Ｘ系上の１点（Ｘ＝－97,650.000，Ｙ＝26,340.000）を原点とし、南北、東西に平行する直線で40ｍ毎に区切り、大グリッドとした。この大グリッドをさらに４ｍごとに区切り、小グリッドとした。グリッドの名称は北から南に１，２，３、西から東にＡ，Ｂ，Ｃとし、グリッド名を１Ａ、２Ｂとした。小グリッドは大グリッドごとに北から南に１，２，３，……10、西から東にａ，ｂ，ｃ……ｊとした。したがって、小グリッドの呼称は１Ａ２ｂ、３Ｃ４ｄ……のようになる。遺構名は検出順に番号を付し、１号竪穴住居跡、２号土坑、のように命名した。

(2)粗掘り

調査開始当初、調査区の畝に沿う形で２ｍ幅の試掘トレンチを入れ、その試掘トレンチを広げる形で遺構検出を進めた。表土除去作業には人力と重機を併用した。排土の移動には必要に応じて重機を用いた。

(3)精査と実測

検出した遺構には遺構名を付し、順次精査をおこなった。遺構の精査は竪穴住居跡、炭窯跡は４分法を、陥し穴状遺構、土坑は２分法を原則としたが、若干の例外もある。遺構の実測は簡易遣り方測量を原則とした。平面図は調査区区画線を基準とした１ｍ間隔の水糸を張って、それを測量基準線とした。土層断面図は水平水糸を張って、それを測量基準線とした。遺構のレベルは50㎝間隔を原則とし、必要に応じて計測箇所を設けている。出土遺物は遺構名、層位を記入して取り上げた。

(4)写真撮影

野外調査での写真撮影は、６×７㎝判１台（モノクロ）と35㎜判２台（モノクロ、カラー・リバーサル）の３台を１組として使用し、検出状況・埋土断面・完掘全景・遺物出土状況などを撮影した。

2　室内整理の方法

室内整理は遺物の注記からはじめ、次いで接合・復元・石膏入れの作業をおこなった。これらの作業が終わった段階で、遺物の仕分け・登録を行い、報告書掲載分について写真撮影をおこなった。また、保存処理の必要な木製品・鉄製品については外注した。その後、遺物実測、土器拓本、遺物・遺構トレースの順に作業を進め、最後に図版や写真図版を作成した。以下の作業と平行して、計測・原稿作成をおこない、報告書に掲載した。

(1)遺物の縮尺は２/５を原則としているが、器種の大小によって縮尺を変えたものもある。なお土師器の器面調整については、14頁のような表現方法を用いた。

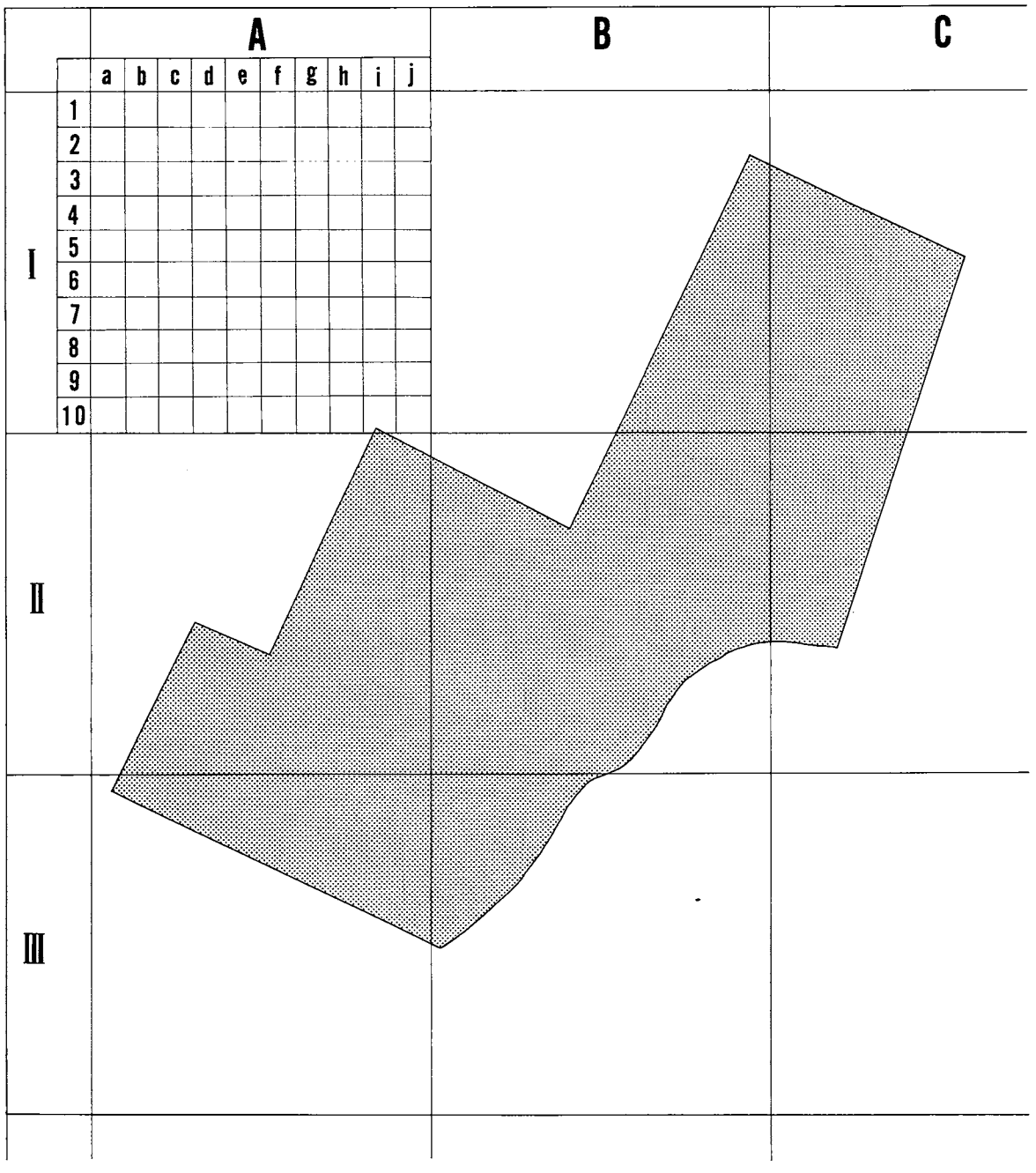
(2)遺構図面の処理と遺構図版の作成

図面は原図の点検後、修正・合成をおこない、その後トレース、遺構図版の作成の順に整理した。遺構の縮尺は竪穴住居跡・炭窯跡は１/50、陥し穴状遺構・土坑は１/40、竪穴住居跡のカマド断面は１/25であるが、その他は適宜縮尺を変えて掲載した。図中の撹乱箇所・焼土・炭化材の分布範囲には次頁のようなスクリーントーンを使用した。

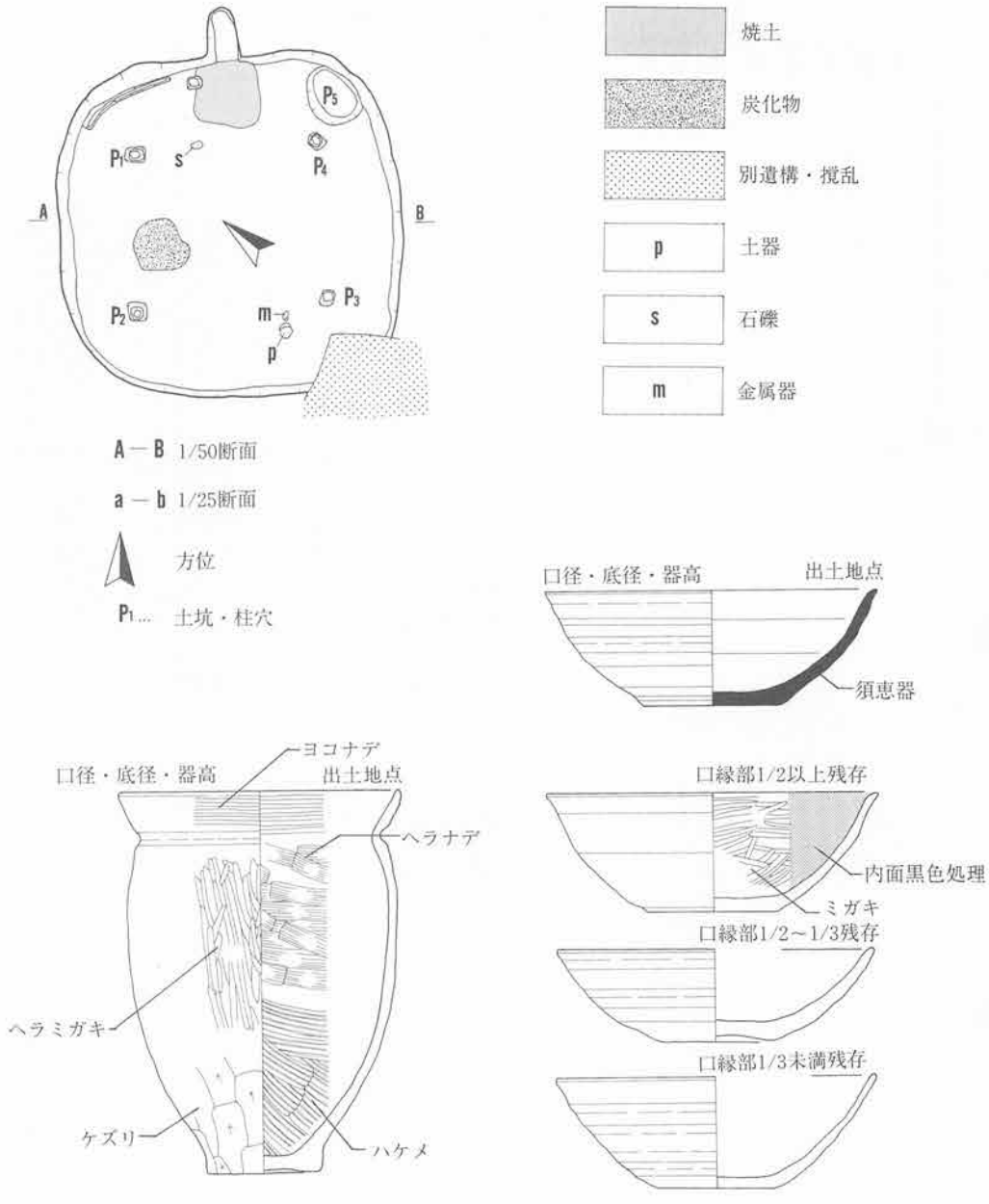
(3)写真図版

遺構・遺物とも縮尺は不定である。遺物写真の番号は遺物図版の番号と一致している。

原点；X=－97.650，Y=26.340



第６図　調査範囲・グリッド配置図


P5
P1
s
P4
A
B
P2
m
P3
p
A－B 1/50断面
a－b 1/25断面
方位
P1… 土坑・柱穴
焼土
炭化物
別遺構・攪乱
p 土器
s 石礫
m 金属器
口径・底径・器高
出土地点
須恵器
ヨコナデ
口径・底径・器高
出土地点
ヘラナデ
ヘラミガキ
ケズリ
ハケメ
口縁部1/2以上残存
内面黒色処理
ミガキ
口縁部1/2～1/3残存
口縁部1/3未満残存

遺構・土器実測図凡例

第７図　龍ケ馬場遺跡遺構配置図

Ⅳ　調査の結果

1．陥し穴状遺構

1号陥し穴状遺構

遺構（第8図、写真図版2）

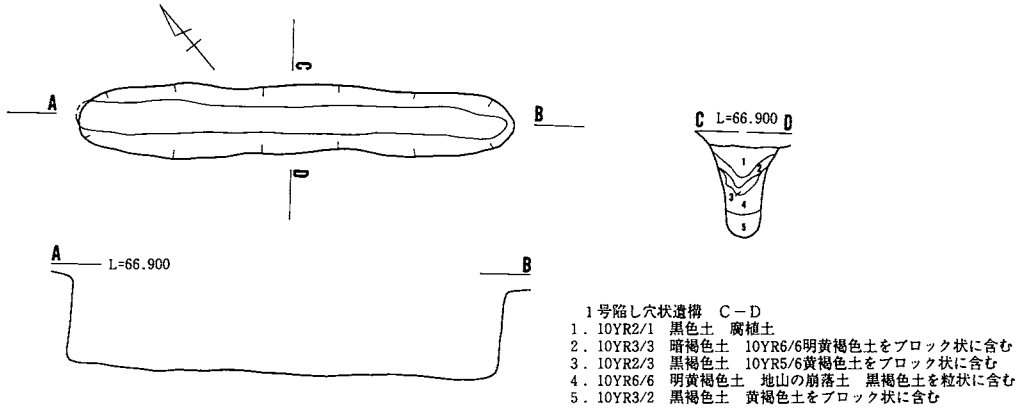
〈位置と残存状況〉 ⅡＢ5eほか。

〈形状と規模〉 平面形は北西－南東方向に長軸を持つ溝状を呈す。長軸方向はW－42°－Nである。規模は開口部の長軸方向が343cm、短軸方向が53cm、底部の長軸方向が342cm、短軸方向が22cm、深さが68cmである。

〈埋土〉 5層に分けられ、中位の第4層は崩落した地山起源の黄褐色土である。

〈遺物の出土〉 本遺構からの遺物出土はない。

〈時期〉 形態から縄文時代に属するものと考えられる。



第8図　1号陥し穴状遺構　平面・埋土断面

2．竪穴住居跡

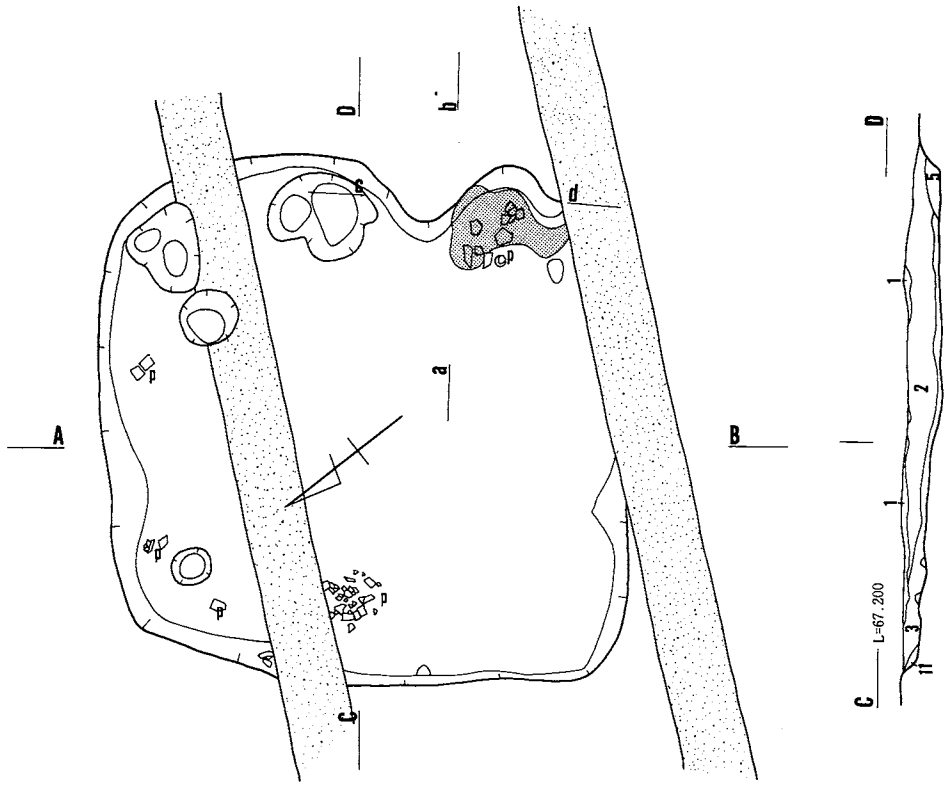
1号竪穴住居跡

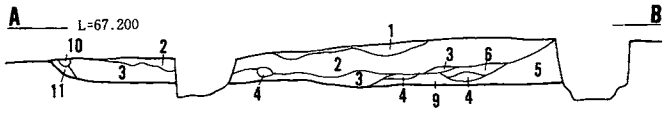
遺構（第9図、写真図版3，4）

〈位置と残存状況〉 ⅡＢ7ｃほか。後世の削平によって掘り込み面が削られており、カマドの煙道・壁の上部・南西壁の西半は耕作溝によって失われている。また、耕作溝によって床面まで撹乱されており、残存状況は不良であるが、壁面は失われておらず、平面形ははっきりしている。

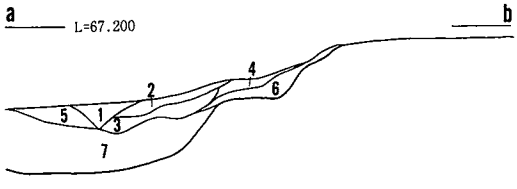
〈形状と規模〉 平面形は隅丸方形を呈する。規模は3.4×3.5mである。

〈埋土〉11層に細分される。黒褐色土主体である。灰白色火山灰の堆積層は第6層である。
〈壁〉床面から緩やかに立ち上げる。南西壁の西半は耕作溝によって失われている。壁高は北東壁が16㎝、北西壁が9㎝、南西壁が残存部で29㎝、南東壁が17㎝である。
〈床〉貼り床である。貼り床の下からは土坑が検出されている。
〈柱穴・土坑〉柱穴状土坑は4基検出したが、遺構の東半に集中しており、柱穴配置は不明である。また、貼り床の下からは柱穴状土坑より規模の大きい土坑を検出したが、埋土表面には焼土が形成されており、住居の使用時には埋められており、貯蔵穴その他の使用はなかったものと思われる。
〈カマド〉南東壁の南寄りに構築されている。地山から直接切り出されている。焼土の焼成は不良である。煙道・煙出しは後世の削平によって失われている。カマド燃焼部は貼り床下の土坑埋土の上に構築されている。カマドの右袖部は耕作溝によって一部が失われているが、左右の袖が同規模とすると、袖間の距離は95㎝である。
〈遺物の出土〉床面を中心に、カマド、柱穴埋土から出土している。土器・鉄製品で構成される。
〈時期〉出土遺物・埋土の状況から平安時代に属する。
遺物（第10，11図、写真図版17）
〈土器〉1～3は須恵器坏形土器。1は床面から出土した口縁部から底部にかけての破片。底径に比べ器高が大きく底部から口縁部までが緩やかな曲線的輪郭を持ち、口縁部がわずかに外反する厚手の器形。内外面とも無調整であるが、底面近くを再調整している。胎土は礫を含み、かなり粗い。2はカマドから出土した口縁部から底部にかけての破片。内外面とも無調整、底面には回転糸切り痕。胎土は緻密である。3は床面から出土。底部を欠く。底部から口縁部まで直線的な輪郭を持ち、やや厚手の器形。側面に回転糸切りの際の糸離し痕が残る。4、5はどちらも床面から出土した土師器坏形土器。いずれも体部が膨らむ曲線的輪郭を持ちややおおぶりの器形。内面はヘラミガキののち黒色処理を施している。4は底部外面はヘラケズリによる再調整を施している。6は大型の土師器甕形土器の胴部上位から口縁部にかけての破片。ロクロ仕上げの長胴甕で、内外面とも摩耗が著しい。外面は口縁部近くまで粗いヘラケズリ、内面はカキメ調整。7、8は小型の甕形土器。胎土・整形ともにかなり粗で、内外面とも無調整。口唇は上にのみ引き出される器形。8は底部に回転糸切り痕が残る。9も小型の土師器甕形土器の口縁部破片であるが、口縁部が大きく外反し口唇が僅かに外反する器形。10は土師器甕形土器の底部破片。内外面とも摩耗が著しいが、胴部最下位から底部にかけてタタキ目が残る。11はロクロ未使用の土師器甕形土器の底部破片。胎土は粗で外面はケズリ、内面はハケメ調整。底部がハの字形に広がる器形。12、13は大型の土師器甕形土器。いずれもロクロ仕上げの長胴甕である。12は胴部中央に最大径を持ち、器高・口径に比べ底径が非常に小さい器形である。口縁は緩やかに引き出されている。口唇部の引き出しはやや明瞭である。外面は頸部と胴部の最下位にタタキ目の跡が残り、全体をタタキ調整したのち、胴部最下位から頸部近くまでをヘラケズリ調整したものと思われる。内面は縦方向にハケメ調整を施している。13は底部を欠くが、口縁部に最大径を持つ器形。口縁は緩やかに引き出されている。口唇部の引き出しは明瞭である。外面の調整は頸部から胴部上位はロクロ目のみであるが、胴部の中位にタタキ目の跡が残り、全体をタタキ調整したのち、頸部から体部上位をロクロ目調整、胴部最下位から胴部の中位までをヘラケズリ調整したものと思われる。内面は横方向のヘラナデ調整。なお13は外面の頸部と胴部最下位に赤褐色の粘土が薄く付着している。
〈鉄製品〉14は床面壁際から出土した手斧である。

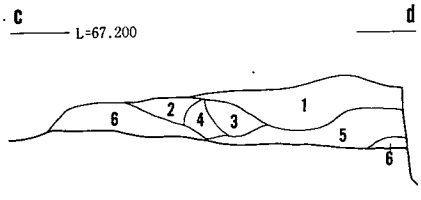




1号竪穴住居跡　A－B、C－D
1．10YR2/2　黒褐色土
2．10YR2/1　黒色土
3．10YR2/1　黒色土　灰白色火山灰を微量含む
4．10YR2/1　黒色土と灰白色火山灰の混合
5．10YR2/3　黒褐色土
6．灰白色火山灰
7．10YR2/1　黒色土と灰白色火山灰の混合
8．10YR2/1　黒色土　灰白色火山灰を微量含む
9．10YR2/1　黒色土　焼土粒、炭化物を微量含む
10．10YR6/6　明黄褐色粘質土ブロック
11．10YR6/6　明黄褐色粘質土と10YR2/1黒色土の混合

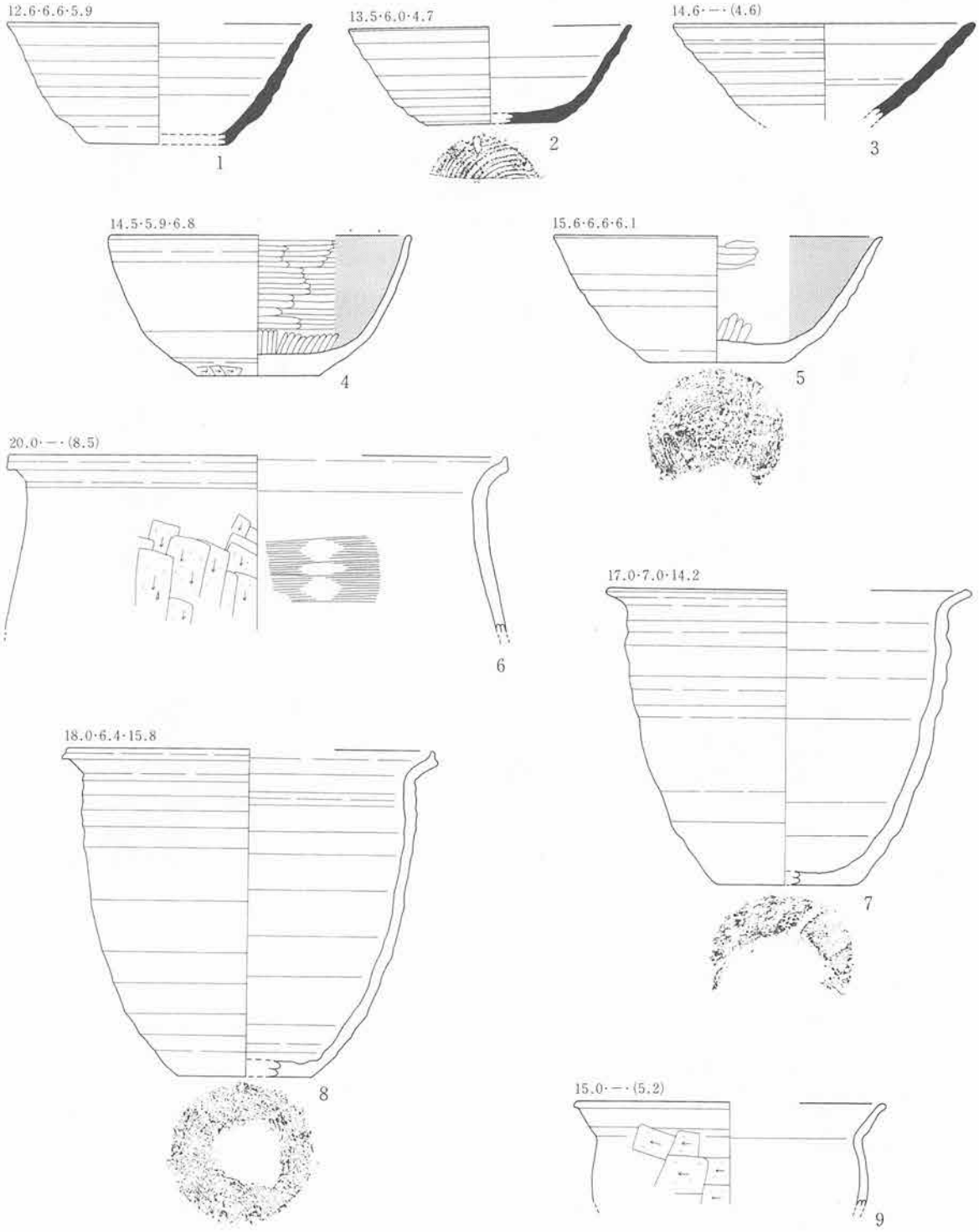


1号竪穴住居跡　a－b
1．5YR3/2　暗赤褐色焼土に5YR5/8明赤褐色焼土粒混じる
2．5YR4/6　赤褐色焼土
3．5YR2/4　極暗赤褐色焼土
4．7.5YR4/6　褐色焼土
5．7.5YR3/3　褐色焼土
6．5YR4/6　赤褐色焼土
7．7.5YR2/2　黒褐色土　10YR7/6明黄褐色粘質土ブロック含む　掘り方充填土

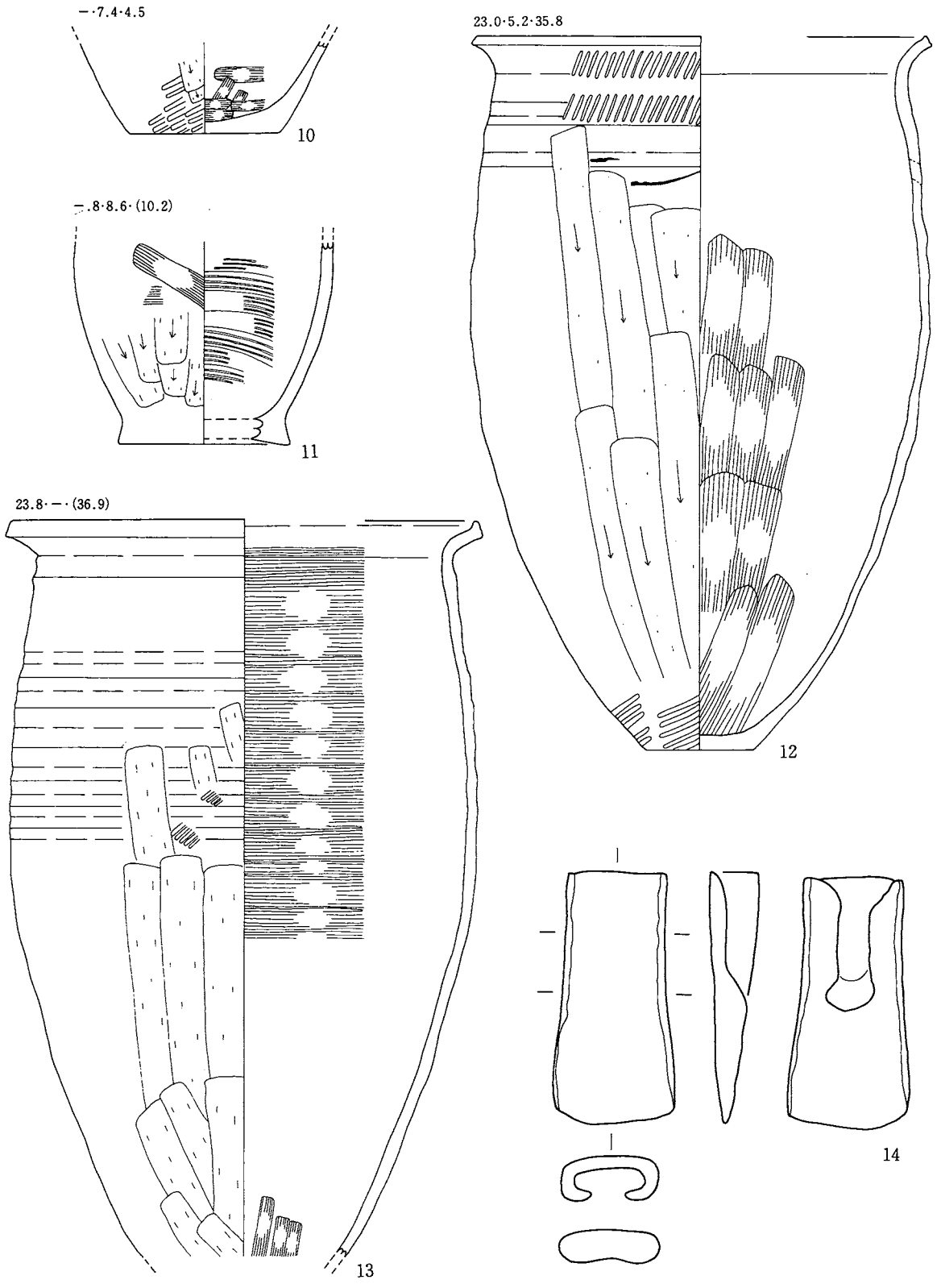


1号竪穴住居跡　c－d
1．2.5YR3/3　暗赤褐色焼土　2.5YR6/8橙色焼土ブロック状に含む
2．2.5YR4/6　赤褐色焼土　2.5YR6/8橙色焼土ブロック状に含む
3．2.5YR4/6　赤褐色焼土と10YR4/3暗褐色土の混合
4．10YR5/6　黄褐色土　10YR4/3暗褐色土を少量含む
5．2.5YR3/2　暗赤褐色焼土　5YR5/6明赤褐色焼土をブロック状に含む
6．10YR2/2　黒褐色土　カマド袖部

第9図　1号竪穴住居跡　平面・埋土・カマド断面



第10図　1号竪穴住居跡　出土遺物－1



第11図　1号竪穴住居跡　出土遺物ー2

2号竪穴住居跡

遺構（第12図、写真図版5）

〈位置と残存状況〉ⅡＡ８ｈほか。後世の削平によって掘り込み面が削られており、カマドの煙道・壁の上部・南壁が失われている。また、耕作溝によって床面まで撹乱されているが、本遺跡の他の竪穴住居跡と比較して掘り込みが深く、残存状況はやや良である。

〈形状と規模〉平面形は隅丸方形を呈する。規模は3.9×3.8m程度である。

〈埋土〉８層に細分される。黒褐色土主体である。灰白色火山灰の堆積層は第２層である。

〈壁〉床面から緩やかに立ち上がったのち直立する。南壁は全面が耕作溝によって失われている。壁高は東壁が24cm、北壁が13cm、西壁が34cmである。

〈床〉貼り床である。貼り床の下からは土坑が検出されている。

〈柱穴・土坑〉柱穴状土坑は２基検出したが、柱穴配置は不明である。貼り床下の土坑の埋土上にカマドの右袖が構築されており、貯蔵穴その他の使用はなかったもののと思われる。Ｐ1の埋土は黒褐色土の単層である。

〈カマド〉南壁の西隅寄りに構築されている。カマドの袖は黒褐色シルト・石に黄褐色粘質シルトを貼って築かれている。両袖間の距離は80cmで、焼土が形成されている。焼土の焼成は比較的良い。煙道・煙出しは後世の削平によって失われている。

〈遺物の出土〉埋土を中心にカマド、床面から出土している。土器で構成される。

〈時期〉出土遺物・埋土の状況から平安時代に属する。

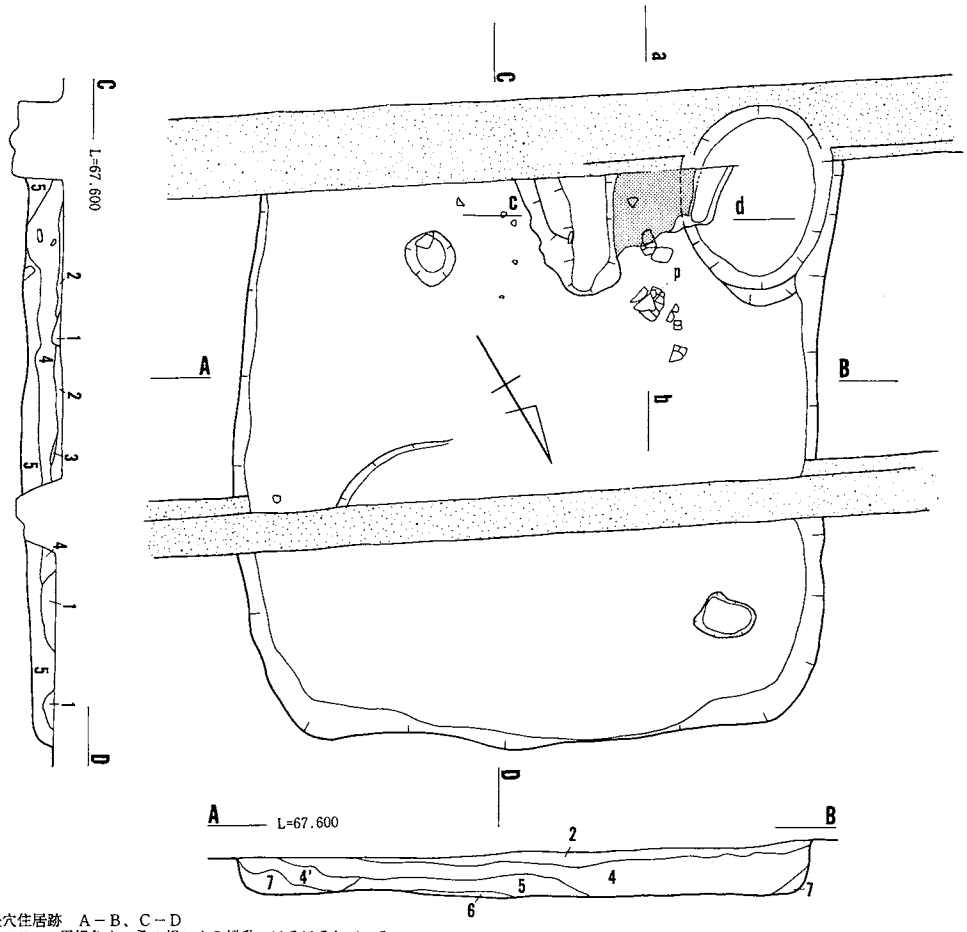
遺物（第13図、写真図版17，18）

〈土器〉15は埋土から出土した須恵器坏形土器の底部破片。底面は回転糸切り。胎土は緻密。16～18は土師器坏形土器。16、17は埋土からの、18はカマドからの出土。いずれも内面はヘラミガキののち黒色処理を施している。16、17はややこぶりの器形。18は体部が膨らむ曲線的輪郭を持ち、ややおおぶりの器形。17、18は底面再調整。19、20は大型の土師器甕形土器の口縁部から胴部上半にかけての破片。外面は浅いカキメの上をヘラケズリ、内面も浅いカキメ。焼成は良く、胎土も密。最大径を口縁に持ち、口縁部が胴部からほぼ急角度で外反し、口唇は上方に引き出されている。20は内外面ともカキメ調整、口縁部が胴部から急な角度で外反し、口唇は上下両方向に引き出されている。21は小型の土師器甕形土器であるが底部を欠く。最大径を口縁部に持つ器形。口縁部が胴部から急な角度で外反し、口唇は上方に引き出される。外面は無調整、内面は横方向にヘラナデ調整している。22は大型の土師器甕形土器の胴部から底部にかけての破片。胎土は砂粒を多く含み粗だが、非常に薄手である。外面は粗いヘラケズリ、内面はハケメ調整。胴部最下位に赤褐色粘土が薄く付着している。

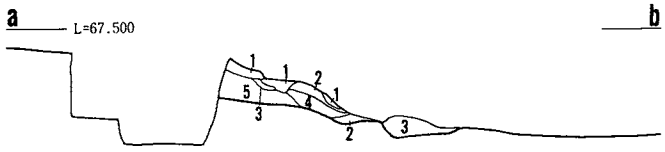
3号竪穴住居跡

遺構（第14図、写真図版6）

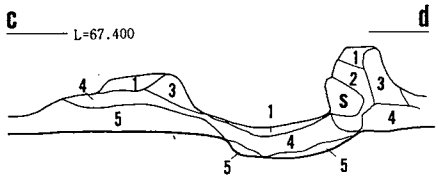
〈位置と残存状況〉ⅡＢ10ｄほか。ⅢＡ区北半からⅡＢ区東半を流れる用水路に近いため、湧水が著しく、埋土の粘質化が顕著である。後世の削平によって掘り込み面が削られており、カマドの煙道・壁の上部・南西壁の西半は耕作溝によって失われている。また、耕作溝によって床面まで撹乱されており、残存状況はきわめて不良である。



2号竪穴住居跡　A－B、C－D
1．10YR2/2　黒褐色土　桑の根による撹乱　ぼそぼそしている
2．10YR1.7/1　黒色土
3．灰白色火山灰
4．10YR2/2　黒褐色土
4'．10YR2/2　黒褐色土　炭化物が粒状に混じる
5．10YR2/3　黒褐色土　10YR6/8明黄褐色粘質土が粒状に混じる
6．10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土
7．10YR5/6　黄褐色粘質土　壁の崩落土

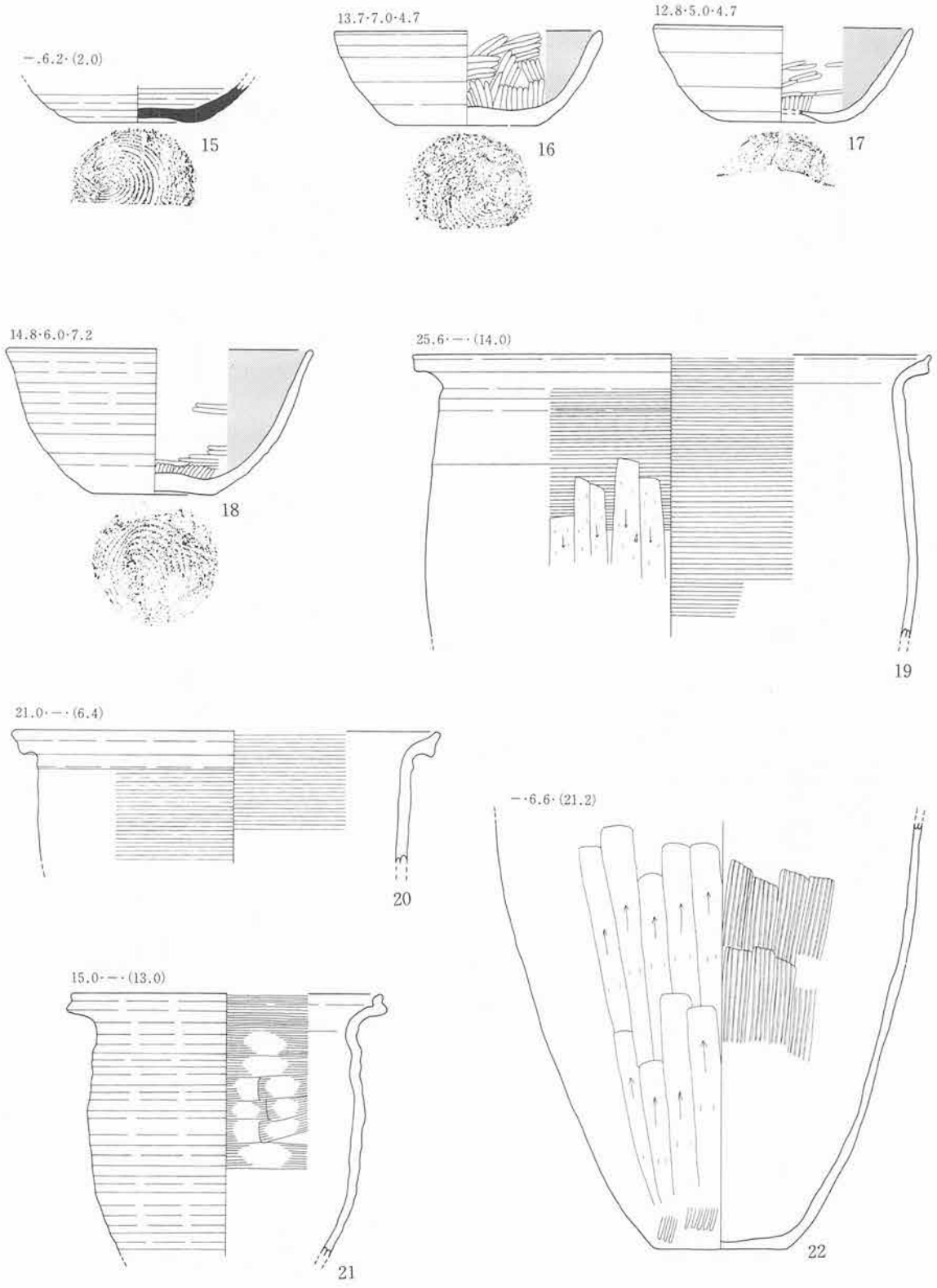


2号竪穴住居跡　a－b
1．2.5YR4/8　赤褐色焼土
2．7.5YR4/6　褐色焼土
3．7.5YR3/4　暗褐色土
4．7.5YR5/6　明褐色焼土
5．7.5YR2/2　黒褐色土　カマド袖の構成土



2号竪穴住居跡　c－d
1．5YR4/8　赤褐色焼土
2．7.5YR2/3　極暗褐色土
3．10YR4/4　褐色土と10YR6/6明黄褐色粘質土の混合
4．7.5YR3/2　黒褐色土
5．10YR5/6　黄褐色粘質土

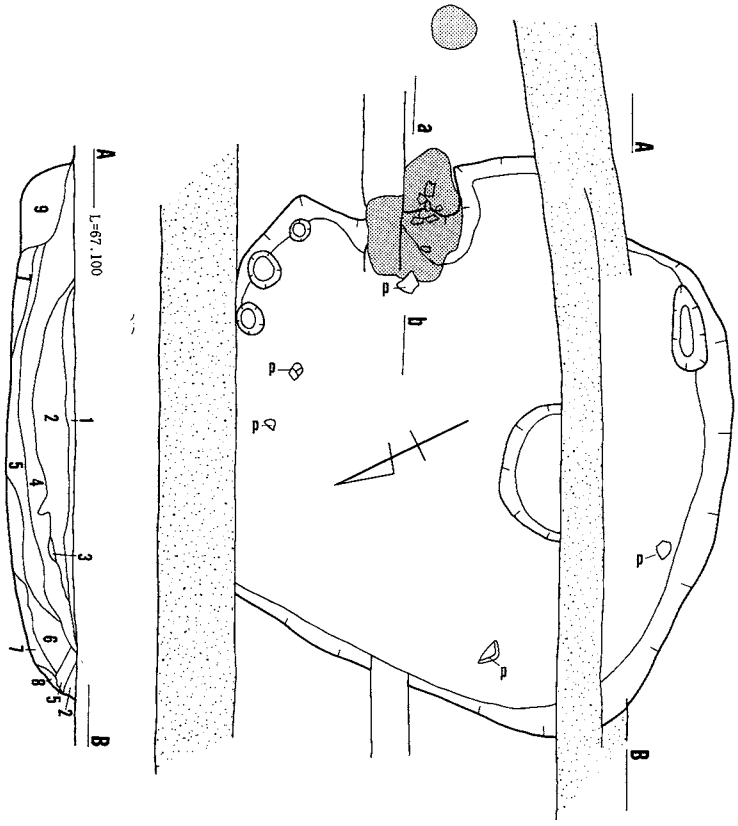
第12図　2号竪穴住居跡　平面・埋土・カマド断面



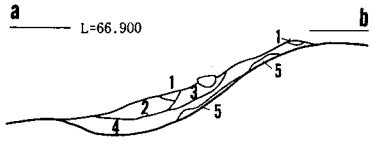
第13図　2号竪穴住居跡　出土遺物

〈 形状と規模〉 平面形は不整方形を呈する。規模は3.5×3.5mである。
〈埋土〉 8層に細分される。黒褐色土主体である。
〈壁〉 床面から緩やかに立ち上がる。北東壁の北半は耕作溝によって失われている。壁高は北西壁で37cm、南西壁で32cm、南東壁で35cmである。
〈床〉 貼り床と思われるが、埋土の粘質化が著しく、掘り方は明確でない。
〈柱穴・土坑〉 柱穴状土坑は3基検出したが遺構の東隅に集中しており、柱穴配置は不明である。
〈カマド〉 南東壁の北寄りに構築されている。地山から直接切り出されている。煙道・煙出しの掘り込みは後世の削平によって失われているが、カマドの燃焼部から南東1.5mほどに形成されている焼土は、煙道もしくは煙出しの痕跡と思われる。カマドの中央部分が耕作溝によって撹乱を受けているために、規模は不明である。
〈遺物の出土〉床面を中心にカマド、埋土から出土している。土器で構成されるが、地山からの湧水が著しく、土師器の残存状況は不良である。
〈時期〉 出土遺物・埋土の状況から平安時代に属する。出土した土器が隣接する1号炭窯から出土したものと接合しており、同時に存在していたものと考えられる。
遺物（第15図、写真図版18）
〈土器〉23は埋土から出土した須恵器坏形土器の底部破片。底面には回転糸切り痕が残るが、切り離しは雑で、ヘラ痕などが見られる。24、25は須恵器坏形土器であるが、いずれも焼成は不良で色調は灰白色を呈し、胎土もやや軟質。底部から体部が膨らむ曲線的輪郭を持つが、口縁が大きく外反し、厚手である。底部切り離しは回転糸切り。26は大型の土師器甕形土器の口縁部から体部上位にかけての破片。口縁部あるいは胴部上半に最大径をもつ長胴甕であるが、全体に摩耗が著しい。外面は体部上位からヘラケズリ、内面はカキメ調整。口縁は胴部から緩やかに張り出し、口唇は上方にわずかに引き出される。27は床面から出土した須恵器長頸瓶の体部上半の破片。外面はタタキののちヘラケズリ調整、内面はロクロ目のみ。成形は三段構造で、内面の体部最上位から頸部にかけて接合の際の指紋圧痕がみられる。28は床面から出土した須恵器壷形土器の体部下半の破片。接合した4片の破片のうち3片は1号炭窯の埋土から出土したものである。外面はタタキののちロクロ目、内面はロクロ目のみの調整。体部下半から底部にかけて自然釉が付着、底面には高台の剝離痕がみられる。

4号竪穴住居跡
遺構（第16図、写真図版7，8）
〈位置と残存状況〉 ⅡＡ９ｊほか。後世の削平によって掘り込み面が削られており、カマドの煙道・壁の上部・南壁が失われている。また、耕作溝によって床面まで撹乱されている。
〈形状と規模〉 平面形は長方形を呈する。規模は4.0×3.5mである。
〈埋土〉 8層に細分される。黒褐色土主体である。灰白色火山灰の堆積層は第2層である。
〈壁〉 床面から緩やかに立ち上がる。南壁は耕作溝によって失われている。壁高は東壁で17cm、北壁で14cm、西壁で12cmである。
〈床〉 貼り床である。貼り床の下から土坑を検出した。
〈柱穴・土坑〉 柱穴状土坑は1基検出したが、柱穴配置は不明である。貼り床の下の土坑は住居の使用時には埋められており、貯蔵穴その他の使用はなかったものと思われる。

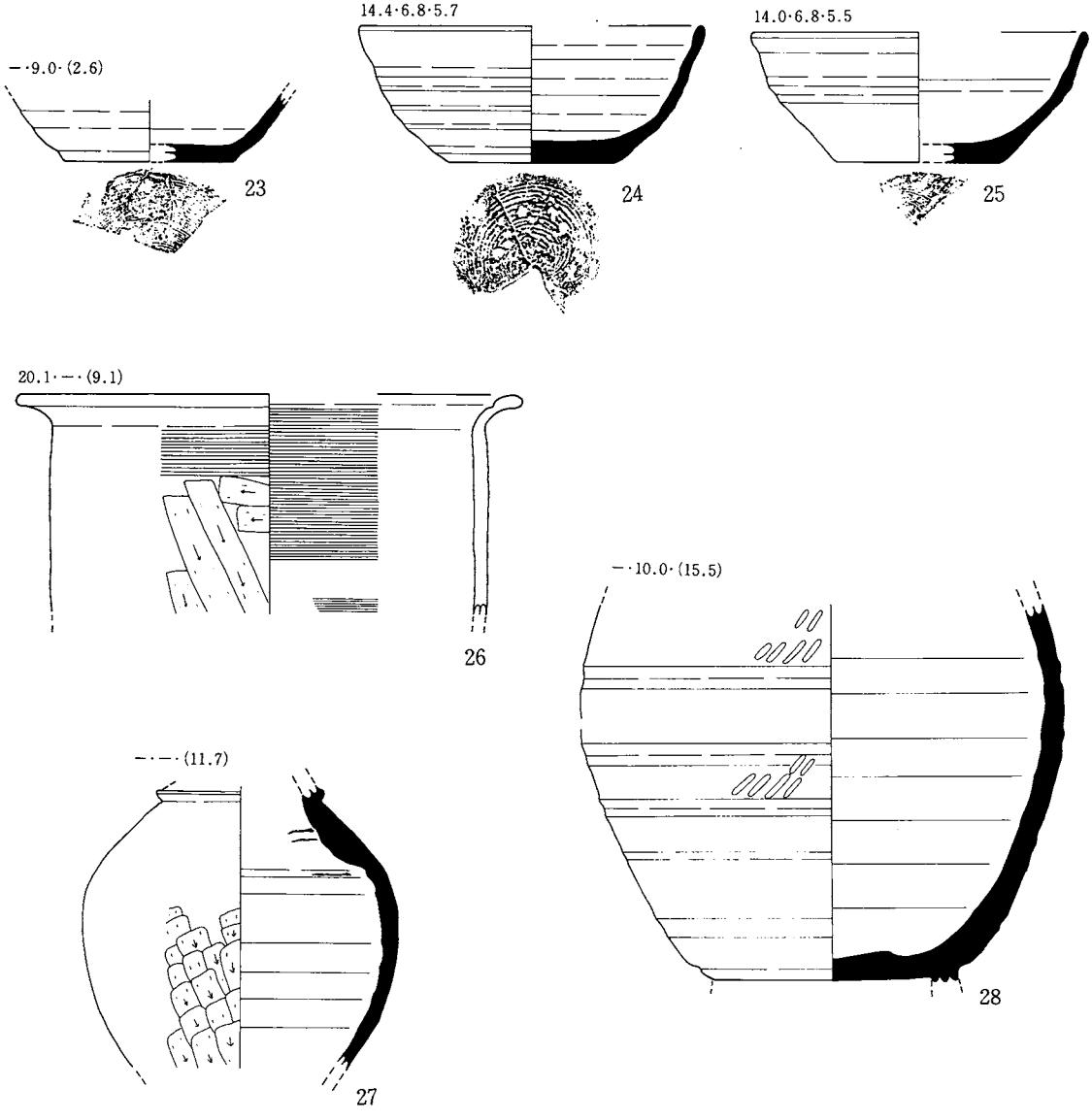


3号竪穴住居跡　A－B
1．10YR2/1　黒色土　腐植土
2．10YR3/1　黒褐色土
3．10YR5/2　灰黄褐色　灰白色火山灰を含む
4．10YR2/2　黒褐色土　焼土粒を若干含む
5．10YR2/3　黒褐色土　粘性あり　黄褐色土をブロック状に含む
6．10YR3/3　暗褐色土　粘性あり　黄褐色土をブロック状に含む
7．10YR2/2　黒褐色土　粘性つよい　炭化物を粒状に含む
8．2.5YR4/2　暗灰黄色粘土
9．2.5YR4/2　暗灰黄色粘土に10YR3/3　暗褐色土が混じる

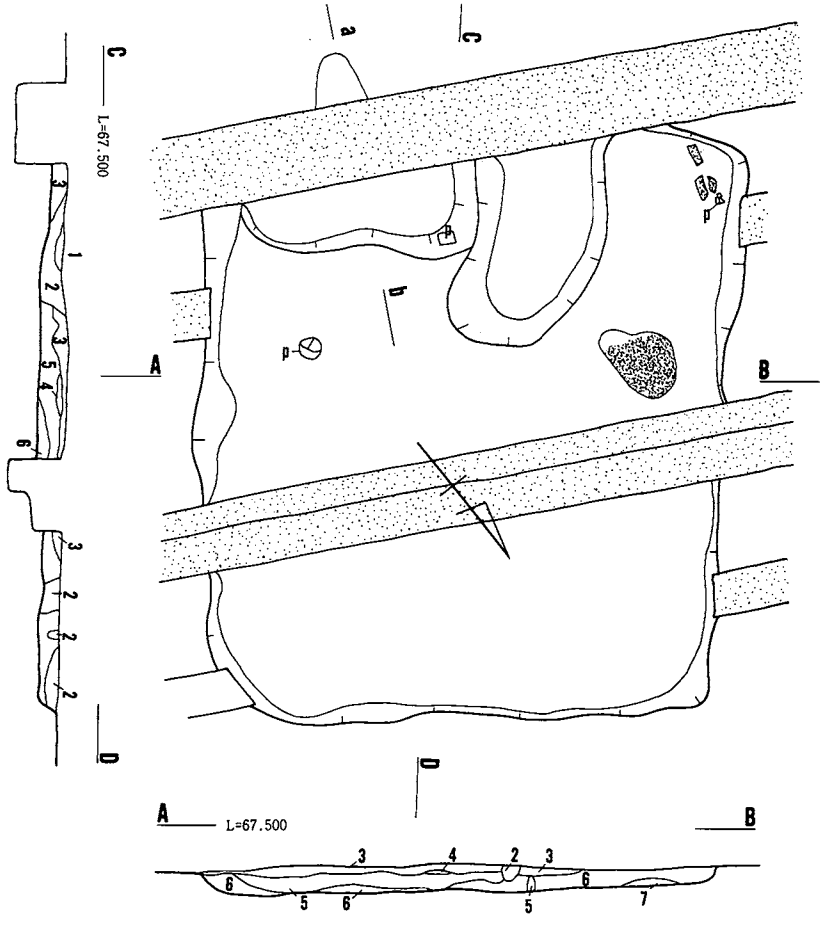


3号竪穴住居跡　a－b
1．2.5YR4/8　赤褐色焼土　きわめて硬い
2．7.5YR3/4　褐色焼土　焼成弱い
3．7.5YR5/8　明褐色焼土　粒子粗い
4．5YR5/8　明赤褐色　焼土　2より粒子細かい
5．7.5YR3/3　暗褐色　粘質土

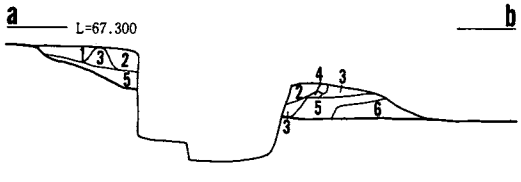
第14図　3号竪穴住居跡　平面・埋土・カマド断面



第15図　3号竪穴住居跡　出土遺物

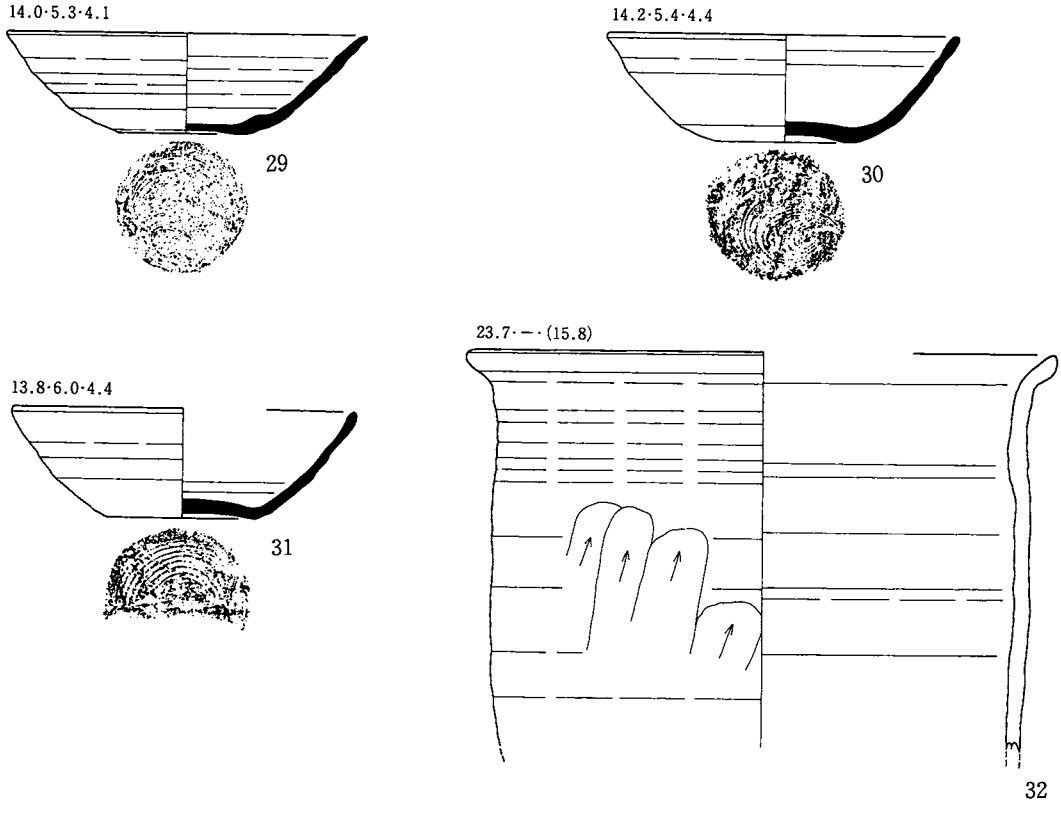


4号竪穴住居跡　A－B、C－D
1．10YR1.7/1　黒色土　腐植土
2．10YR2/1　黒色土　10YR5/6　黄褐色粘質土が粒状に混じる
3．10YR2/2　黒褐色土
4．灰白色火山灰
5．10YR2/2　黒褐色土　炭化物、焼土を微量含む
6．10YR2/1　黒色土
7．10YR1.7/1　黒色土　炭化物が多量に混じる



4号竪穴住居跡　a－b
1．5YR4/6　赤褐色焼土　硬くよく焼成されている
2．5YR2/4　極暗褐色焼土
3．7.5YR2/2　黒褐色土
4．7.5YR2/2　黒褐色土　焼土粒を微量含む
5．10YR1/2　黒色土
6．7.5YR2/2　黒褐色土

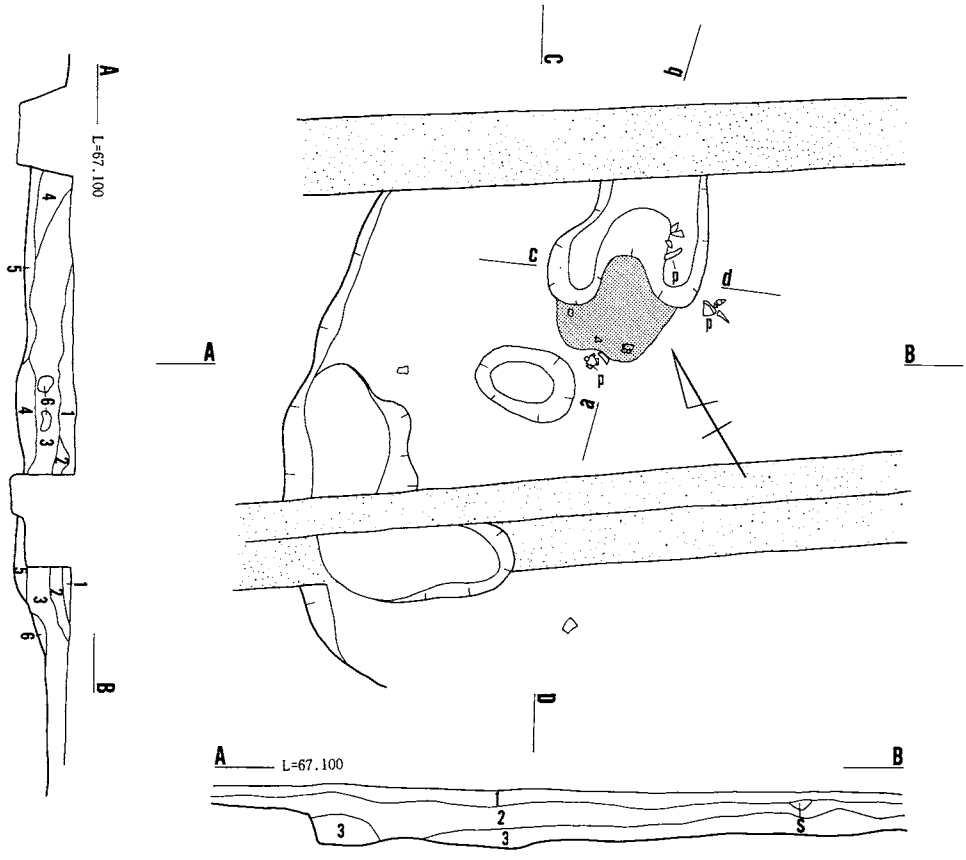
第16図　4号竪穴住居跡　平面・埋土・カマド断面



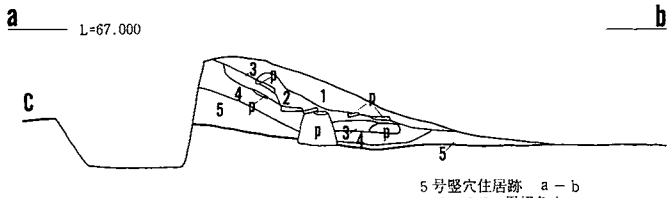
第17図　4号竪穴住居跡　出土遺物

〈カマド〉南壁の西隅寄りに構築されているが、耕作溝によってほとんどが削られている。カマドの袖は黒褐色シルト・石に黄褐色粘質シルトを貼って築かれている。両袖間の距離は140cm程度と思われる。
〈遺物の出土〉床面・土坑埋土から出土している。土器で構成される。
〈時期〉出土遺物・埋土の状況から平安時代に属する。
遺物（第17図、写真図版19）
〈土器〉29～31は須恵器坏形土器。いずれも内外面とも無調整で、底部切り離しは回転糸切り。29、30は底面から口縁まで緩やかな曲線的輪郭を持ち、口縁部はわずかに外反する。29は砂粒を含み胎土は粗いが、作りは丁寧である。色調は部分的に赤褐色、部分的に暗灰色を呈し、焼成にムラがあることを示している。30はＰ１からの出土。やはり口縁付近の色調は暗灰色を呈するが、体部から底部にかけては灰白色である。31はＰ５からの出土。底部から口縁部まで直線的な輪郭を持ち、やや厚手の器形。少し歪む。32は土師器甕形土器の口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁に最大径を持つ器形。表面の剝離が著しい。外面はヘラケズリ、内面は胴部最上位から口縁付近がカキメ、その下がハケメ調整。口縁は胴部から緩やかに張り出し、口唇は上方にごくわずかに引き出される。

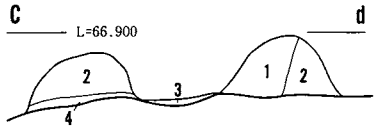
５号竪穴住居跡
遺構（第18図、写真図版９）
〈位置と残存状況〉ⅢＢ３ａほか。ⅢＡ区北半からⅡＢ区東半を流れる用水路に近いため、湧水が著しく、埋土の粘質化が顕著である。後世の削平によって掘り込み面が削られており、カマドの煙道・壁の上部・北西壁を除く３方は崩落によって失われている。また、耕作溝によって床面まで攪乱されており、残存状況はきわめて不良である。黒褐色土主体であるが、粘質化が著しい。灰白色火山灰の堆積層は第２層である。
〈形状と規模〉北西壁が残存するのみで、全体の形状は不明である。規模は残存する北西壁とカマドの距離などから４ｍ前後と推定される
〈埋土〉６層に細分される。黒褐色土主体であるが、粘質化が著しい。灰白色火山灰の堆積層は第２層である。
〈壁〉残存する北西壁は床面からほぼ直立して立ち上がる。壁高は21cmである。
〈床〉貼り床と思われるが、埋土の粘質化が著しく、掘り方は明確でない。
〈柱穴・土坑〉柱穴状土坑は検出されなかった。３基とも住居の使用時には埋められており、貯蔵穴その他の使用はなかったものと思われる。
〈カマド〉北東壁に構築されていたものと推定される。耕作溝によって煙道・煙出しは削られているが、カマドの袖部と燃焼部の残存状況は比較的良好である。カマドの袖は土師器甕形土器を芯材として黒褐色シルトに黄褐色粘質シルトを貼って築いている。
〈遺物の出土〉床面・カマドから出土している。土器で構成されるが、地山からの湧水が著しく、土師器の残存状況は不良である。
〈時期〉出土遺物・埋土の状況から平安時代に属する。出土した土器が隣接する１号炭窯から出土したものと接合しており(35)、同時に存在していたものと考えられる。
遺物（第19図、写真図版19）
〈土器〉33は須恵器坏形土器。器高に比べ口径・底径ともに大きいが、底面から口縁まで緩やかな曲線的輪郭を持つ器形。底部切り離しは回転糸切り。34はカマド燃焼部から出土した土師器甕形土器の口縁部から胴部上半にかけての破片。胴部上半に最大径を持つ長胴甕。外面はタタキののち頸部から体部上半にかけてカ



5号竪穴住居跡　A－B、C－D
1．10YR2/1　黒色土　植物根の混入
2．10YR2/2　黒褐色土
3．10YR2/1　黒色土
4．10YR2/2　黒褐色土　10YR7/3にぶい黄褐色粘質土少量含む
5．10YR7/3　にぶい黄褐色粘質土
6．10YR2/2　黒褐色土　焼土粒、炭化物を微量含む

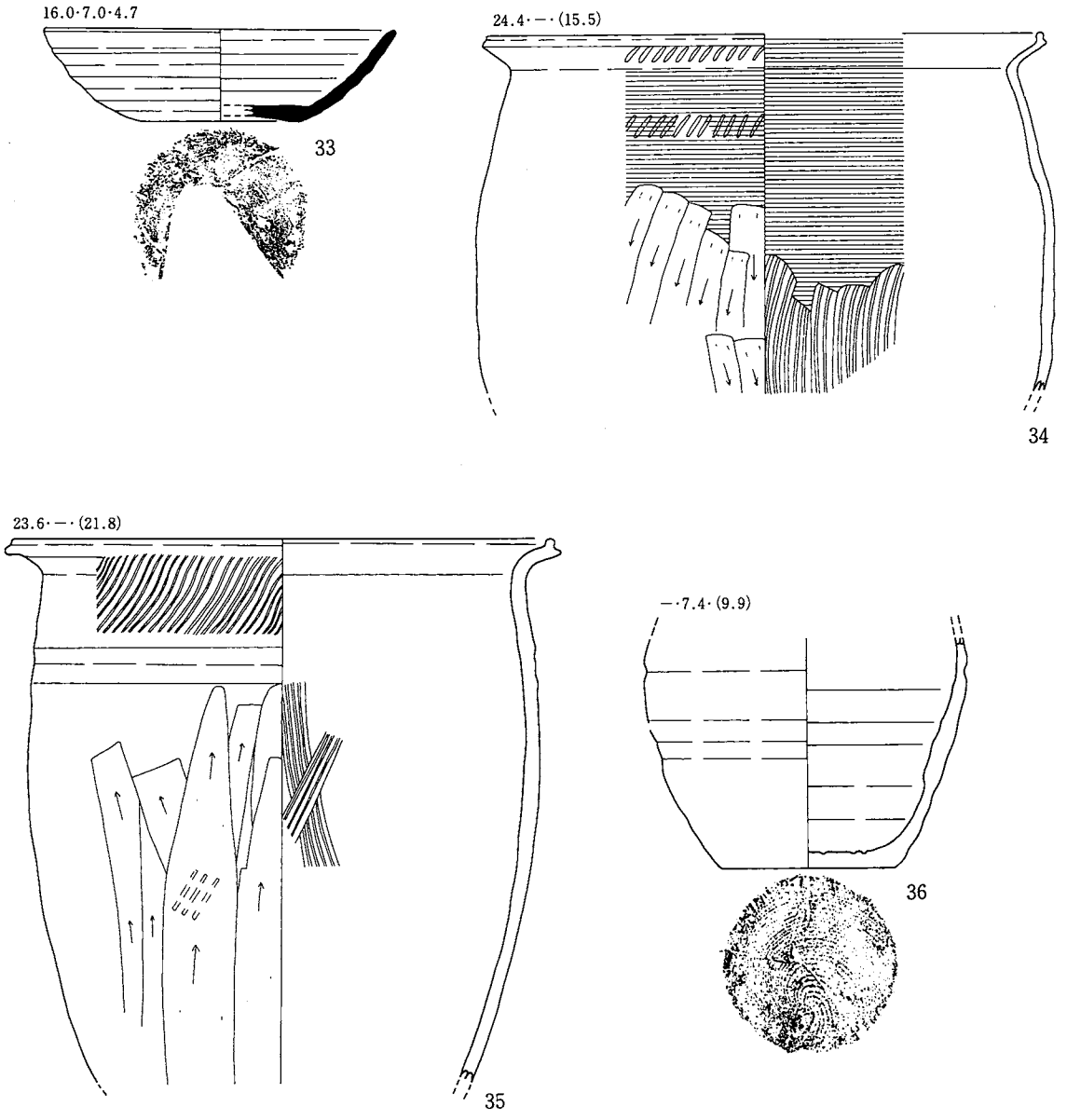


5号竪穴住居跡　a－b
1．10YR2/2　黒褐色土
2．10YR4/4　褐色粘質土
3．10YR4/6　にぶい黄橙色粘質土　炭化物、焼土粒微量含む
4．10YR2/2　黒褐色土
5．10YR4/4　褐色粘質土



5号竪穴住居跡　c－d
1．10YR4/4　褐色粘質土
2．10YR2/2　黒褐色土
3．2.5YR4/6　赤褐色焼土
4．10YR4/6　にぶい黄橙色粘質土　炭化物、焼土粒微量含む

第18図　5号竪穴住居跡　平面・埋土・カマド断面



第19図　5号竪穴住居跡　出土遺物

キメ、体部上半から中位までをヘラケズリ、内面は口縁部付近をカキメ、中位をハケメ調整。口縁は急な角度をもって張り出し、口唇部は上方向に引き出されている。口縁側面は沈線様に凹む。35は床面から出土した土師器甕形土器。大型の長胴甕であるが、胴部下半から底部を欠く。接合した破片のうち胴部の数片は1号炭窯および18号土坑から出土している。口縁部から胴部上半にかけてタタキののち粗いヘラケズリ調整を施している。内面はわずかにヘラナデ調整痕が残る。胎土は砂粒を含み粗であるが、焼成は良好である。口縁は胴部から急な角度を持って張り出し、口唇は上に明瞭に引き出されている。36は小型の土師器甕形土器の胴部下半から底部にかけての破片。内外面とも無調整。胎土は密であるが、焼成はやや弱い。底部切り離しは回転糸切り。

6号竪穴住居跡

遺構（第20，21，22図、写真図版10）

〈位置と残存状況〉 ⅡＡ８ｆほか。後世の削平によって掘り込み面が削られており、カマドの煙道・壁の上部が失われているが、耕作溝による撹乱は床面までは及んでいない。調査当初、カマドの燃焼部を検出し、焼土遺構として登録したものであるが、精査の進行に伴い竪穴住居跡に変更したものである。

〈形状と規模〉 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は6.0×5.7ｍで、今回の調査で検出した竪穴住居跡の中で最大である。柱穴配置は比較的明確である。

〈埋土〉 5層に細分される。黒褐色土主体である。灰白色火山灰の堆積層は第2層である。

〈壁〉 床面から緩やかに立ち上がるが、壁の上部は崩落したものと推定される。

〈床〉 貼り床である。貼り床の下からは多数の柱穴状土坑・土坑を検出した。

〈柱穴・土坑〉 遺構に伴う主柱穴は4個である。貼り床下からも多数の柱穴状土坑を検出した。2時期の建て替えの可能性も考えられる。

〈カマド〉 東壁の東南隅寄りに構築されている。カマドの袖は亜円礫を芯材として築かれているが、検出時から亜円礫が露出しており、カマド上部は削平によって失われている。燃焼部と考えられる土坑状の凹みから煙出しと推定される土坑の方向に土師器甕形土器の破片が敷かれている。カマドの煙道の掘り込みは明確でないが、カマド本体の燃焼部と煙出しと推定される土坑を結ぶ線上には焼土粒が比較的多く散らばっており、これを煙道の痕跡とすると長さは約230㎝である。

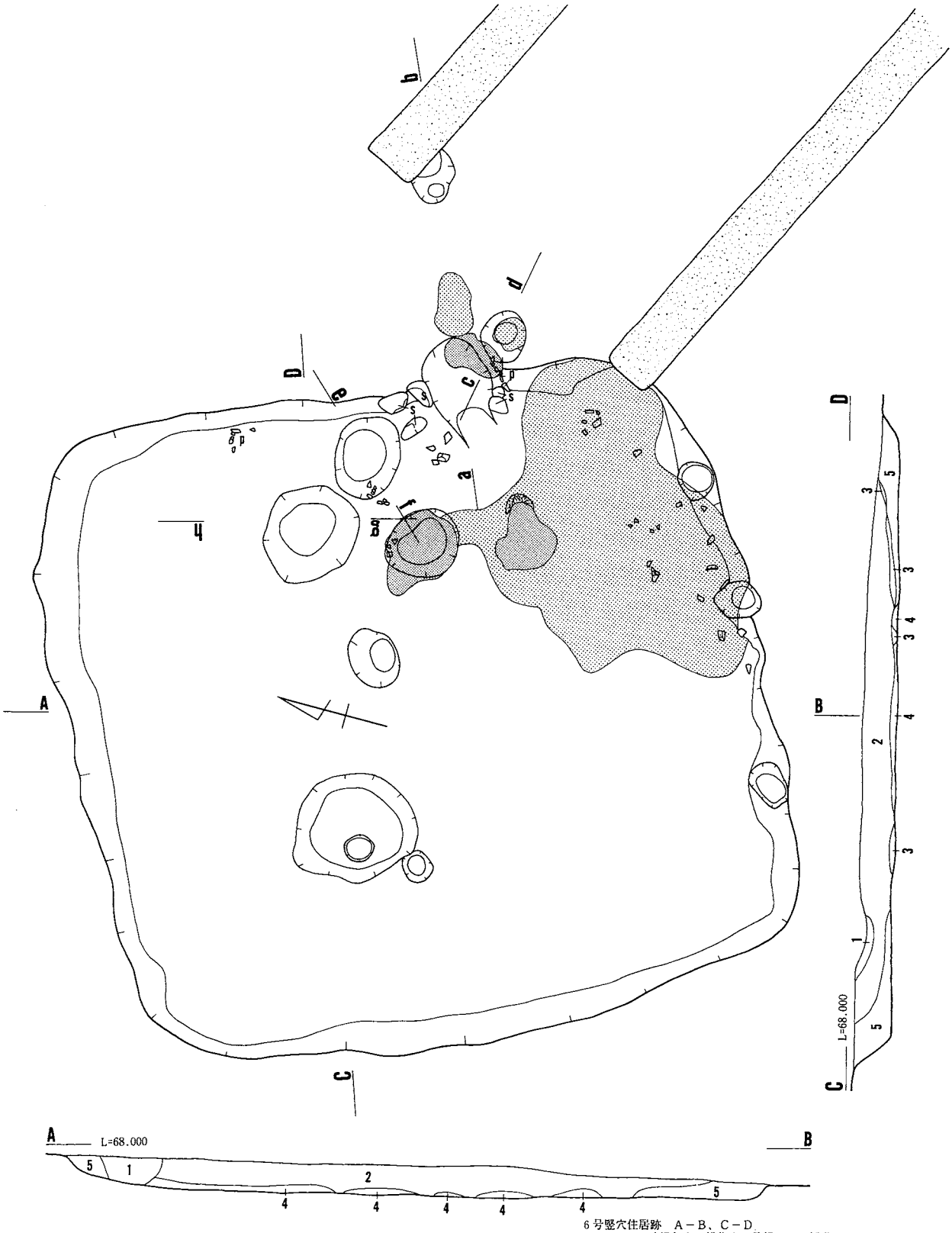
〈焼土〉 遺構の東南隅を中心に焼土が分布する。現地性のものでなく、カマドなどから掻き出されたものと思われる。また、貼り床下の土坑埋土にも焼土が層を成すものがある。

〈遺物の出土〉 カマドを中心に床面、埋土から出土している。土器・土製品で構成される。

〈時期〉 出土遺物・埋土の状況から平安時代に属する。

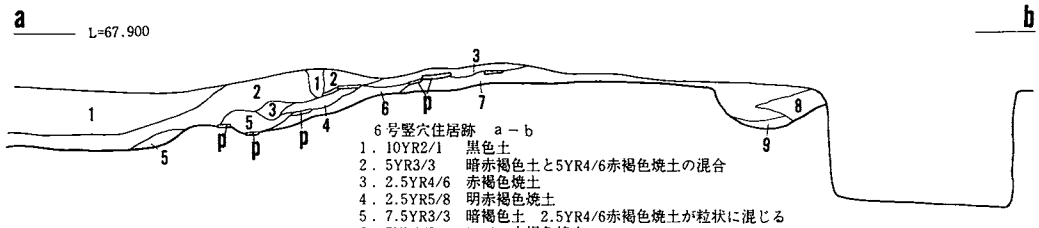
遺物（第22，23，24図、写真図版19，20）

〈土器〉 37～41は土師器坏形土器。37、38はややこぶりで薄手であるが、器形は体部が膨らむ曲線的輪郭を持つ。底面切り離しは回転糸切り。内面はヘラミガキののち黒色処理を施している。外面は摩耗が著しいが、再調整を施しているものと推定される。39は底部破片。内面はヘラミガキののち黒色処理を施している。外面は摩耗が著しいが、再調整を施しているものと推定される。40、41は口縁部破片。いずれも内面ヘラミガキののち黒色処理を施しているが、黒色処理部分はほとんどとんでいる。42はカマドから出土した土師器甕形土器の口縁部破片。外面胴部上位と内面をカキメ調整。43は酸化炎焼成の須恵器甕形土器の口縁部破片。内外面とも無調整。44はカマドから出土した土師器甕形土器。最大径を口縁部にもつ大型の長胴甕であるが、

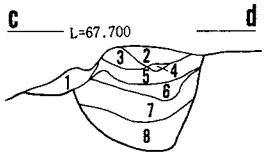


6号竪穴住居跡　A－B、C－D
1．10YR3/2　暗褐色土　耕作土　桑根による攪乱
2．10YR2/1　黒色土
3．灰白色火山灰
4．10YR3/3　暗褐色土　10YR7/8黄橙色粘質土が粒状に混入
5．10YR3/4　暗褐色土　10YR7/8黄橙色粘質土が粒状に混入

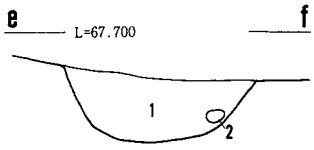
第20図　6号竪穴住居跡　平面・埋土断面



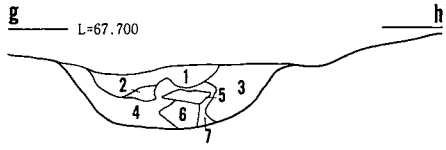
6号竪穴住居跡　a－b
1．10YR2/1　黒色土
2．5YR3/3　暗赤褐色土と5YR4/6赤褐色焼土の混合
3．2.5YR4/6　赤褐色焼土
4．2.5YR5/8　明赤褐色焼土
5．7.5YR3/3　暗褐色土　2.5YR4/6赤褐色焼土が粒状に混じる
6．5YR4/3　にぶい赤褐色焼土
7．5YR4/4　にぶい赤褐色焼土と5YR4/6赤褐色焼土の混合
8．5YR4/3　にぶい赤褐色焼土
5．7.5YR4/4　褐色土　2.5YR4/6赤褐色焼土が粒状に混じる



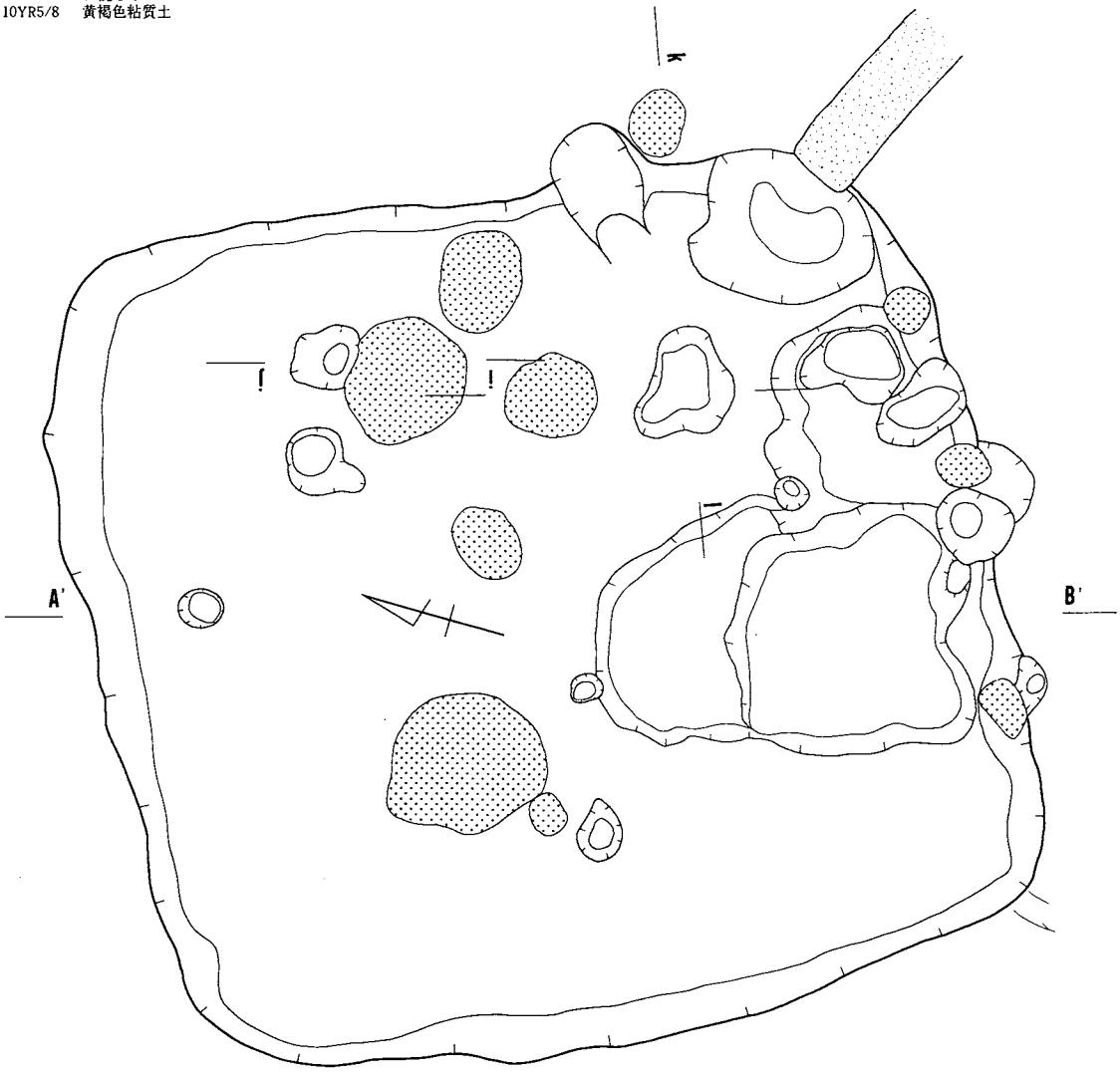
6号竪穴住居跡　c－d
1．10YR5/8　黄褐色粘質土
2．10YR4/6　褐色粘質土
3．7.5YR2/3　極暗褐色土　2.5YR5/8明赤褐色焼土が粒状に混じる
4．10YR3/4　暗褐色土　炭化物が少量混入
5．10YR2/2　黒褐色土　炭化物が少量混入
6．7.5YR2/3　極暗褐色土　2.5YR5/8明赤褐色焼土、炭化物が粒状に混じる
7．10YR2/3　黒褐色土　10YR5/6黄褐色粘質土が粒状に混じる
8．10YR5/8　黄褐色粘質土



6号竪穴住居跡　e－f
1．5YR5/6　明赤褐色焼土
炭化物が粒状に混入
2．10YR6/6　明黄褐色粘質土

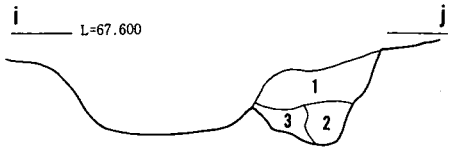


6号竪穴住居跡　g－h
1．10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土　炭化物を微量含む
2．10YR4/4　褐色粘質土　炭化物を微量含む
3．10YR5/6　黄褐色粘質土　炭化物少量含む
4．10YR6/8　明黄褐色粘質土　2.5YR5/8明赤褐色焼土と炭化物が粒状に混じる
5．10YR4/6　褐色粘質土　2.5YR5/8明赤褐色焼土が少量混じる
6．10YR6/8　明黄褐色粘質土　炭化物が粒状に混じる
7．10YR6/6　明黄褐色粘質土　炭化物が粒状に混じる



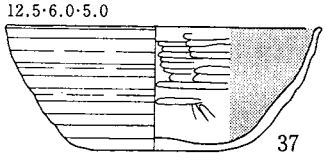
第21図　6号竪穴住居跡　カマド・土坑断面・掘り方平面

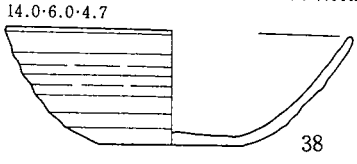
6号竪穴住居跡　A'－B'
1．10YR3/3　暗褐色土　貼り床
2．10YR4/6　褐色土　2.5YR5/8明赤褐色焼土と炭化物が粒状に混じる
3．10YR8/6　明黄褐色粘質土

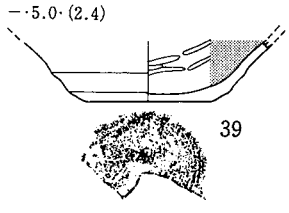


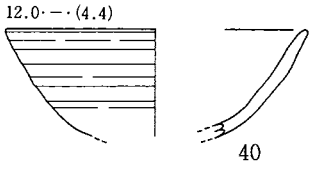
6号竪穴住居跡　i－j
1．10YR3/3　暗褐色土　2.5YR5/8明赤褐色焼土を粒状に含む
2．10YR4/6　褐色土
3．10YR5/8　黄褐色粘質土

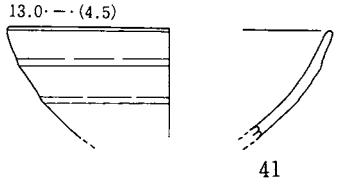
6号竪穴住居跡　k－l
1．7.5YR5/8　明褐色土　2.5YR5/8明赤褐色焼土が粒状に混入
2．7.5YR6/8　橙色焼土　2.5YR5/8明赤褐色焼土が粒状に混入
3．5YR4/8　赤褐色土　2.5YR5/8明赤褐色焼土、炭化物が粒状に混入
4．7.5YR4/4　褐色土
5．7.5YR5/6　明褐色粘質土
6．7.5YR5/6　明褐色粘質土　2.5YR5/8明赤褐色焼土が粒状に混入
7．7.5YR6/8　橙色焼土　2.5YR5/8明赤褐色焼土が粒状に混入

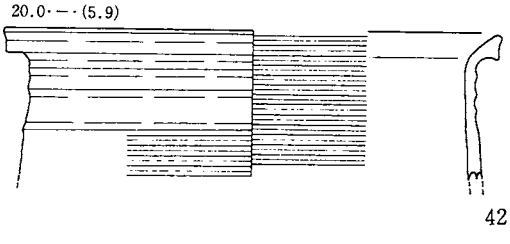


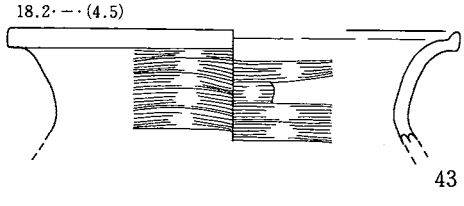




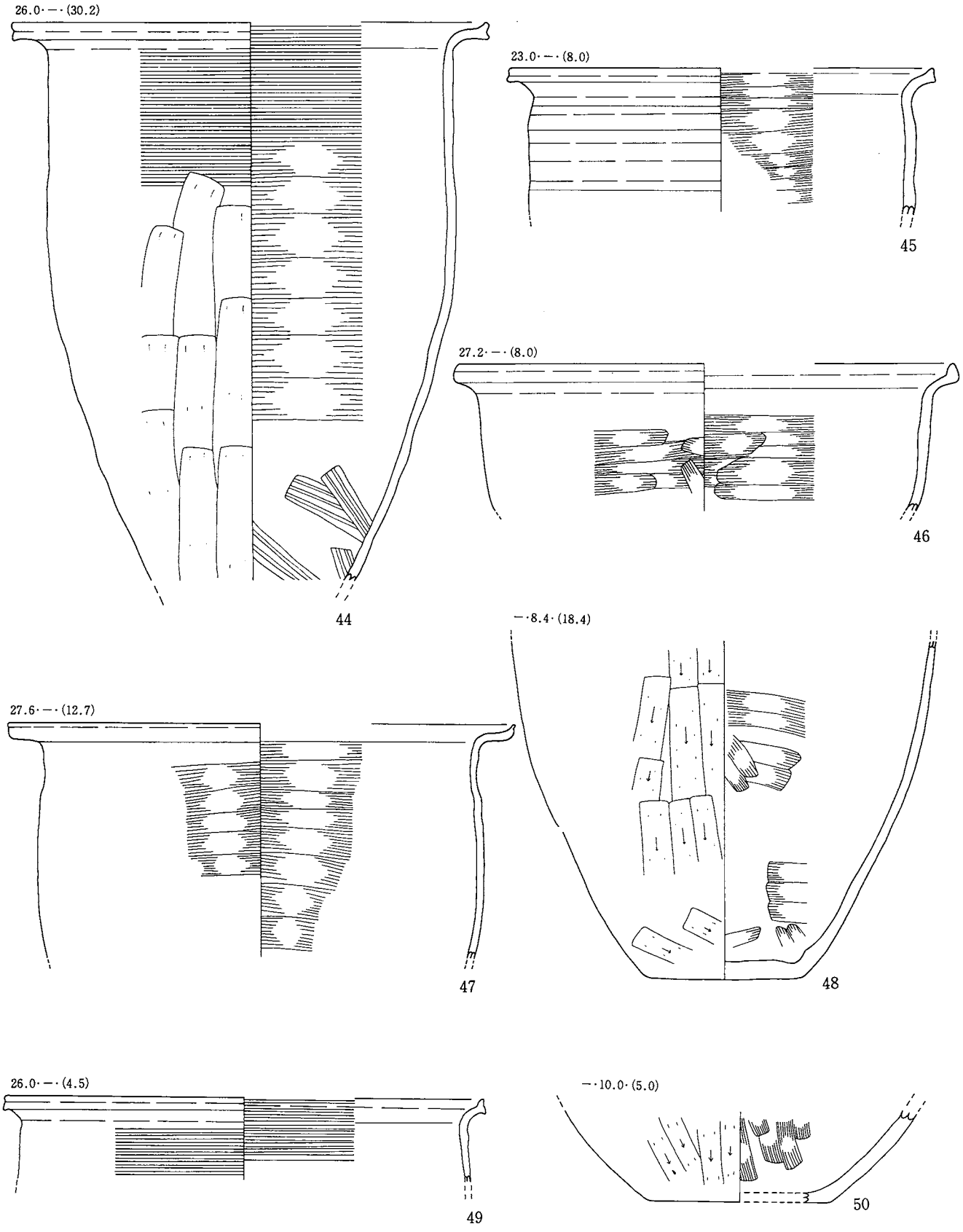




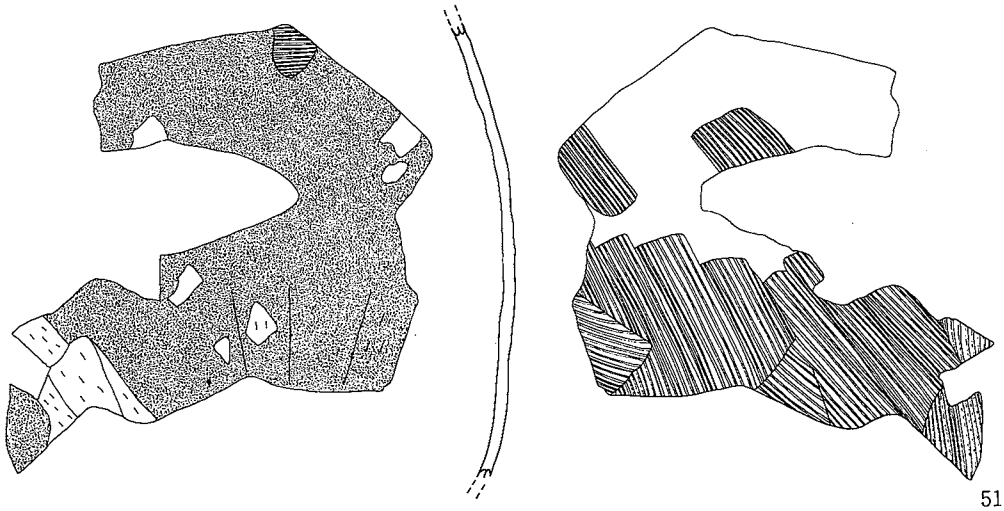


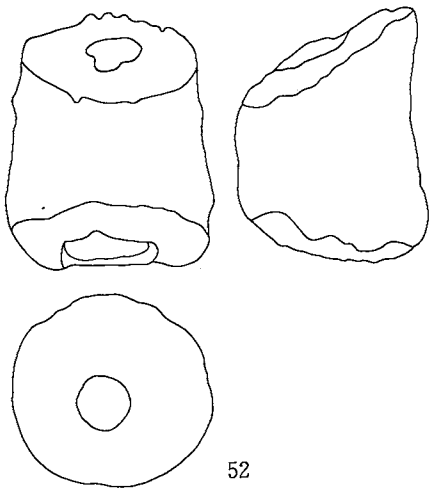


第22図　6号竪穴住居跡　貼り床・土坑断面・出土遺物－1



第23図　6号竪穴住居跡　出土遺物ー2





第24図　6号竪穴住居跡　出土遺物ー3

底部を欠く。外面は頸部から胴部上半を非常に明瞭なカキメ、胴部中位から下半をヘラケズリ調整しており、部分的に赤褐色粘土を薄く付着させている。内面は口縁部付近をカキメ、胴部下半は同一工具によるとおもわれるハケメ調整痕が残る。口縁は急な角度をもって張り出し、口唇部は上下両方向に引き出されている。47はカマドから出土した土師器甕形土器の口縁部から体部上位にかけての破片。外面胴部上位と内面口縁部付近をカキメ調整。口縁は急角度をもって張り出し、口唇部は上方向にのみ引き出されている。48はカマドから出土した土師器甕形土器。長胴甕の胴部下半から底部にかけての破片。外面をヘラケズリ調整。内面底部にはロクロ回転時の工具によるヘラナデが見られる。胎土はきわめて粗で、焼成も弱い。49は大型の土師器甕形土器の口縁部破片。口縁部に最大径を持つ薄手の長胴甕である。内外面ともカキメ調整。50は土師器甕形土器の底部破片。外面はヘラケズリ、内面はハケメ調整。胎土は粗。51は土師器甕形土器の胴部破片。外面上方はカキメ、下方はヘラケズリ、内面はハケメ調整。破片の外面全体にわたって赤褐色粘土を薄く付着させており、粘土の上にはハケメ様の凹凸が見られる。

〈土製品〉52はふいごの羽口である。上方は斜めに切られている。外径8.1cm、内径2.2cm、ほぼ円筒形で、先端部のしぼりはない。また、鉄滓などの付着も見られず、カマドから出土していることから、支脚として使用されたものと思われる。

3．炭　窯

1号炭窯

遺構（第25，26図、写真図版11）

〈位置と残存状況〉ⅡＢ８ｅほか。北西から南東方向にかけてごく僅かに傾く平坦地にある。

〈形状と規模〉斜面に沿った北西－南東方向に長軸を持つ小判形で、斜面下方にあたる南東部分は開けている。規模は長軸方向の長さが約７ｍ、短軸方向の幅が1.5ｍ、深さは60cmほどで、底面の傾斜の比高差は約10cm程度である。

〈埋土〉10層に細分される。第８、９層は崩落した天井部の構成土、第２層は灰白色火山灰の堆積層である。

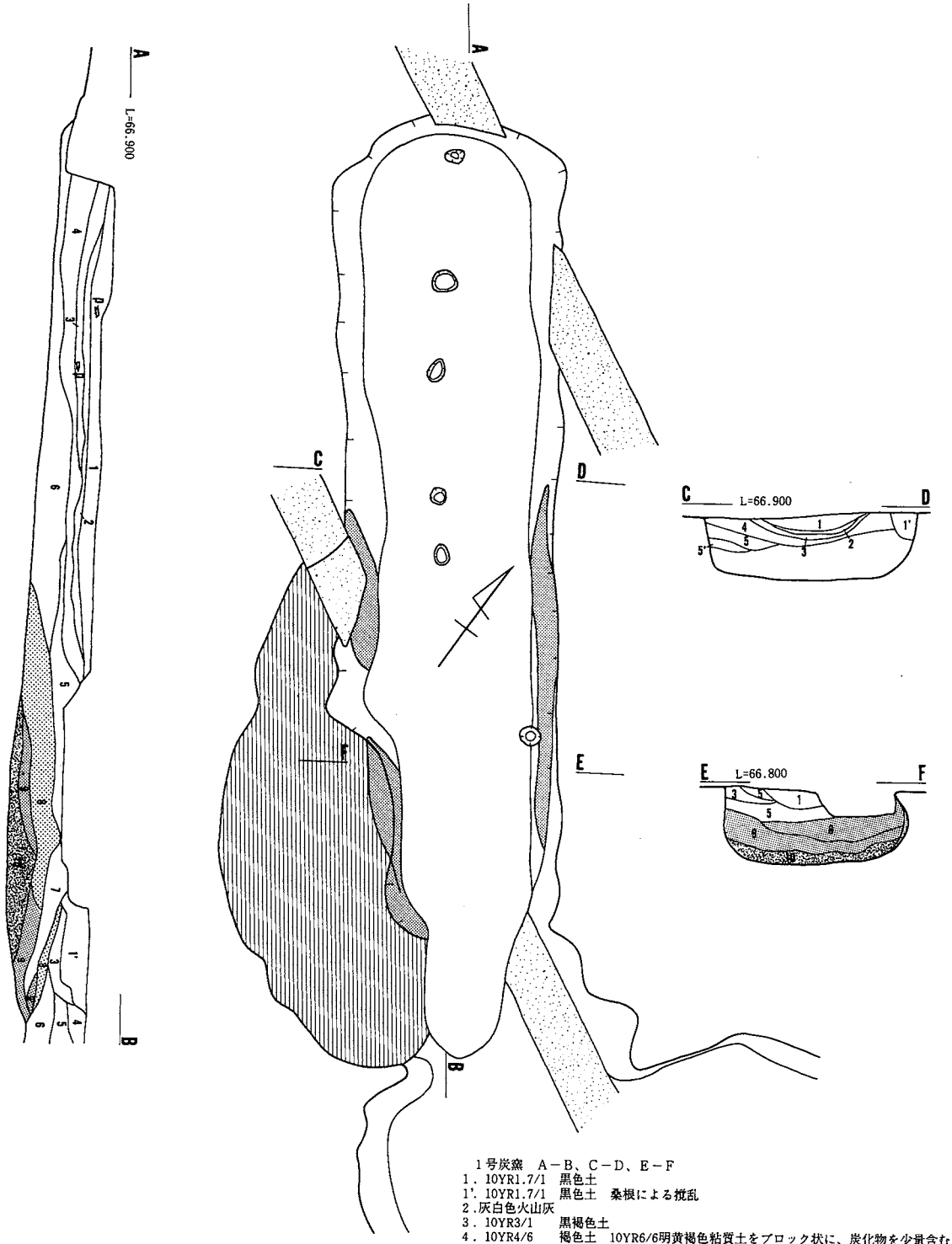
〈壁〉斜面の下方にあたる南西方向の壁が焼成を受けて赤色変化している。南西壁の一部には上部構造を窺えるような版築状の黄褐色土の部分が見られる。

〈底面施設〉底面の北西半には４基のピットが検出された。深さは７～５cm程度と浅いが、埋土は炭化物の単層であり、天井部を支えていた杭の痕跡と思われる。

〈煙出し構造〉検出されなかった。

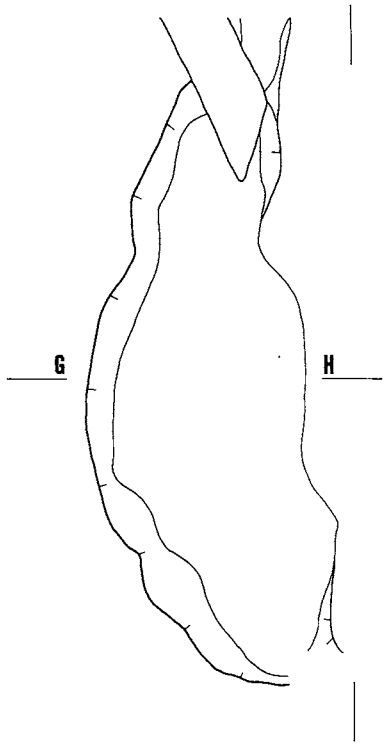
〈遺物の出土〉埋土から須恵器坏形土器・須恵器甕形土器の底部破片・土師器甕形土器の胴部破片と大量の木炭および炭化材が出土している。須恵器甕形土器(28)は隣接する３号竪穴住居跡から出土したものと、土師器甕形土器(35)は５号竪穴住居跡から出土したものと接合しており、同時期に存在していたものと考えられる。木炭および炭化材は樹種同定の結果、イタヤ、ナラ、サクラ、ササ、広葉樹の雑木で構成される。ナラ、イタヤ、サクラの順に量が多い。焼成は一様でなく、よく焼けているものから、それほどでないものまである。全体として木炭としては上質でない。土器は埋土からの出土であるが、いずれも灰白色火山灰堆積層（第２層）よりも下層からの出土である。

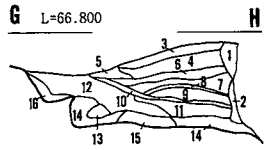
〈時期〉出土遺物および埋土の状況から平安時代に属する。



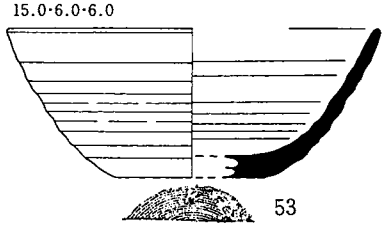
1号炭窯　A－B、C－D、E－F
1．10YR1.7/1　黒色土
1'．10YR1.7/1　黒色土　桑根による撹乱
2．灰白色火山灰
3．10YR3/1　黒褐色土
4．10YR4/6　褐色土　10YR6/6明黄褐色粘質土をブロック状に、炭化物を少量含む
5．10YR3/4　暗褐色土　10YR6/6明黄褐色粘質土をブロック状に含む
5'．10YR3/4　暗褐色土　炭化物を粒状に含む
6．10YR3/2　黒褐色土　原形をよく残した炭と焼土ブロックを多量に含む
7．10YR3/2　黒褐色土　10YR6/6明黄褐色粘質土と焼土ブロックを含む
8．5YR4/3　にぶい赤褐色焼土　ブロック状の堆積　炉壁の崩落
9．2.5YR3/3　暗赤褐色焼土　堅く良く焼けている
10．木炭の堆積層

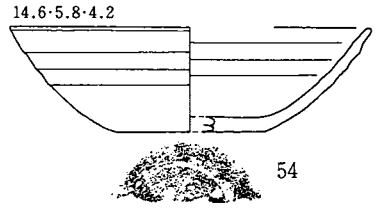
第25図　1号炭窯　平面・埋土断面－1

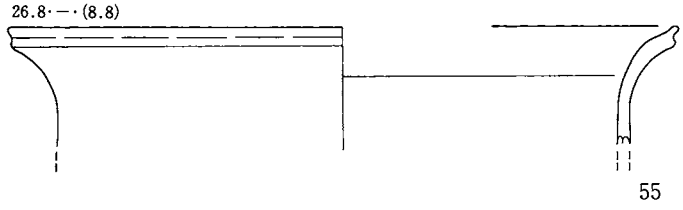




1号炭窯　G－H
1．7.5YR4/4　褐色粘質土
2．2.5YR3/3　暗赤褐色焼土　堅く良く焼けている
3．10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土に10YR2/2黒褐色土が少量混じる
4．10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土に10YR2/2黒褐色土が微量混じる
5．10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土に10YR2/2黒褐色土が少量混じる
6．10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土に10YR2/2黒褐色土が微量混じる
7．10YR2/2　黒褐色土と10YR4/3にぶい黄褐色粘質土の混合
8．10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土に10YR2/2黒褐色土が微量混じる
9．10YR2/2　黒褐色土と10YR4/3にぶい黄褐色粘質土の混合
10．10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土に10YR2/2黒褐色土が微量混じる
11．10YR2/2　黒褐色土と10YR4/3にぶい黄褐色粘質土の混合
12．10YR1.7/1　黒色土に10YR4/3にぶい黄褐色粘質土が少量混じる
13．10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土に10YR2/2黒褐色土が少量混じる
14．10YR2/1　黒色土
15．10YR2/1　黒色土に10YR4/3にぶい黄褐色粘質土が少量混じる
16．10YR1.7/1　黒色土







第26図　1号炭窯　埋土断面－2出土遺物

遺物（第26図、写真図版20）

〈土器〉53は埋土から出土した須恵器坏形土器。内面は無調整、外面底部付近をヘラケズリ再調整。底部切り離しは回転糸切り。口径・底径に比べ器高が大きく、底部から口縁部までが緩やかな曲線的輪郭を持つ。胎土は緻密で焼成も良く、色調は暗灰色を呈する。54も埋土から土師器坏形土器。内外面とも無調整。底部切り離しは回転糸切り。焼成は不良で、胎土は軟質である。55は土師器甕形土器の口縁部破片。最大径を口縁部に持つ長胴甕だが、胎土は軟質で、内外面とも摩耗が著しく、調整は不明である。口縁部は胴部から緩やかに立ち上がる。なお、３号竪穴住居跡出土とした28は、接合した４片のうち３片が、４号竪穴住居跡出土とした35は胴部の数片が本遺構から出土している。

４．土　坑

１号土坑

遺構（第27図、写真図版12）

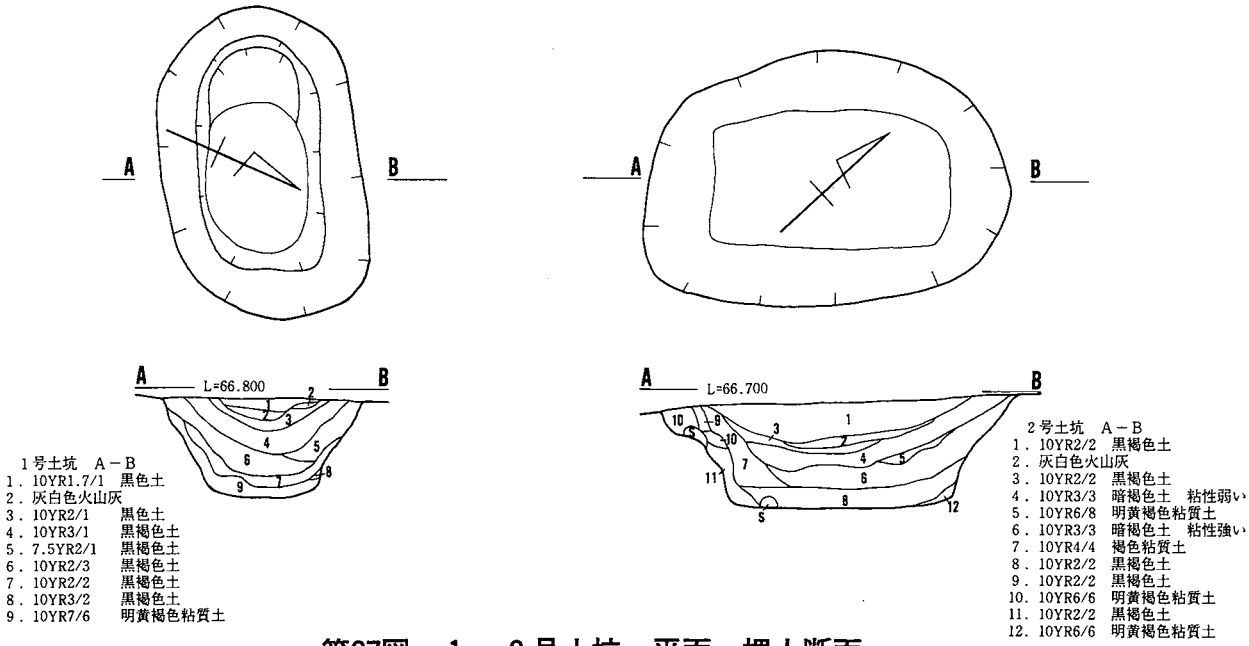
〈位置と残存状況〉ⅡＢ５ｈ。

〈形状と規模〉平面形は開口部、底部ともに北東－南西方向に長径を持つ楕円形を呈し、断面形は台形である。規模は開口部が208×133cm、底部が142×67cm、深さは中心部で64cmである。

〈埋土〉９層に細分され、自然堆積である。灰白色火山灰の堆積層は第２層である。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉埋土の状況から平安時代以前に属するものと推定される。



第27図　１・２号土坑　平面・埋土断面

2号土坑

遺構（第27図、写真図版12）

〈位置と残存状況〉 ⅡＢ６ｈほか。

〈形状と規模〉 平面形は開口部が北東－南西方向に長径を持つ楕円形を呈し、底部は長方形を呈する。断面形は台形である。規模は開口部が245×170cm、底部が157×92cm、深さは中心部で70cmである。

なお、写真図版における底面の掘り込みは基本土層のⅢ層に挟まる黒色の有機質層を埋土と見誤ったための掘り過ぎである。

〈埋土〉 13層に細分され、自然堆積である。灰白色火山灰の堆積層は第２層である。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 埋土の状況から平安時代以前に属するものと推定される。

3号土坑

遺構（第28図、写真図版12）

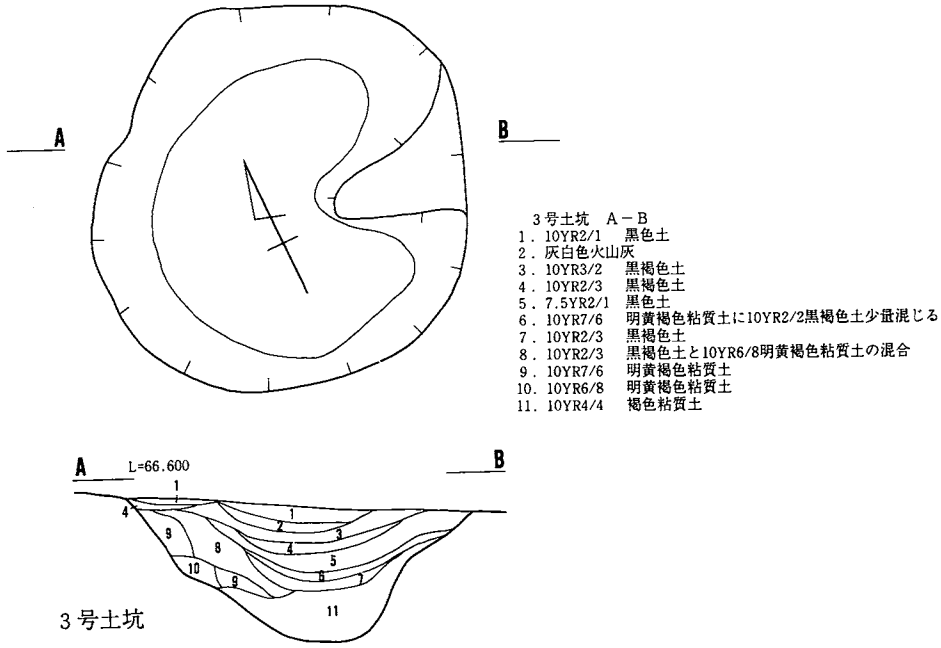
〈位置と残存状況〉 ⅡＢ６ｉほか。

〈形状と規模〉 平面形は開口部、底部とも東半が凹む不整円形を呈するが、北半と南半の２つの土坑がつながったものである可能性もある。規模は開口部が253×252cm、底部が196×110cm、深さは中心部で108cmである。

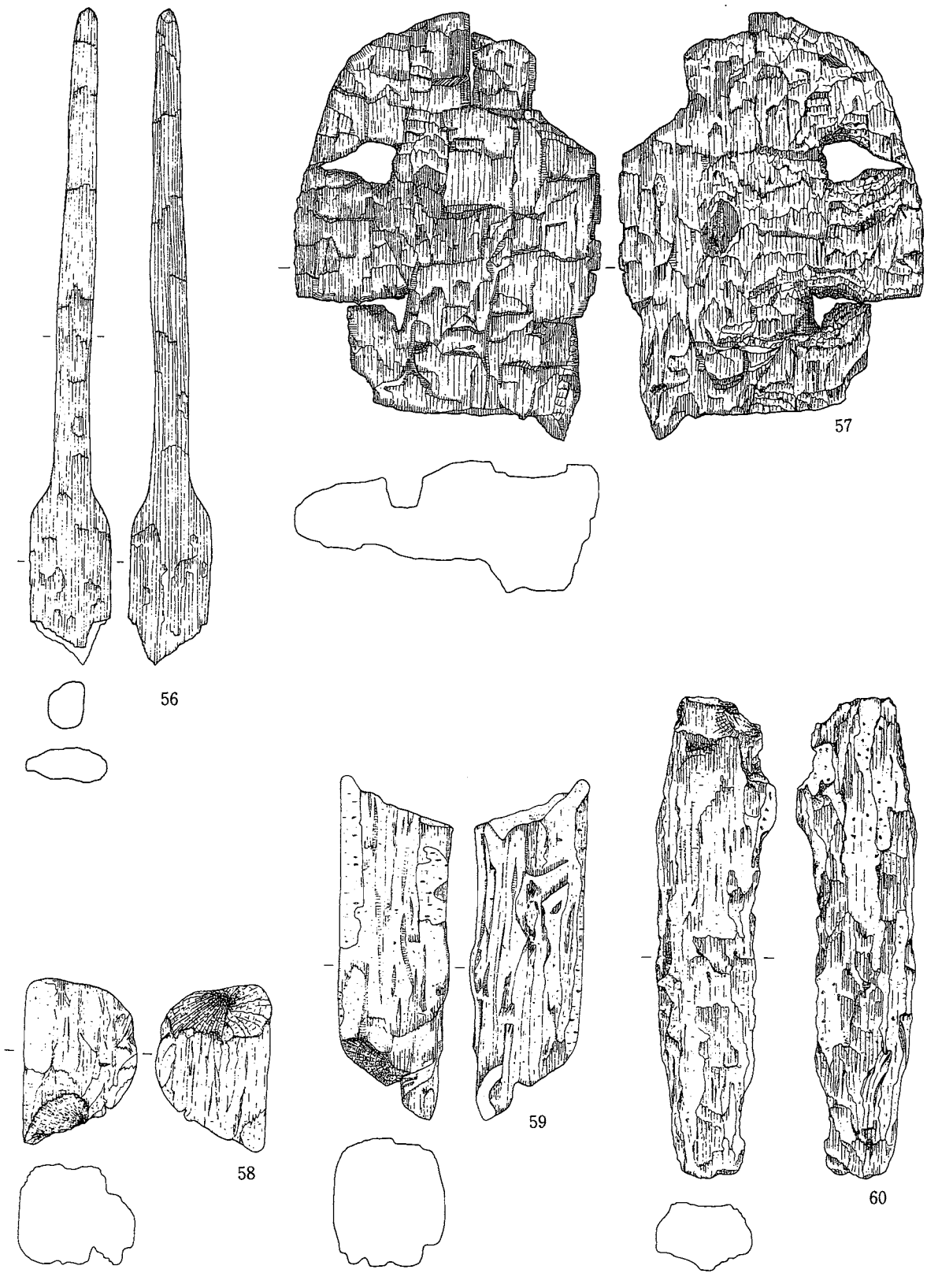
〈埋土〉 11層に細分され、自然堆積である。灰白色火山灰の堆積層は第２層である。

〈遺物の出土〉 埋土下位から木製品が出土している。

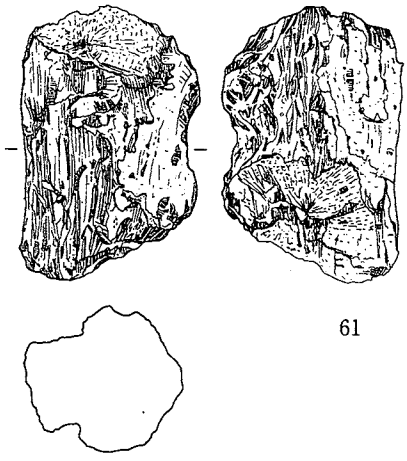
〈時期〉 埋土の状況から平安時代以前に属するものと推定される。



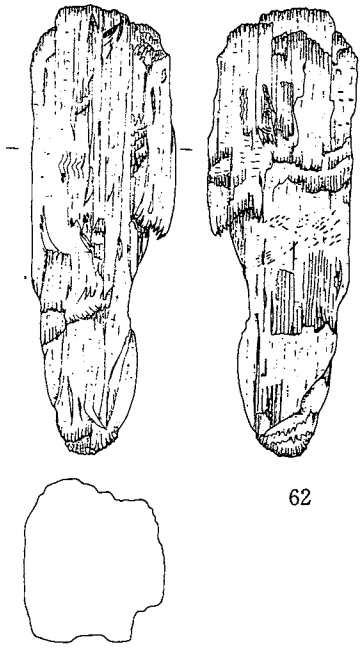
第28図　3号土坑　平面・埋土断面



第29図　3号土坑　出土遺物ー1



61



62

第30図　3号土坑　出土遺物－2

遺物（第29，30図、写真図版21）

〈木製品〉56～62は埋土下部から出土した器種不明の木製品である。56は外形は箆状を呈する。柄部は長さ24.7㎝、断面は楕円形を呈し、径2.4×1.7㎝である。身部は先端が欠損しているが、残存部は長さ8㎝、厚さ1.6㎝、幅4.0㎝である。57は長さ20.6㎝、幅15.0㎝、厚さ6.8～5.0㎝の板状を呈するが、人為的と思われる貫孔が見られる。58～62は棒状を呈する。58、59の2点はそれぞれ両端が切断されており、同一個体を切断したものと思われる。長さは58が8.4㎝、59が17.8㎝で、径はどちらも5.8×5.0㎝である。60～62の3点は表皮が残り、加工した痕跡は明瞭でないが、やはり同一個体を切断したものと思われる。切断面は腐朽している。60が長さ24.7㎝、径4.9×3.4㎝、61が長さ11.7㎝、径6.2×5.8㎝、62が長さ17.9㎝、径6.6×5.7㎝である。

4号土坑

遺構（第31図、写真図版13）

〈位置と残存状況〉ⅡＢ７ｆ。開口部の南西1/3ほどを耕作溝によって削られている。

〈形状と規模〉平面形は開口部が楕円形、底部が不整長方形を呈する。規模は開口部が238×137㎝、底部が127×98㎝、深さは中心部で102㎝である。

〈埋土〉7層に細分され、自然堆積である。灰白色火山灰堆積層は第2層である。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉埋土の状況から平安時代以前に属するものと推定される。

5号土坑

遺構（第31図、写真図版13）

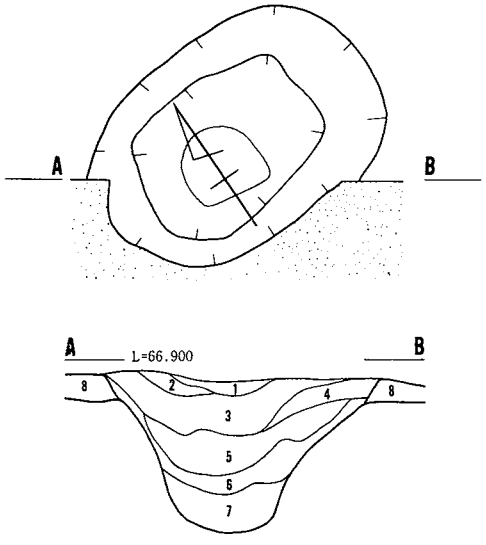
〈位置と残存状況〉ⅡＢ７ｇほか。開口部の南西端を耕作溝によって削られている。

〈形状と規模〉平面形は開口部が不整円形、底部が不整楕円形、断面は舟形を呈する。規模は180×178㎝、深さは中心部で47㎝である。

〈埋土〉6層に細分され、自然堆積である。灰白色火山灰堆積層は第2層である。

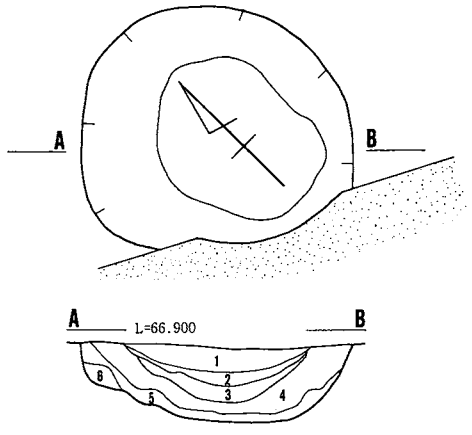
〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉埋土の状況から平安時代以前に属するものと推定される。



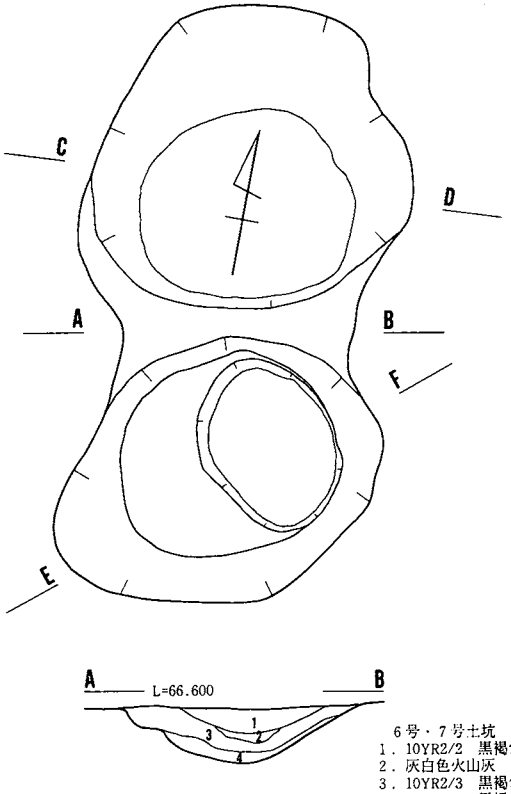
4号土坑

4号土坑　A－B
1．10YR2/1　黒褐色土
2．10YR2/3　黒褐色土　10YR5/6黄褐色粘質土を粒状に含む
3．10YR3/2　黒褐色土　10YR5/6黄褐色粘質土をブロック状に含む
4．10YR2/3　黒褐色土　10YR5/6黄褐色粘質土を粒状に含む
5．10YR6/4　にぶい黄橙色粘質土
6．10YR2/1　黒色土
7．10YR6/6　黄褐色粘質土
8．10YR2/2　黒褐色土



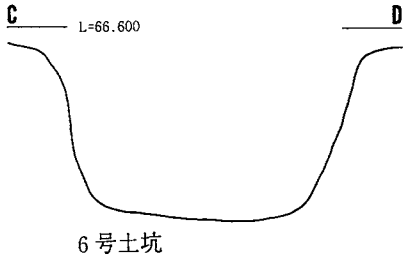
5号土坑

5号土坑　A－B
1．10YR2/1　黒色土
2．灰白色火山灰
3．10YR2/2　黒褐色土
4．10YR2/3　黒褐色土　10YR5/6黄褐色粘質土を粒状に含む
5．10YR3/3　暗褐色土　10YR5/6黄褐色粘質土を粒状に含む
6．10YR4/6　褐色粘質土　地山の崩落

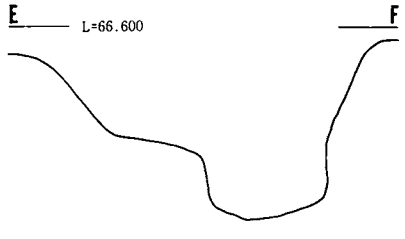


6・7号土坑

6号・7号土坑　A－B
1．10YR2/2　黒褐色土
2．灰白色火山灰
3．10YR2/3　黒褐色土　酸化鉄微量含む
4．10YR2/3　黒褐色土と10YR6/8明黄褐色粘質土の混合



6号土坑



7号土坑

第31図　4・5・6・7号土坑　平面・埋土断面

6号土坑

遺構（第31図、写真図版13）

〈位置と残存状況〉ⅡＢ７ｇほか。

〈形状と規模〉平面形は開口部、底部とも不整円形、断面は台形を呈する。規模は開口部が213×202㎝、底部が143×124㎝、深さは中心部で112㎝である。

〈埋土〉本遺構は検出の際に、隣接する７号土坑と単一の土坑と見誤り、両土坑の中間の断面を実測した。黒褐色主体で、灰白色火山灰の堆積層は第２層である。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉埋土の状況から平安時代以前に属するものと推定される。

7号土坑

遺構（第31図、写真図版13）

〈位置と残存状況〉ⅡＢ７ｇほか。

〈形状と規模〉平面形は開口部は不整円形、底部は不整楕円形を呈するが、中位に段状の平場を持つ。規模は開口部が227×174㎝、中位の段状の平場が149×130㎝、底部が105×78㎝で、深さは中心部で108㎝である。

〈埋土〉本遺構は検出の際に、隣接する６号土坑と単一の土坑と見誤り、両土坑の中間の断面を実測した。黒褐色主体で、灰白色火山灰の堆積層は第２層である。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉埋土の状況から平安時代以前に属するものと推定される。

8号土坑

遺構（第32図、写真図版14）

〈位置と残存状況〉ⅡＢ７ｈほかにあるが、遺構の南半は調査区外に続く。

〈形状と規模〉平面形は開口部が不正な円形、底部が短い辺が半円形を呈する長方形を呈する。規模は開口部が200㎝以上×212㎝と推定される。検出面からの深さは112㎝である。

〈埋土〉19層に細分されるが、自然堆積である。灰白色火山灰の堆積層は第５層であるが、第５層を挟む第３と第８層は泥炭質化した黒色土である

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉埋土の状況から平安時代以前に属するものと推定される。

9号土坑

遺構（第32図、写真図版14）

〈位置と残存状況〉ⅡＢ７ｉほか。

〈形状と規模〉平面形は開口部が楕円形、底部が円形である。規模は開口部が236×192㎝、底部が145×139㎝、深さは中心部で97㎝である。

〈埋土〉14層に細分され、黒褐色土主体である。灰白色火山灰の堆積層は第２層である。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉埋土の状況から平安時代以前に属するものと推定される。

10号土坑

遺構（第32図、写真図版14）

〈位置と残存状況〉 ⅡＢ８ｆほか。

〈形状と規模〉 平面形は開口部、底部とも不整円形を呈する。規模は開口部が226×207㎝、第15層までを掘り上げた底部径が155×149㎝である。深さは第７層までが57㎝、第15層までが96㎝である。

〈埋土〉 15層に細分されるが、第８層～第15層は基本土層のⅢ層に挟まる黒色の有機質層である可能性があり、掘り過ぎかもしれない。灰白色火山灰の堆積層は第５層である。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 埋土の状況から平安時代以前に属するものと推定される。

11号土坑

遺構（第33図、写真図版なし）

〈位置と残存状況〉 ⅡＢ８ｆ。１号炭窯に隣接し、炭窯に付属する施設である可能性もある。

〈形状と規模〉 平面形は開口部、底部とも不整円形を呈する。規模は開口部128×105㎝、底部58×42㎝、深さは中心部で43㎝である。

〈埋土〉 ４層に細分されるが、ほぼ黒褐色土の単層である。灰白色火山灰の堆積層はない。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 検出の状況から平安時代以前に属するものと推定される。

12号土坑

遺構（第33図、写真図版15）

〈位置と残存状況〉 ⅡＢ８ｇほか。

〈形状と規模〉 平面形は開口部が不整な六角形、底部が不整形を呈するが、壁面の崩落その他の撹乱現象により原形をよく残していないものと思われる。規模は開口部が358×292㎝、底部が264×184㎝、深さは中心部で42㎝ほどである。また、底面は凹凸が著しい。

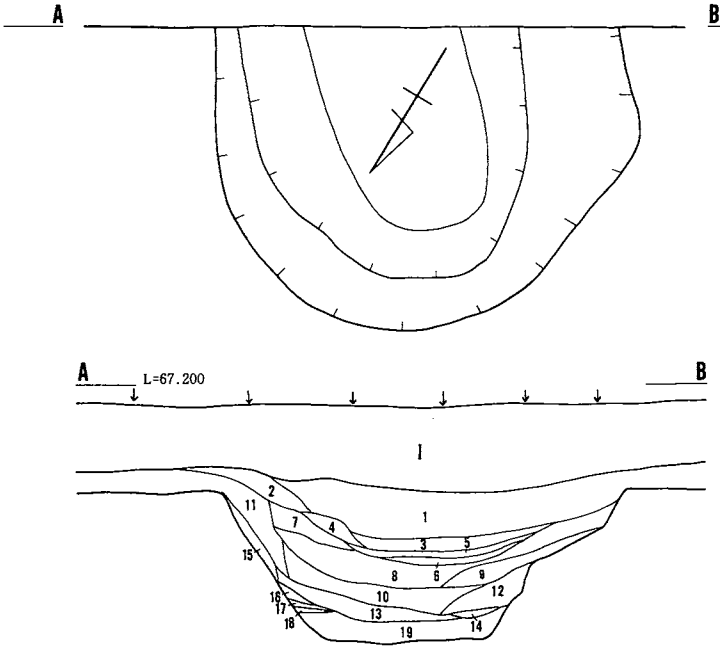
〈埋土〉 11層に細分される。灰白色火山灰堆積層は第１層である。用水路に近いため湧水が著しく、埋土の粘質化が顕著である。

〈遺物の出土〉 埋土および底面から出土している。土器で構成されるが、湧水によって、土師器の残存状況は不良である。

〈時期〉 出土遺物から奈良時代に属する。

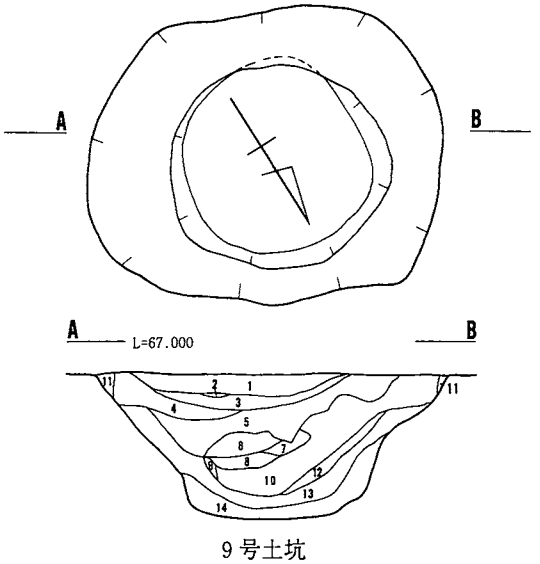
遺物（第34図、写真図版22）

〈土器〉 63～68は土師器甕形土器である。いずれもロクロ非使用の球胴甕であるが、摩耗が著しい。66は口縁部の破片。内外面ともヘラナデ調整。64は底面から出土した胴部破片。内外面ともヘラナデ調整。65は埋土から出土した底部破片。外面は粗いヘラケズリ調整、内面は摩耗が著しく不明。66は底面から出土した頸部から胴部にかけての破片。内外面とも摩耗が著しく調整は不明。67は埋土から出土した胴部下半の破片。内外面ともハケメ調整。68は底面から出土した底部破片。内面はハケメ調整、外面は不明。



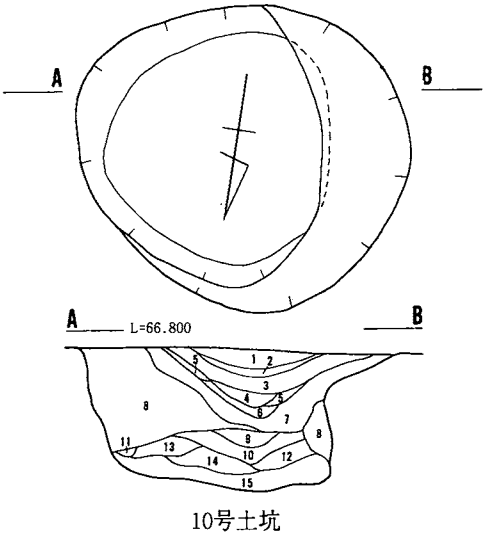
8号土坑

8号土坑　A－B
1．10YR2/1　黒褐色土
2．10YR2/3　黒褐色土
3．10YR1.7/1　泥炭層
4．10YR3/1　黒褐色土　酸化鉄混じる
5．灰白色火山灰
6．10YR1.7/1　泥炭層
7．10YR2/1　黒色土　酸化鉄混じる
8．10YR3/1　黒褐色粘質土
9．10YR3/1　黒褐色粘質土　酸化鉄混じる
10．10YR6/2　灰黄褐色粘土に10YR6/8明黄褐色粘質土が混じる
11．10YR2/2　黒褐色土　崩落土
12．10YR6/2　灰黄褐色粘土と10YR6/8明黄褐色粘質土の混合
13．10YR4/1　灰褐色粘土
14．10YR1.7/1　泥炭層
15．10YR7/8　黄橙色粘土
16．10YR7/1　灰白色粘土
17．10YR1.7/1　泥炭層
18．10YR7/1　灰白色粘土
19．10YR7/1　灰白色粘土



9号土坑

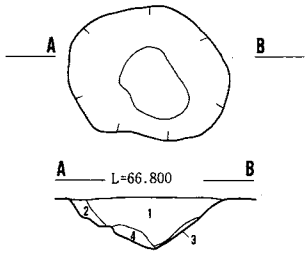
9号土坑　A－B
1．10YR2/1　黒色土
2．灰白色火山灰
3．10YR3/2　黒褐色土　炭化物微量含む
4．10YR3/2　黒褐色土　炭化物と10YR6/8明黄褐色粘質土微量含む
5．10YR3/2　黒褐色土と10YR6/8明黄褐色粘質土微量含む
6．10YR2/3　黒褐色土
7．10YR2/3　黒褐色土　10YR6/6明黄褐色粘質土微量含む
8．10YR2/1　黒褐色土　10YR6/6明黄褐色粘質土微量含む
9．10YR6/6　明黄褐色粘質土
10．10YR2/1　黒褐色土
11．10YR3/2　黒褐色土
12．10YR6/4　にぶい黄橙色粘質土
11．10YR3/2　黒褐色土



10号土坑

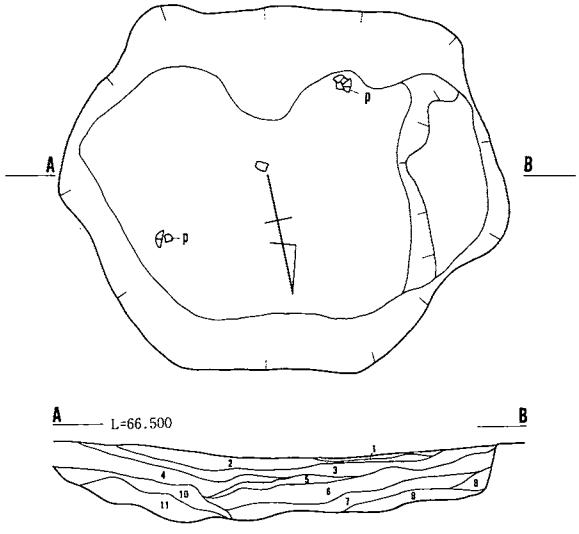
10号土坑　A－B
1．10YR1.7/1　黒色土
2．10YR2/1　黒褐色土
3．10YR1.7/1　黒色土
4．灰白色火山灰
5．10YR2/1　黒色土　灰白色火山灰を微量含む
6．10YR1.7/1　泥炭層
7．10YR3/2　黒褐色土と10YR5/6黄褐色粘質土を粒状に含む
8．10YR6/6　明黄褐色粘質土
9．10YR3/2　黒褐色土と10YR5/6黄褐色粘質土の混合
10．10YR4/2　灰黄褐色粘土
11．10YR6/6　黄褐色粘質土
12．10YR6/6　黄褐色粘質土と10YR3/2黒褐色土の混合
13．10YR4/2　灰黄褐色粘土と10YR3/2黒褐色土の混合
14．10YR6/6　黄褐色粘質土と10YR4/2灰黄褐色粘土の混合
15．10YR7/8　黄橙色粘土

第32図　8・9・10号土坑　平面・埋土断面



11号土坑

11号土坑　A－B
1．10YR1.7/1　黒色土
2．10YR2/3　黒褐色土　10YR5/6黄褐色粘質土微量含む
3．10YR2/1　黒色土　10YR6/7黄褐色粘質土微量含む
4．10YR2/2　黒褐色土　10YR6/7明黄褐色粘質土を少量含む



12号土坑

12号土坑　A－B
1．10YR2/1　黒色土
2．10YR2/2　黒褐色土
3．10YR2/1　黒色土
4．10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土
5．10YR2/2　黒褐色土　10YR6/6明黄褐色粘質土微量含む
6．灰白色火山灰
7．10YR1.7/1　泥炭層
8．10YR2/2　黒褐色土
9．10YR2/3　黒褐色土
10．10YR4/2　灰黄褐色粘土
11．10YR7/3　にぶい黄橙色粘土

第33図　11・12号土坑　平面・埋土断面

13号土坑

遺構（第35図、写真図版なし）

〈位置と残存状況〉ⅡＢ８ｆ。

〈形状と規模〉平面形は開口部、底部とも不整円形を呈する。規模は開口部232×182cm、底部127×104cm、深さは中心部で92cmである。

〈埋土〉本遺構は隣接する10号土坑と単一の土坑と見誤り、その精査後検出されたため、埋土断面の実測は出来なかった。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉埋土の状況から平安時代以前に属するものと推定される。

14号土坑

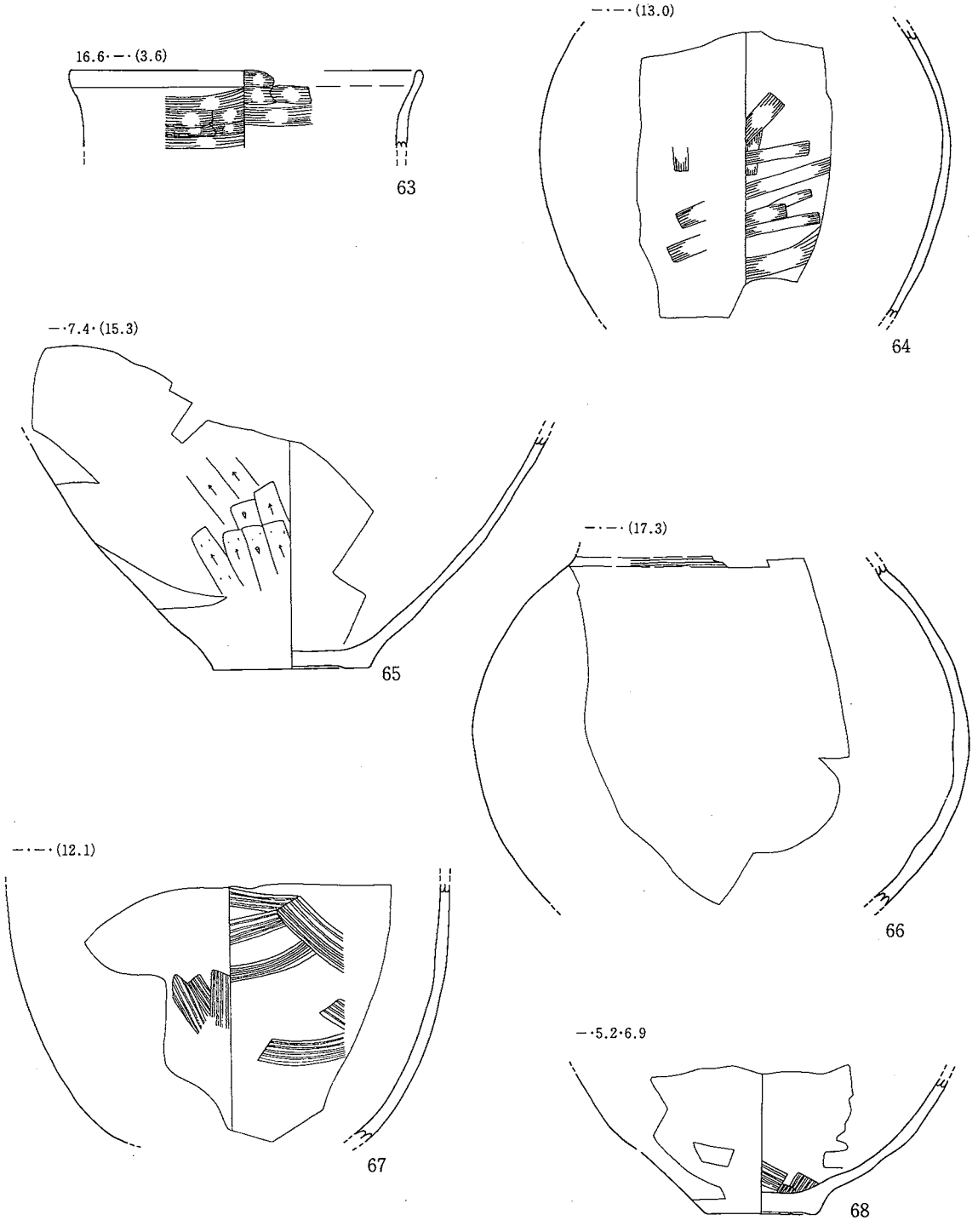
遺構（第35図、写真図版15）

〈位置と残存状況〉ⅢＡ１ｃほか。

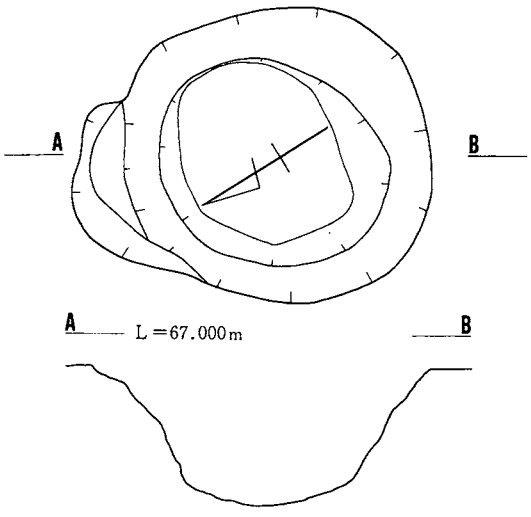
〈形状と規模〉平面形は開口部、底部とも不整円形を呈する。規模は開口部242×198cm、底部84×83cm、深さは中心部で81cmである。

〈埋土〉９層に細分される。黒褐色土主体である。灰白色火山灰の堆積層は第２層である。

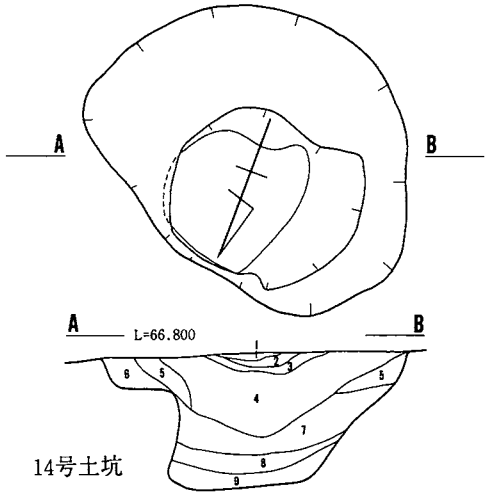
〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。



第34図　12号土坑　出土遺物

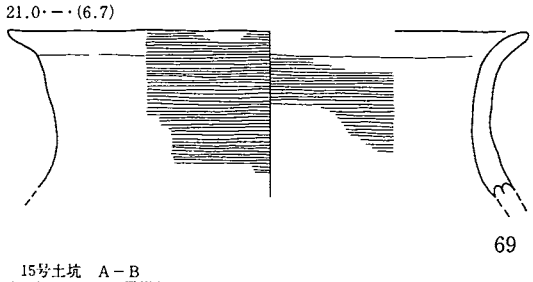


13号土坑



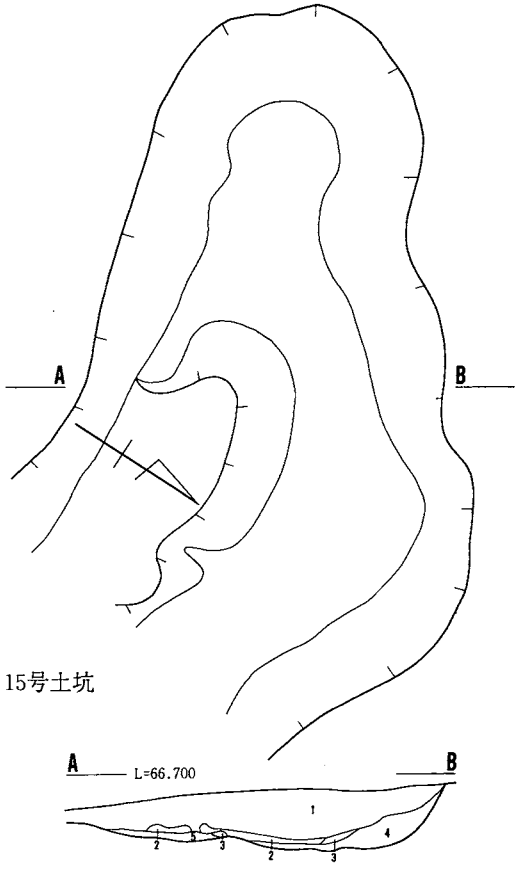
14号土坑

14号土坑　A－B
1．10YR2/2　黒褐色土　灰白色火山灰が微量混入
2．灰白色火山灰
3．10YR2/1　黒色土
4．10YR3/2　黒褐色土
5．10YR6/6　明黄褐色粘質土
6．10YR7/6　明黄褐色粘質土
7．10YR3/1　黒褐色土
8．10YR2/1　黒色土　木製品出土
9．10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土

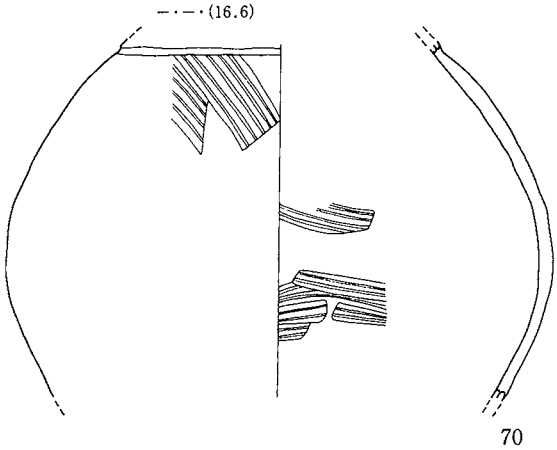


69

15号土坑　A－B
1．7.5YR2/1　黒褐色土
2．7.5YR2/1　黒褐色土　10YR6/4にぶい黄橙色粘質土微量含む
3．10YR1.7/1　泥炭層
4．灰白色火山灰
5．10YR6/4　にぶい黄橙色粘質土



15号土坑



70

第35図　13・14・15号土坑　平面・埋土断面　出土遺物

〈時期〉 埋土の状況から平安時代以前に属するものと推定される。

15号土坑

遺構（第35図、写真図版15）

〈位置と残存状況〉 ⅢＡ２ｃほか。16号土坑と重複し、これより古い。

〈形状と規模〉 平面形は開口部、底部とも不整形であるが、明確でなく、東端は自然に消滅する。灰白色火山灰の堆積により土坑としたものであり、地形的な落ち込みである可能性もある。 実測した規模は420×270cm、深さは中心部で42cmほどである。

〈埋土〉 ５層に細分される。灰白色火山灰の堆積層は第２層である。

〈遺物の出土〉 埋土および底面から出土している。土器で構成されるが、用水路に近いため湧水が著しく、土師器の残存状況は不良である。

〈時期〉 出土遺物から奈良時代に属する可能性が高い。

遺物（第35図、写真図版22）

〈土器〉 69、70とも土師器甕形土器。いずれもロクロ非使用の球胴甕であるが、摩耗が著しい。69は口縁部から頸部にかけての破片。内外面ともユビナデ調整。口縁部に段を持ち、外反する。口唇は引き出される。70は頸部から胴部上半にかけての破片。内外面ともハケメ調整。

16号土坑

遺構（第36図、写真図版16）

〈位置と残存状況〉 ⅢＡ２ｃ。15号土坑と重複し、これより新しい。

〈形状と規模〉平面形は開口部、底部とも不整楕円形を呈する。規模は開口部が186×106cm、底部が178×83cm、深さは中心部で９cmである。

〈埋土〉 黒褐色土のほぼ単層である。灰白色火山灰の堆積層はない。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 埋土の状況から平安時代以前に属するものと推定される。

17号土坑

遺構（第36図、写真図版16）

〈位置と残存状況〉 ⅢＡ３ｃ。

〈形状と規模〉 平面形は開口部は不整円形、底部は不整楕円形を呈する。規模は開口部が184×178cm、底部が91×76cmである。深さは中心部で21cmである。

〈埋土〉 ２層に分けられる。灰白色火山灰の堆積層はない。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

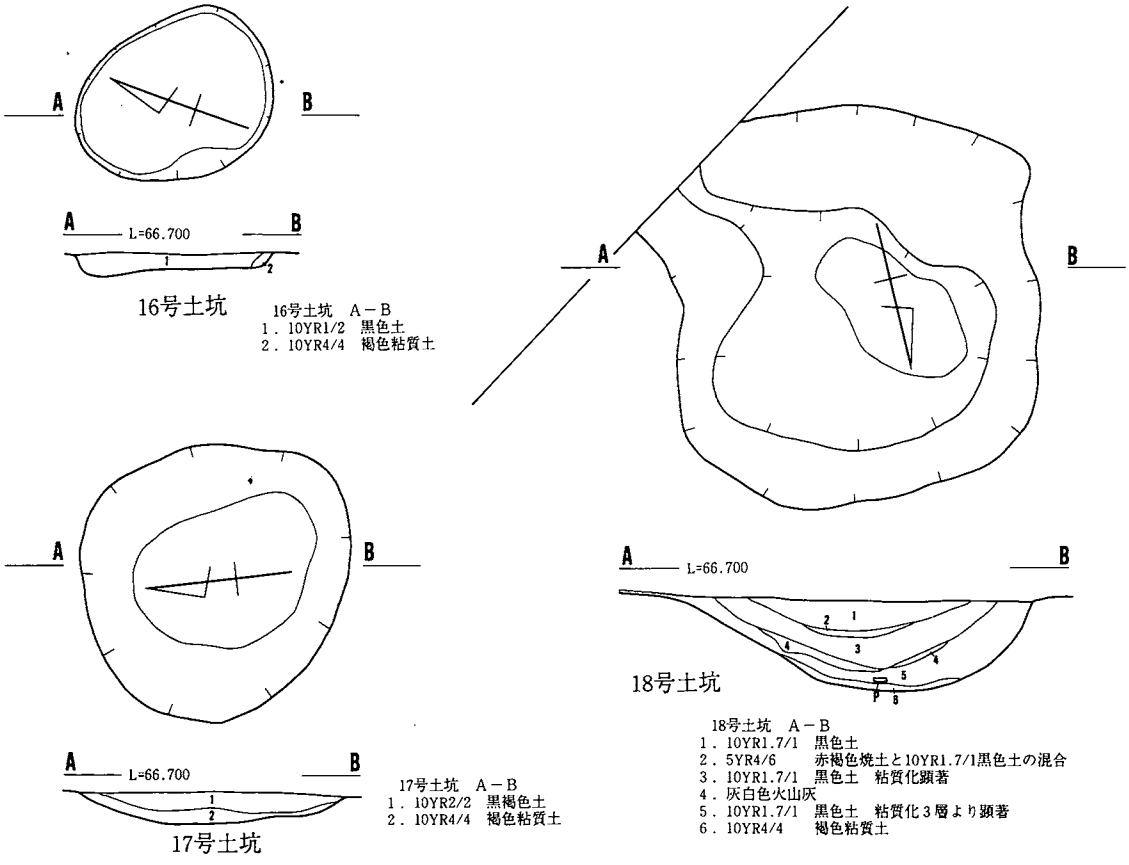
〈時期〉 埋土の状況から平安時代以前に属するものと推定される。

18号土坑

遺構（第36図、写真図版16）

〈位置と残存状況〉 ⅢＡ３ｂほか。遺構の東南端は遺構外へ続く。

〈形状と規模〉 平面形は開口部、底部とも不整形を呈するが、壁面の崩落その他の撹乱現象により原形をよ



第36図　16･17･18号土坑平面・埋土断面

〈残していないものと思われる。規模は開口部が273×248cm、底部が114×67cm、深さは中心部で60cmである。

〈埋土〉 6層に分けられるが、用水路に近いための埋土の粘質化が著しい。灰白色火山灰の堆積層は第2層である。

〈遺物の出土〉 埋土および底面から出土している。土器で構成されるが、用水路に近いため湧水が著しく、土師器の残存状況は不良である。

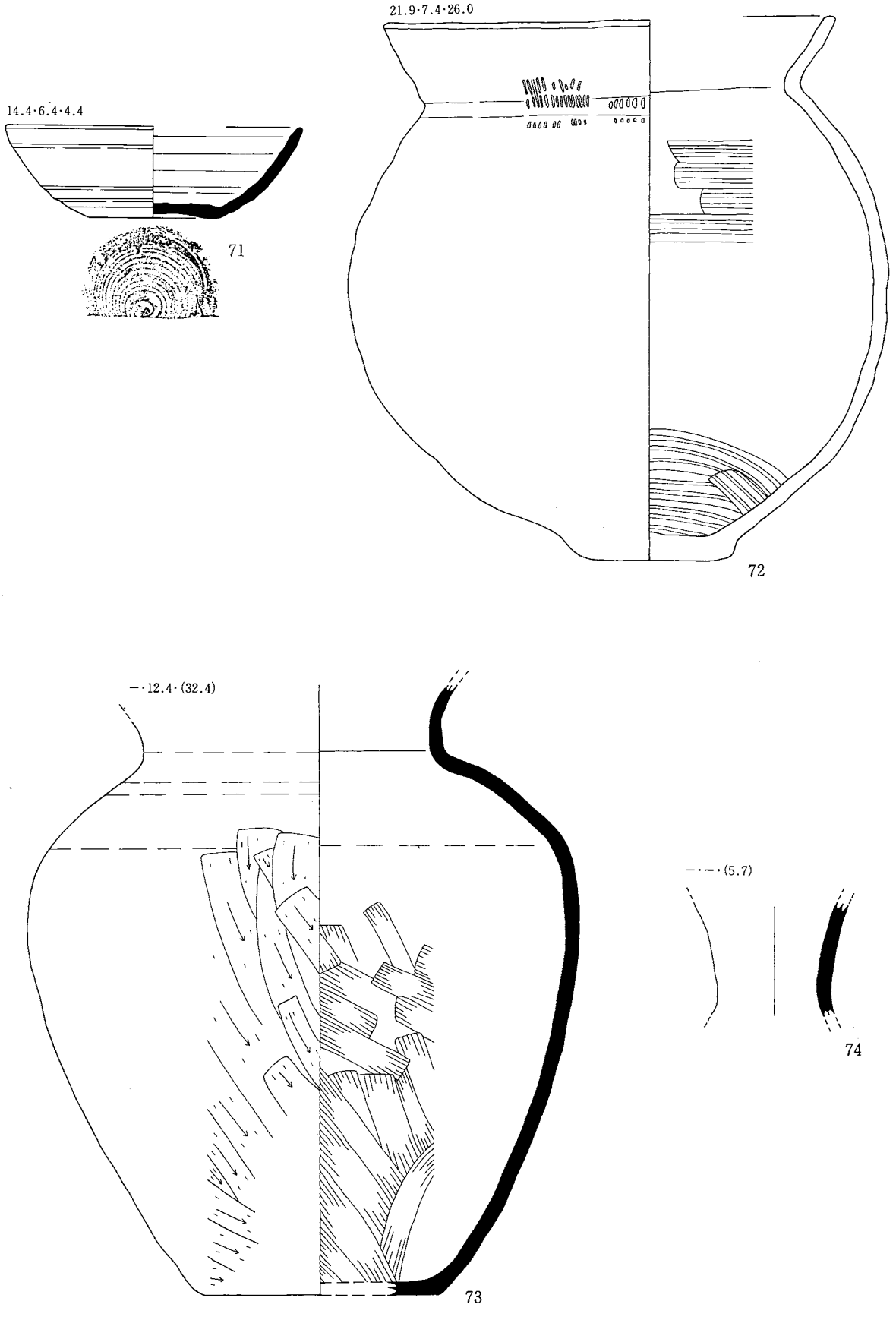
〈時期〉 2時期にわたる遺物が出土しているが、71は埋土、72が底面からの出土であり、奈良時代に属するものと思われる。

遺物（第37図、写真図版22）

〈土器〉 71は須恵器坏形土器。ロクロ成形で薄手。底部切り離しは回転糸切り。内外面とも無調整で、焼成は良く、色調は暗灰色を呈する。底部から低い角度で立ち上がった後、やや急な角度に輪郭を変え、直線的な輪郭を持つ。72は底面から出土した土師器甕形土器。球胴甕であるが、摩耗が著しい。外面の頸部および内面をハケメ調整。口縁部から胴部上半に丹塗りの痕跡が残る。

5．遺構外の出土遺物　（第37図、写真図版22）

遺構の集中するⅡB区東半からⅢA区北半にかけての一帯に摩耗した土師器片が出土するが、接合・復元することのできるものや、実測できるものは僅少である。73は須恵器甕形土器。ロクロ成形の壷形を呈し、最大径は胴部上位にある。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整である。74は須恵器長頸瓶の頸部破片。ロクロ成形である。



第37図　18号土坑　出土遺物・遺構外出土遺物

V．まとめと考察

今回の調査で検出した遺構は、陥し穴状遺構が１基、竪穴住居跡が６棟、炭窯跡が１基、土坑が18基である。遺構はいずれも後世の削平、特に桑の栽培のための耕作溝による攪乱によって残存状況が不良である。また、調査区の南東側は用水路に近いため、遺構は埋土の粘質化が著しい。検出した遺構のうち、陥し穴状遺構はその形状から縄文時代に、竪穴住居跡と炭窯跡は形状・埋土の状況・出土遺物から平安時代に属するものとした。土坑は出土遺物と埋土の状況から平安時代に属するものと、それ以前に属するものの２つに分けられる。

竪穴住居跡は６棟が検出された。調査区のⅡＡ区に３棟、ⅡＢ区に２棟、ⅢＢ区に１棟あり、平面形は隅丸方形のものが４棟、壁が失われており平面形のはっきりしないものが２棟である。すべて平安時代に属する。規模は最大の１棟が6.0×5.7ｍであるが、他の５棟は概ね１辺が約4.0～3.5ｍの範囲に収まる。深さは約30～10㎝である。すべて床面あるいは埋土下位に灰白色火山灰が堆積する。カマドの構築位置は北東壁に構築されているものが２棟、南東壁に構築されているものが２棟、南西壁に構築されているものが２棟である。このうち４棟は黒褐色土を芯に黄褐色土を貼ってカマドを構築している。煙道部を検出したものはない。後世の削平によって失われたものと思われる。柱穴配置が明確なものは１棟のみで、他の５棟は柱穴は検出されたがその配置は不明である。すべて貼り床であり、掘り方を伴う。いずれの竪穴住居跡からも土師器・須恵器を主とした遺物が出土している。６棟とも形状・規模・埋土の状況・出土遺物の構成とも類似しており、同時期に属するものと推定される。出土遺物に、胴部上半にタタキ目調整の見られる土師器甕形土器(12、34、35）を伴う竪穴住居跡（１号竪穴住居跡、５号竪穴住居跡）があり、９世紀前半に属するものと可能性が高い。また、出土した土器片が１号炭窯から出土した遺物と接合する竪穴住居跡(３号竪穴住居跡、４号竪穴住居跡)もあり、１号炭窯跡と竪穴住居跡群は同時期に存在していたものと考えられる。

１号炭窯跡はⅡＢ区南半の北西から南東方向にかけてごく僅かに傾く平坦地にある。平面形は斜面に沿った北東－南西方向に軸を持つ小判形で、斜面の下方にあたる南西方向の壁が焼成を受けて赤色変化しており、半地下式の構造窯と考えられる。埋土には灰白色火山灰が堆積して層を成す。底面のピットは杭跡と考えられ、南西壁の一部は掘り込みの上を版築状につき固めたように見える。これらから簡便な構造の上部施設を備えていたものであろう。出土した木炭は岩手県木炭協会の早坂松次郎氏の御教示によると、良質ではないということであるが、良質な炭を確保した後に廃棄されたものである可能性も高い。埋土に火山灰を含む平安時代の半地下式の構造窯は北上市南部工業団地遺跡など県内でも数基検出されているが、それらと比較しても構造的に単純であり、伏せ焼き窯から構造窯への過渡的な性格を持つものと考えられる。

土坑は炭窯跡に近接したⅡＢ区東南半からⅢＢ区西北半へと続く一帯から18基が検出された。平面形は円形を基調とするものが大半を占めるが、隅丸長方形のものや不整楕円形のものもある。ほとんどが埋土に灰白色火山灰の堆積層がある。灰白色火山灰堆積層の上下に泥炭層がレンズ状に形成されているものが多く、火山灰の堆積当時から低湿地であったものと推定される。底面あるいは埋土下位に火山灰の堆積層を含むものからの遺物出土はないが、埋土上位に灰白色火山灰を含むもの２基からは平安時代以前の遺物が出土している。底面あるいは埋土下位に火山灰の堆積層を含むものは平安時代に、埋土上位に火山灰の堆積層を持つものは奈良時代に属するものと思われる。平安時代に属する土坑は炭窯と何らかの関連を持つものと考えられる。土坑のなかには埋土に泥炭層が形成されているものもみられることから、遺構の埋没当時から低湿地であったものと思われるが、意識的に湧水を利用していた可能性もある。一般に平安時代に属する炭窯跡は

近くに製鉄遺構を伴う場合が多いが、今回の調査では、製鉄を伺わせる遺構は検出されなかった。製鉄関連の遺物も、6号住居跡から羽口(52)が1点出土したが、カマドからの出土であり支脚として使用された可能性が高い。したがって、1号炭窯跡は製鉄との関連を積極的には言えない。

今回の調査によって出土した遺物は総数で73点である。遺構数に比較して遺物の数は少ないが、遺構との共伴関係は明確である。遺物の大半は平安時代の土師器、須恵器である。木製品は22号土坑から出土している。埋土上位に火山灰の堆積層を伴い、平安時代以前に属する可能性が高いが、器種は不明である。

以上のことから、本遺跡は平安時代の木炭生産と関連の深い集落跡を中心とするものと考えられるが、遺構の埋土の状況からうかがえるように、集落の存続時から湧水の著しい地域であったという遺跡の立地条件を含め再考すべき点は多い。炭窯の立地条件、生産した木炭の用途、同様な構造を持つものの分布については類例の増加をまって今後の検討課題としたい。

龍ヶ馬場遺跡出土土器観察表－1

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底部再調整	計測値：cm			備　考
				外面	内面	黒色処理		口径	底径	器高	
1	1住	カマド	須・坏	なし	なし	なし	○	12.6	6.6	5.9	
2	1住	P 7	須・坏	なし	なし	なし	なし	13.5	6.0	4.7	
3	1住	柱穴1埋土	須・坏	なし	なし	なし	－	14.6	－	(4.6)	
4	1柱	柱穴2埋土P 6	土・坏	なし	M	○	○	14.5	5.9	6.8	
5	1住	床面	土・坏	なし	M	○	なし	15.6	6.6	6.1	

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底面	計測値：cm			備　考
				口縁	体上	体下		口径	底径	器高	
6	1住	床面	土・甕	なし	HK	－	－	20.0	－	(8.5)	
7	1住	P 2	土・甕	なし	なし	なし	なし	17.0	7.0	14.2	
8	1住	柱穴1埋土	土・甕	なし	なし	なし	KI	18.0	6.4	15.8	
9	1柱	カマド＋床面	土・甕	なし	HK	－	－	15.0	－	(5.2)	
10	1住	柱穴2埋土	土・甕	－	－	T,HK	なし	－	7.4	4.5	
11	1住	P 5＋柱穴1	土・甕	－	HN	HK	なし	－	8.6	(10.2)	
12	1住	カマド＋P 6、8	土・甕	なし	T	T,HK	なし	23.0	5.2	35.8	
13	1住	P 1	土・甕	なし	なし	HK	－	23.8	－	(36.9)	

鉄　製　品

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	長さ	幅	厚さ	重量	備　考
14	1住	床面	手斧	6.2	2.6	1.2	－	

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底部再調整	計測値：cm			備　考
				外面	内面	黒色処理		口径	底径	器高	
15	南西	カマド	須・坏	なし	なし	－	なし	－	6.2	(2.0)	
16	カマド	P 7	土・坏	なし	M	○	なし	13.7	7.0	4.7	
17	北西	柱穴1埋土	土・坏	なし	M	○	なし	12.8	5.0	4.7	
18	北西	柱穴2埋土P 6	土・坏	なし	M	○	なし	14.8	6.0	7.2	

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底部再調整	計測値：cm			備　考
				口縁	体上	体下		口径	底径	器高	
19	2住	埋土	土・甕	なし	HK	－	－	25.6	－	(14.0)	
20	2住	P 1＋埋土	土・甕	なし	なし	－	－	21.0	－	(6.4)	
21	2住	カマド	土・甕	なし	なし	－	－	15.0	－	(13.0)	
22	2住	カマド＋P 1	土・甕	－	HK	T	なし	－	6.6	(21.2)	

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底部再調整	計測値：cm			備　考
				外面	内面	黒色処理		口径	底径	器高	
23	3住	北埋土	須・坏	なし	なし	なし	なし	－	9.0	(2.6)	
24	3住	カマド	須・坏	なし	なし	なし	なし	14.4	6.8	5.7	
25	3住	床面	須・坏	なし	なし	なし	なし	14.0	6.8	5.5	

龍ヶ馬場遺跡出土土器観察表－2

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底面	計測値：cm			備　考
				口縁	体上	体下		口径	底径	器高	
26	3住	カマド	土・甕	なし	HK	－	－	20.1	－	(9.1)	
27	3住	P2	須・壷	－	なし	HK	－	－	－	(11.7)	
28	3住	P3＋1号炭窯	須・壷	－	T	なし	－	－	10.0	(15.5)	

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底部再調整	計測値：cm			備　考
				外面	内面	黒色処理		口径	底径	器高	
29	4住	P3	須・坏	なし	なし	なし	なし	14.0	5.3	4.1	
30	4住	土坑1埋土	須・坏	なし	なし	なし	なし	14.2	5.4	4.4	
31	4住	土坑5埋土	須・坏	なし	なし	なし	なし	13.8	6.0	4.4	

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底面	計測値：cm			備　考
				口縁	体上	体下		口径	底径	器高	
32	4住	土坑1	土・甕	なし	HK	－	－	23.7	－	(15.8)	

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底部再調整	計測値：cm			備　考
				外面	内面	黒色処理		口径	底径	器高	
33	5住	P1＋P4＋P5	須・坏	なし	なし	なし	なし	16.0	7.0	4.7	

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底面	計測値：cm			備　考
				口縁	体上	体下		口径	底径	器高	
34	5住	カマド	土・甕	T	T,HK	－	－	24.4	－	(15.5)	
35	5住	床面＋カマド＋炭窯	土・甕	T	T,HK	－	－	23.6	－	(21.8)	
36	5住	カマド燃焼部＋32土坑	土・甕	－	－	なし	KI	－	7.4	(9.9)	

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底部再調整	計測値：cm			備　考
				外面	内面	黒色処理		口径	底径	器高	
37	6住	カマド	土・坏	なし	M	○	なし	12.5	6.0	5.0	
38	6住	カマド＋床面	土・坏	なし	なし	なし	なし	14.0	6.0	4.7	
39	6住	埋土	土・坏	なし	M	○	なし	－	5.0	(2.4)	
40	6住	埋土	土・坏	なし	なし	－	－	12.0	－	(4.4)	
41	6住	北東埋土	土・坏	なし	なし	－	－	13.0	－	(4.5)	

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底面	計測値：cm			備　考
				口縁	体上	体下		口径	底径	器高	
42	6住	カマド	土・甕	なし	なし	－	－	20.0	－	(5.9)	
43	6住	カマド	土・甕	なし	HN	－	－	18.2	－	(4.5)	
44	6住	焼土5	土・甕	なし	HK	HK	－	26.0	－	(30.2)	
45	6住	埋土	土・甕	なし	なし	－	－	23.0	－	(8.0)	
46	6住	焼土4	土・甕	なし	HN	－	－	27.2	－	(8.0)	

龍ヶ馬場遺跡出土土器観察表－3

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底面	計測値：cm			備　考
				口縁	体上	体下		口径	底径	器高	
47	6住	カマド	土・甕	なし	HN	－	－	27.6	－	(12.7)	
48	6住	カマド	土・甕	－	－	HK	なし	－	8.4	(18.4)	
49	6住	カマド	土・甕	なし	－	－	－	26.0	－	(4.5)	
50	6住	カマド＋埋土	土・甕	－	－	HK	なし	－	10.0	(5.0)	
51	6住	カマド＋ⅡA表採	土・甕	－	HK,H	－	－	－	－	－	粘土塗付

土　製　品

52	6住	カマド	ふいご羽口								

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底部再調整	計測値：cm			備　考
				外面	内面	黒色処理		口径	底径	器高	
53	1炭窯	埋土	須・坏	なし	なし	なし	○	15.0	6.0	6.0	
54	1炭窯	埋土	須・坏	なし	なし	なし		14.6	5.8	4.2	

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底部再調整	計測値：cm			備　考
				外面	内面	黒色処理		口径	底径	器高	
55	1炭窯	埋土	土・甕	なし	なし	－	－	26.8	－	(8.8)	

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	長さ	幅	厚さ	備　考
56	3土坑	埋土	箆状木製品	32.7	4.0	1.6	柄部の径 2.4×1.7cm
57	3土坑	埋土	板状木製品	20.6	15.0	6.8	
58	3土坑	埋土	棒状木製品	8.4	5.8	5.0	
59	3土坑	埋土	棒状木製品	17.8	5.8	5.0	
60	3土坑	埋土	棒状木製品	24.7	4.9	3.4	
61	3土坑	埋土	棒状木製品	11.7	6.2	5.8	
62	3土坑	埋土	棒状木製品	17.9	6.6	5.7	

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底面	計測値：cm			備　考
				口縁	体上	体下		口径	底径	器高	
63	12土坑	南半埋土	土・甕	なし	HN	－	－	16.6	－	(3.6)	
64	12土坑	南半埋土	土・甕	－	HN	－	－	－	－	(13.0)	
65	12土坑	北半埋土	土・甕	－	－	HK	なし	－	7.4	(15.3)	
66	12土坑	北半埋土	土・甕	－	不明	－	－	－	－	(17.3)	
67	12土坑	P3、南半埋土	土・甕	－	－	H	－	－	－	(12.1)	
68	12土坑	P1	土・甕	－	－	HK？	－	－	5.2	6.9	

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底面	計測値：cm			備　考
				口縁	体上	体下		口径	底径	器高	
69	15土坑	P1	土・甕	YN	YN	－	－	21.0	－	(6.7)	奈良時代

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底部再調整	計測値：cm			備　考
				口縁	体上	体下		口径	底径	器高	
70	15土坑	埋土	土・甕	－	H	不明	－	－	－	(16.6)	奈良時代

龍ヶ馬場遺跡出土土器観察表－4

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底部再調整	計測値：cm			備　考
				外面	内面	黒色処理		口径	底径	器高	
71	18土坑	埋土	須・坏	なし	なし	なし	なし	14.4	6.4	4.4	
72	18土坑	埋土	土・甕	なし	T	不明	不明	21.9	7.4	26.0	口縁部丹

No	遺　構	地点・層位	種類・器種	器面調整			底面	計測値：cm			備　考
				口縁	体上	体下		口径	底径	器高	
73	遺構外	ⅢＡ表採	須・壷	－	ＨＫ	ＨＫ	なし	－	12.4	(32.4)	
74	遺構外	ⅢＡ３ｂ	須・壷	－	－	－	－	－	－	(5.7)	頸部

付編２．

水沢市龍ケ馬場遺跡出土材の樹種

高橋　利彦（木工舎「ゆい」）

１．試料

試料はNo．１，２の２点で、用途不明の木製品・加工材である。３号土坑の埋土最下層から検出されたもので奈良時代のものと考えられている。

２．方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柾目・板目の３面の徒手切片を作成、ガム・クロラール(Gum Chloral)で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真も作成した。なお作成したプレパラートは木工舎「ゆい」に保管されている。

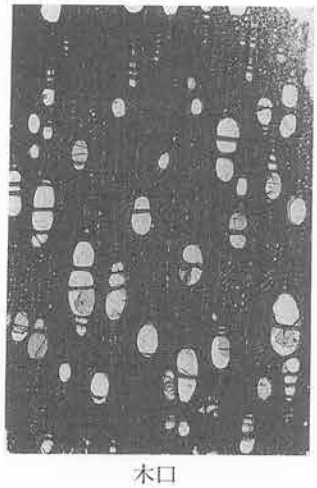
３．結果

試料は２点ともカエデ属の一種に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。

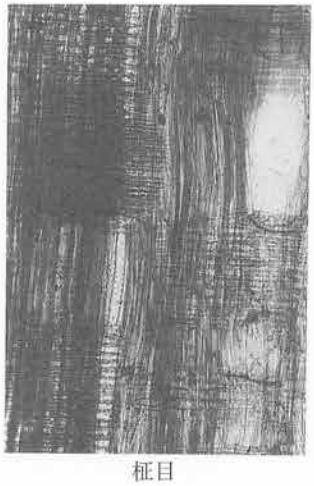
・カエデ属の一種（Acer sp.）　カエデ科　No．１，２

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円計、単独および２～３個が複合、晩材部にへ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔をもち、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１～５細胞幅、１～30細胞幅で時に100細胞高を越える。柔組織はターミナル状、周囲状または随伴散在状、接線状。年輪界はやや不明瞭。

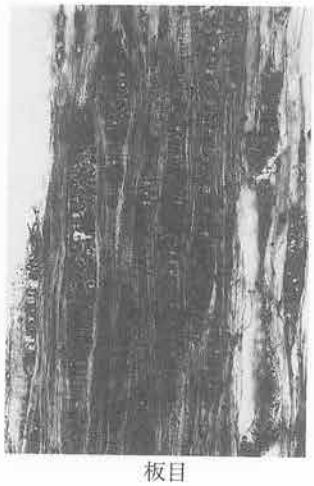
カエデ属は、イロハモミジ（Acer palmatum）やハウチワカエデ(A. japonicum)など26種が自生し、また多くの品種があり植栽されることも多い。属としては琉球を除くほぼ全土に分布する落葉高木～低木である。一般に材質はやや重厚・強靭で、加工はやや困難、保存性は中程度である。器具・家具・建築・装飾・旋作・薪炭材などに用いられる。



木口



柾目



板目

カエデ属の一種

付編３．

水沢市龍ケ馬場遺跡出土木炭の分析・調査

川鉄テクノリサーチ株式会社分析・評価センター　岡原　正明・伊藤　俊治

１．はじめに

岩手県埋蔵文化財センター殿で発掘調査されました水沢市龍ケ馬場遺跡出土の木炭について、学術的な記録のために自然科学的な観点での調査のご依頼がありました。

その結果についてご報告いたします。

２．調査項目および試験・検査方法

(1)調査資料一覧および調査項目は次のとおりです。

資料No	種　別	重量ｇ	工業分析	発熱量	外観写真
1	木炭１	26.7	○	○	○
2	木炭２	23.2	○	○	○
3	木炭３	66.8	○	○	○
4	木炭４	16.0	○	○	○
5	木炭５	21.7	○	○	○

註）重量は水分込みの値
　　各種試験は付着土の影響を除いた水洗・乾燥後の値

(2)重量計測

軽重量は電子天秤を使用して行い、小数点以下１位で四捨五入しました。

(3)工業分析

工業分析および化学分析（硫黄と燐）はＪＩＳの分析法に準じて行いました。工業分析法の概略は次のとおりであります。

①付着水(水分)：0.25㎜以下に粉砕した資料を、40℃で食塩飽和溶液と平衡な湿度下に６時間保った後、これを基準として105～110℃で１時間乾燥し、前後の重量差から求める。

②灰分　　：乾燥後の試料を空気中750℃で加熱し灰化させる。試料に対する残留灰分の重量から求める。

③揮発分　　：空気を遮断して試料を950℃で７分間加熱したときの減量を計り、百分率を計算し、この値から付着水分を除いて求める。

④固定炭素：固定炭素＝100－〔水分（％）＋灰分（％）＋揮発分（％)〕で求める。

(4)発熱量測定

試料１ｇ採取し、非断熱式ボンブ熱量計に挿入した後、酸素雰囲気中で燃焼させ、発熱量を求めました。

(5)外観の観察と写真撮影

上記各種試験用試料を採取する前に、試料の両面を㎜単位まであるスケールを同時写し込みで撮影しました。

3．調査および考察結果

資料にはいずれも発掘時の土が付着していたので、工業分析および発熱量等の測定に先立って軽く洗浄を行った。

外観写真から明らかなように、資料は木炭の形状を保っているが、中には表面に灰の様な白色を呈したもの、鉄銹の様な斑点が付着しているものがある。資料No.3は他の資料とは異なり、灰分が多く、発熱量が少ない。高温で空気中に長時間置かれ炭素分が焼失して結果によるものと考えられる。一般に木炭の様に角張った炭素が燃焼する場合、先端部のとがった部分から優先的に燃焼するので、外観写真で観る限り、砕かれ製鉄炉や鍛冶炉で使用されたものではなく、なんらかの原因で炭焼き窯の中で燃焼が特に進行した長い木炭を破砕した資料と考えられる。

大きく分けて木炭には樫の堅木を原料にした堅炭と、楢や松を原料とした軟炭とがある。双方の木炭とも灰分は1～3％、炭素量（≒固定炭素として）は80％前後である。龍ヶ馬場遺跡から出土した（資料No.3を除く4資料の平均値で）木炭は灰分14.7％と高く、固定炭素52.4％と低く、一方揮発分は32.9％と多い。

木炭の揮発分が多いことは炭焼きの温度が低いか、または焼成時間が短いかに起因し、灰分の量が多いのは炭焼きの過程で酸化を受け炭素の一部が焼失したものと考えられる。資料No.3は高温の状態が長く、充分に揮発分が抜け去ったものと推定される。

一般に木炭の発熱量は6,700～7,500cal/gである。資料No.3を除く他の4資料の平均値は4,850cal/gなのでその70％弱に過ぎない。資料No.3では約53％である。発熱量が少ないのは灰分や揮発分が多く、固定炭素が少ないためである。

木炭中の、鉄の特性を低下させる硫黄や燐の元素は木炭やコークスのそれに較べて非常に少なく、良好な製鉄用還元剤および発熱剤であるといえる。

以上の結果を総合すると、原木の樹種は特定できないが、比較的低温かつ酸素がかなりの量供給された状態で焼成され、焼成・消火後に破砕された木炭と推定される。つまり、製鉄炉あるいは鍛冶炉で使用される以前の木炭と考えられる。

分　析　結　果

（龍ヶ馬場遺跡調査）

単位 成分 資料No		%(m/m)						cal/g
		灰分	揮発分	固定C	付着水	S	P	発熱量
1		14.1	33.0	52.9	15.2	0.04	0.011	5210
2		14.4	32.7	52.9	13.1	0.07	0.007	5020
3		34.4	28.1	37.5	11.8	0.06	0.025	3570
4		11.6	34.1	54.3	13.1	0.03	0.009	4550
5		18.8	31.9	49.3	13.3	0.07	0.016	4620

【分析方法】　分析方法はＪＩＳ法に準拠し、以下の方法とした。

灰分　：重量法　　S　：燃焼－中和滴定法
揮発分　：重量法　　P　：ガラスビート蛍光Ｘ線分析法
固定炭素：計算　　発熱量：Ｂ形熱量計を使用
付着水　：乾燥法

龍ケ馬場遺跡
木炭 1

龍ケ馬場遺跡
木炭 1

龍ケ馬場遺跡
木炭 2

龍ケ馬場遺跡
木炭 2

龍ケ馬場遺跡
木炭 3

龍ケ馬場遺跡
木炭 3

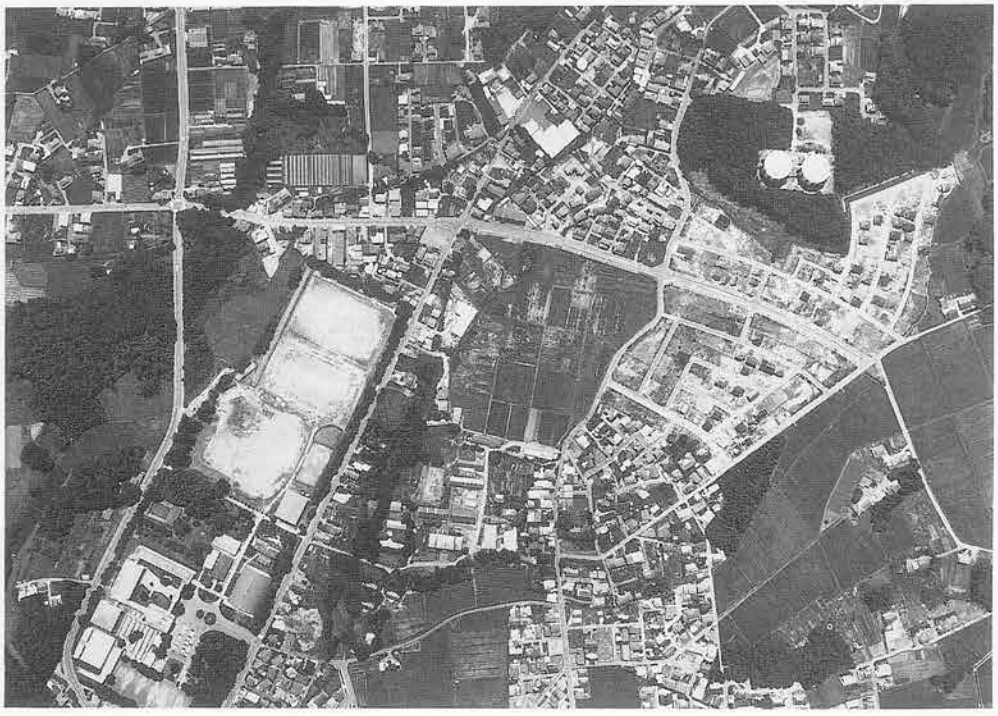
龍ケ馬場遺跡
木炭 4

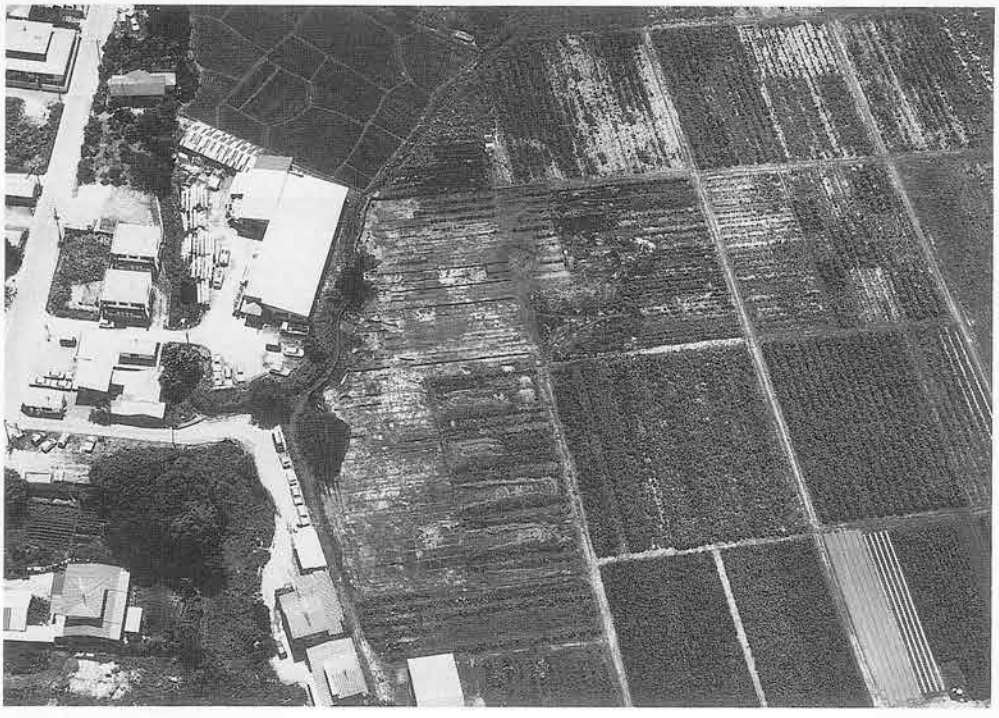
龍ケ馬場遺跡
木炭 4

龍ケ馬場遺跡
木炭 5

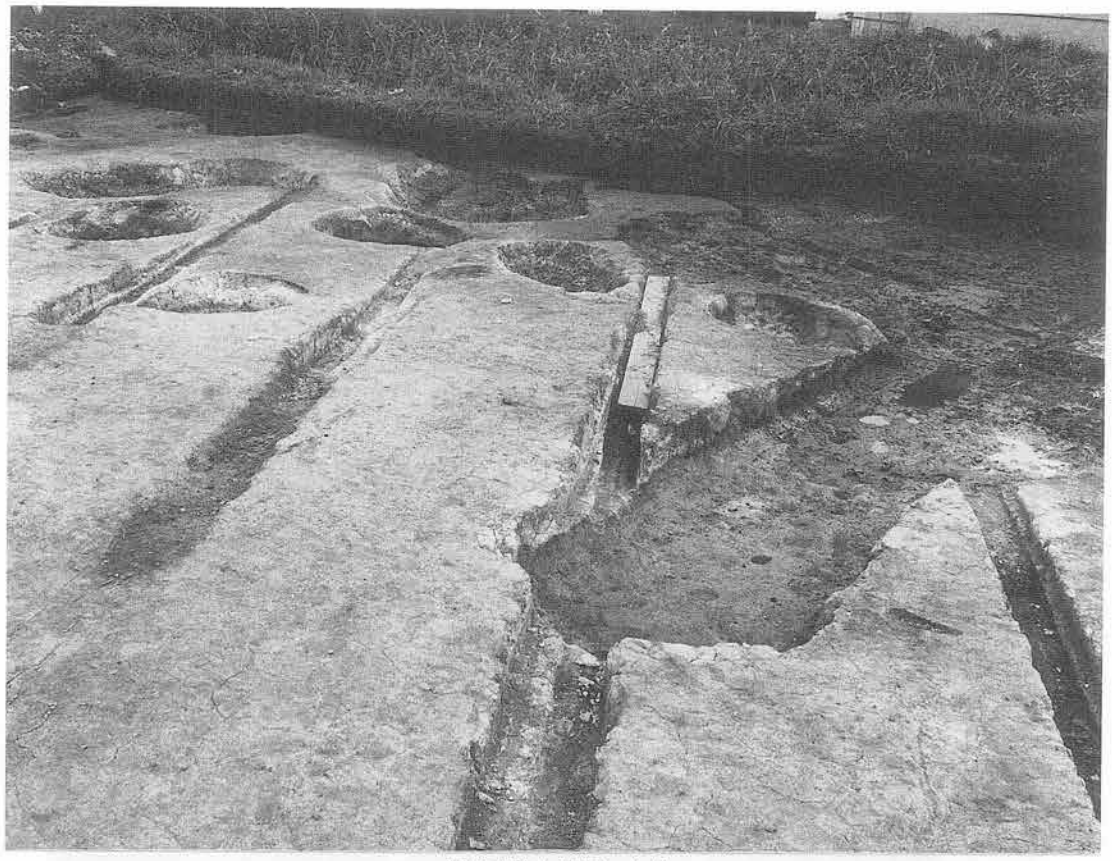
龍ケ馬場遺跡
木炭 5

写　真　図　版





写真図版１　調査区全景

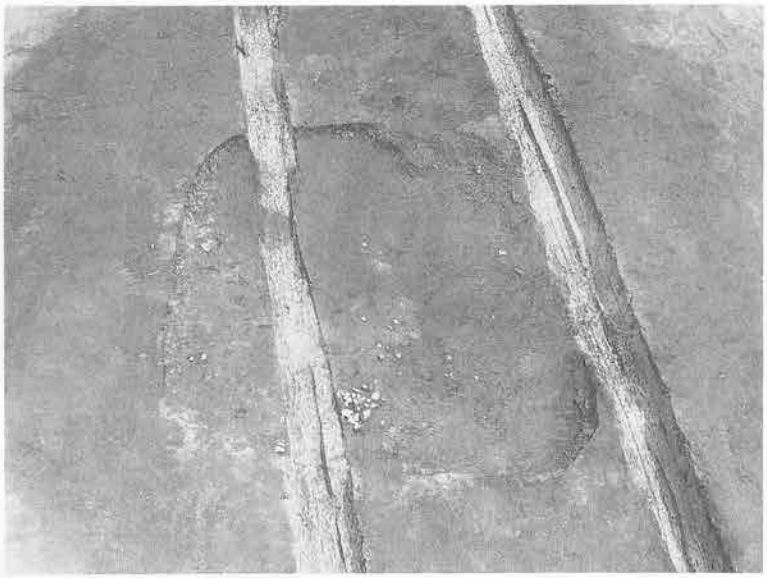


1号炭窯跡と周辺の土坑

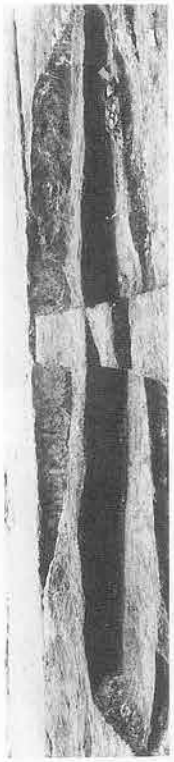
1号陥し穴状遺構 平面

埋土断面

写真図版2　1号炭窯跡と周辺の土坑・1号陥し穴状遺構



完掘平面，埋土断面A－B



埋土断面C－D

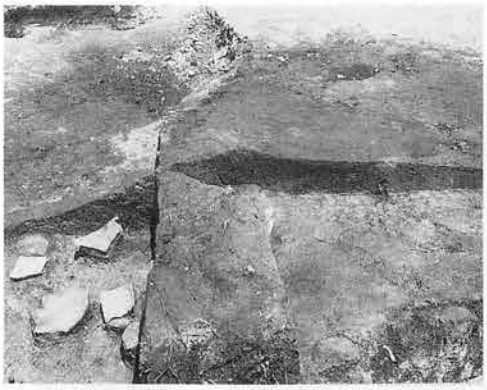
遺物出土状況

遺物出土状況

遺物出土状況

遺物出土状況

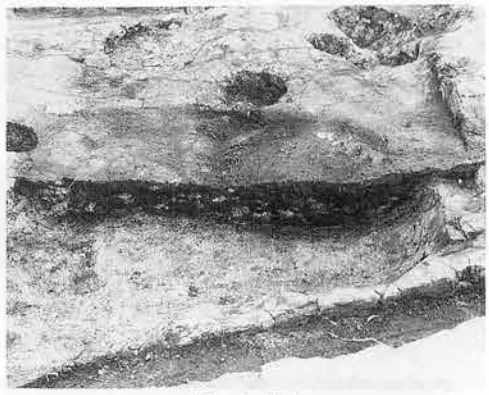
写真図版３　１号竪穴住居跡－１



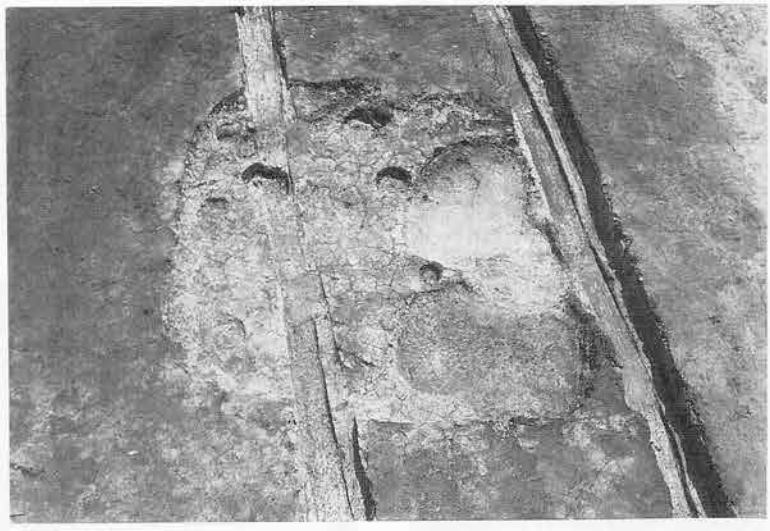
カマド断面a－b

カマド断面c－d（1次）

カマドc－d（2次）



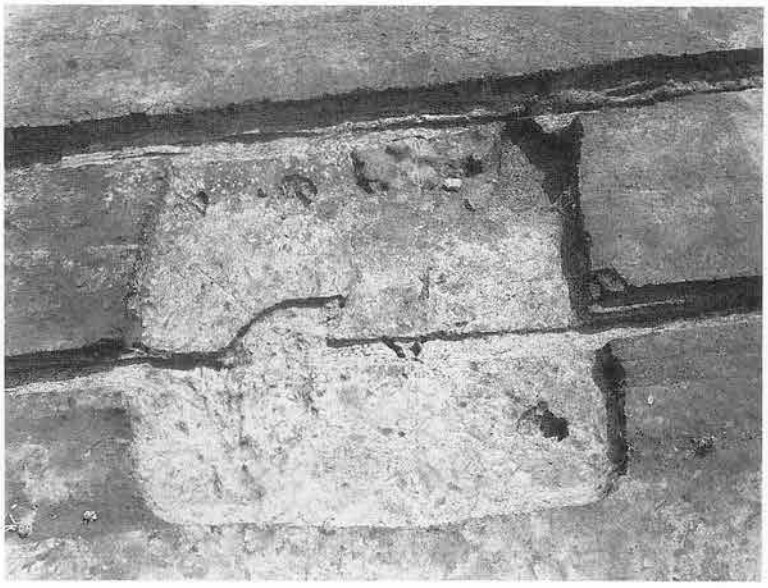
掘り方埋土



掘り方完掘

写真図版4　1号竪穴住居跡－2

埋土断面C－D

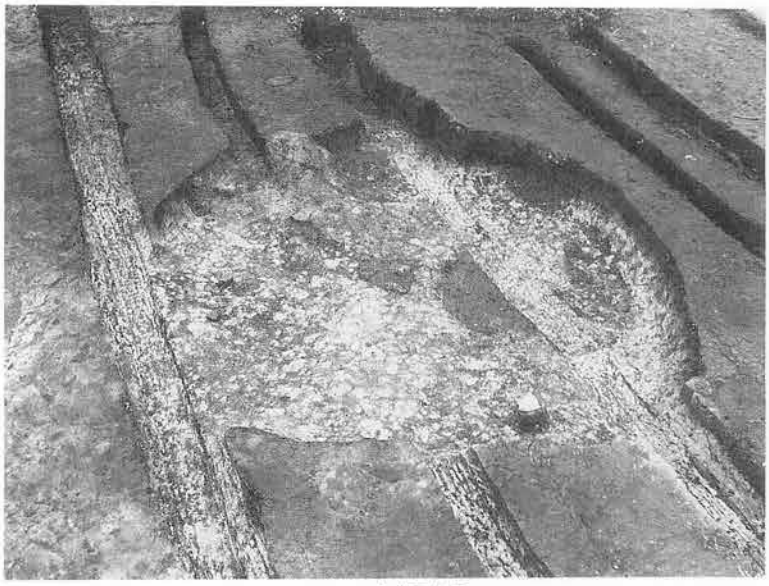


完掘平面，埋土断面A－B

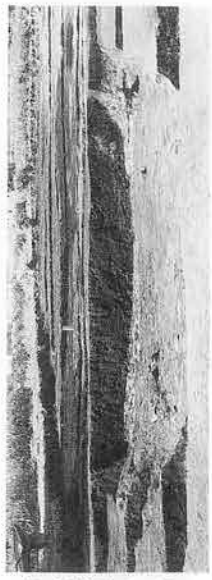
遺物出土状況

カマド断面a－b

写真図版5　2号竪穴住居跡



完掘平面



埋土断面A－B

カマド付近遺物出土状況

カマド断面

カマド断面a－b

掘り方完掘

写真図版6　3号竪穴住居跡

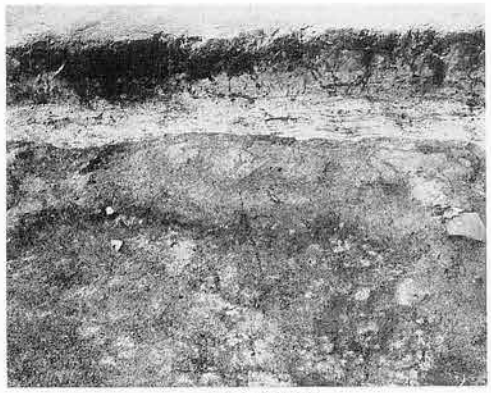
埋土断面C－D

完掘平面，埋土断面A－B

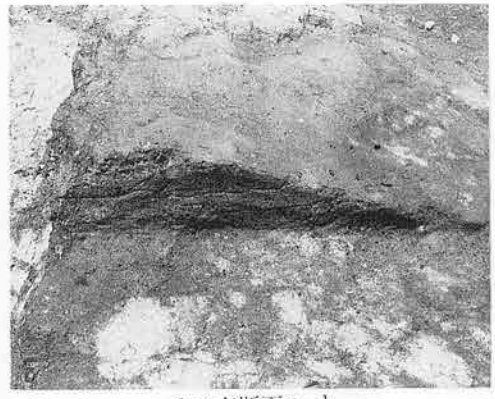
遺物出土状況

遺物出土状況

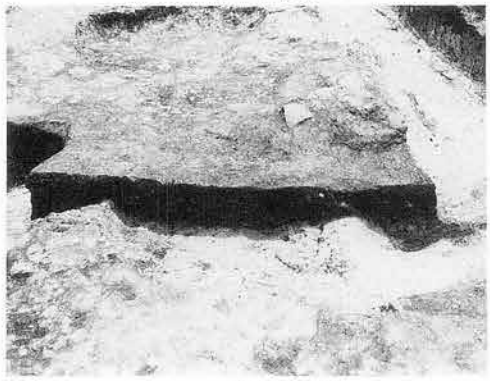
写真図版７　４号竪穴住居跡－１



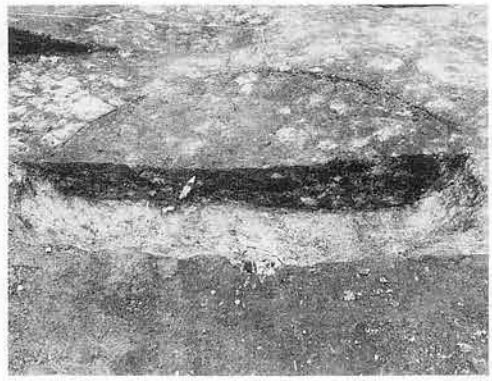
カマド検出



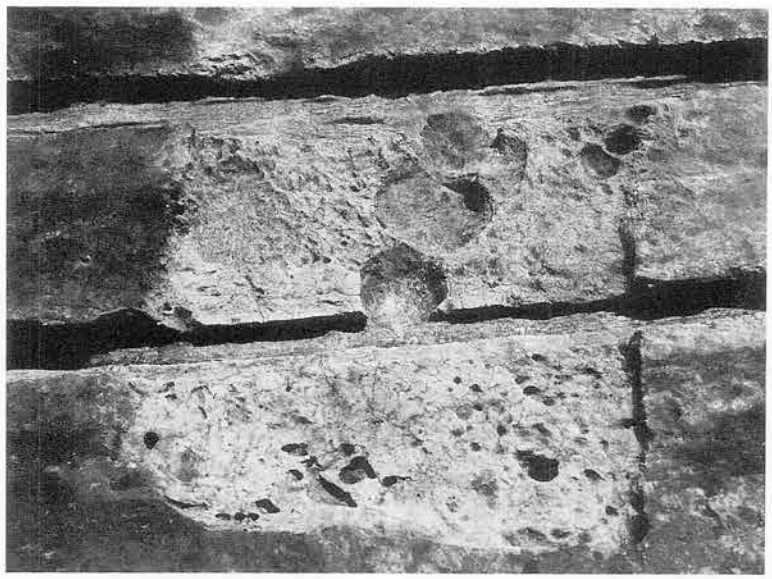
カマド断面 a - b



掘り方 埋土

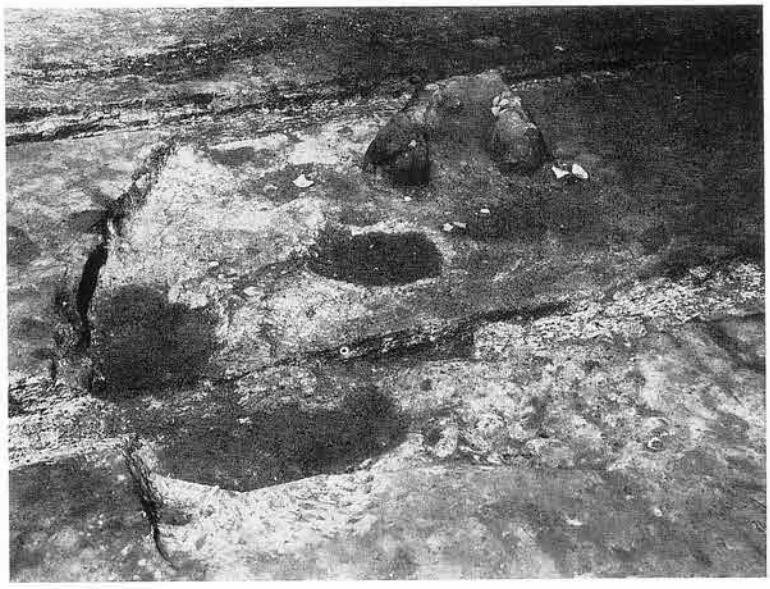


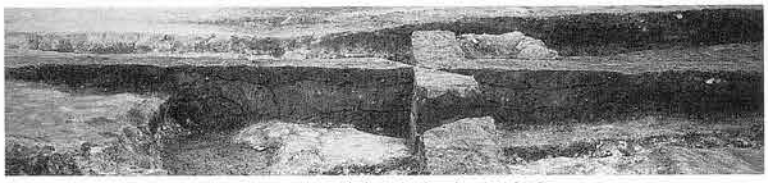
掘り方 埋土



掘り方 完掘

写真図版 8　4 号竪穴住居跡ー 2



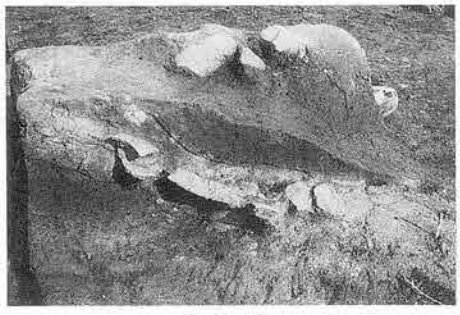


完掘平面，埋土断面Ａ－Ｂ

埋土断面Ｃ－Ｄ

カマド検出

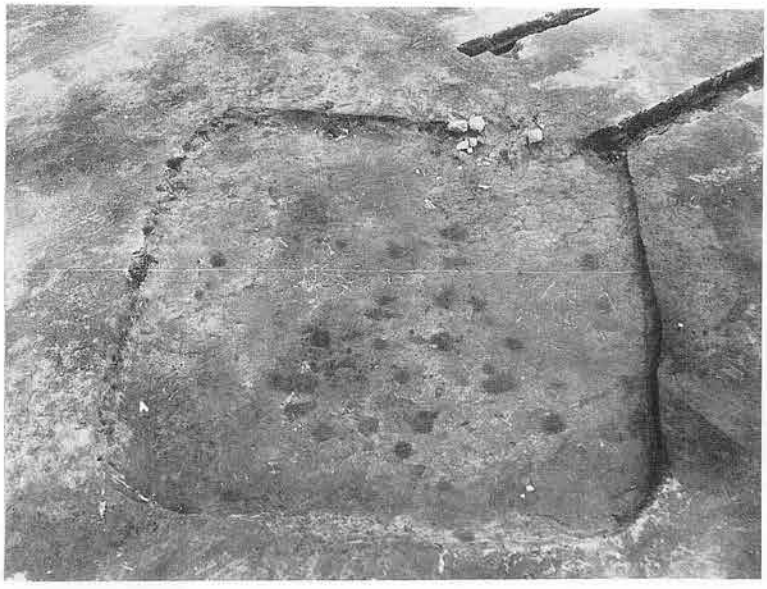
カマド断面ｃ-ｄ



カマド断面ａ-ｂ

遺物出土状況

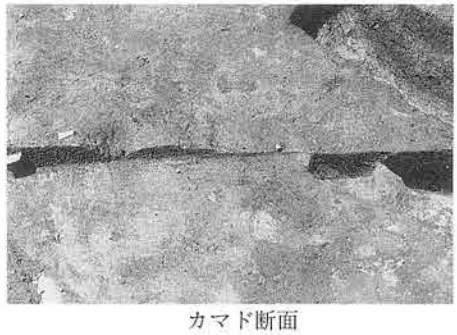
写真図版９　５号竪穴住居跡



完掘平面，埋土断面A－B

埋土断面C－D

カマド検出



カマド断面

カマド断面

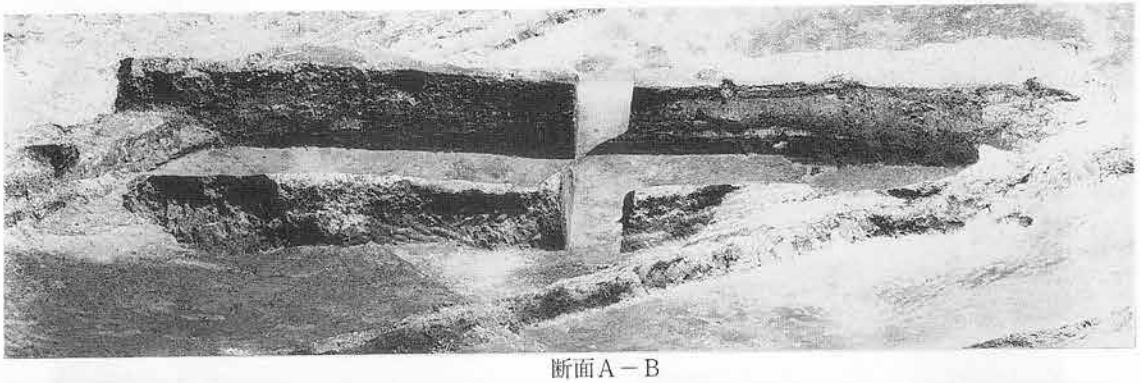
土坑断面

写真図版10　6号竪穴住居跡

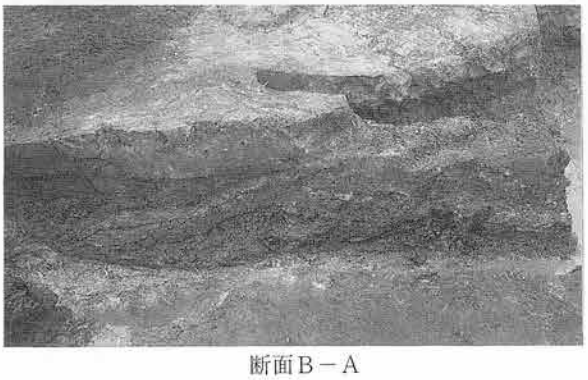
完掘平面

断面C－D

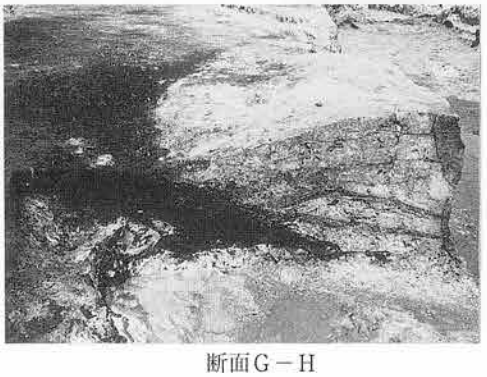
断面E－F



断面A－B



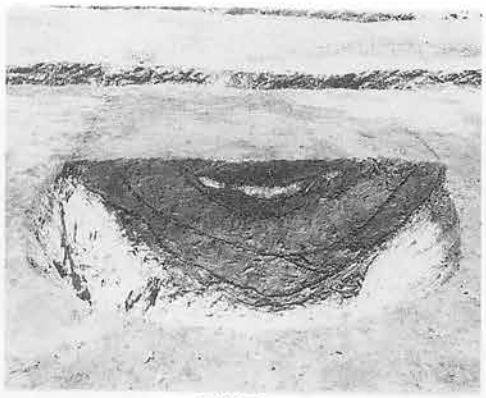
断面B－A



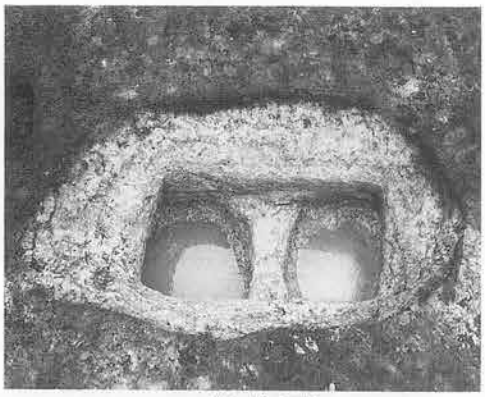
断面G－H

写真図版11　1号炭窯

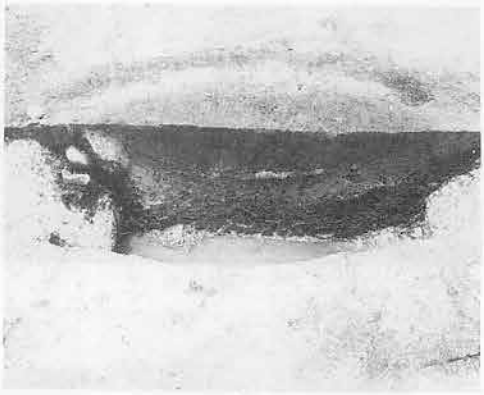
1号土坑 完掘



同断面



2号土坑 完掘



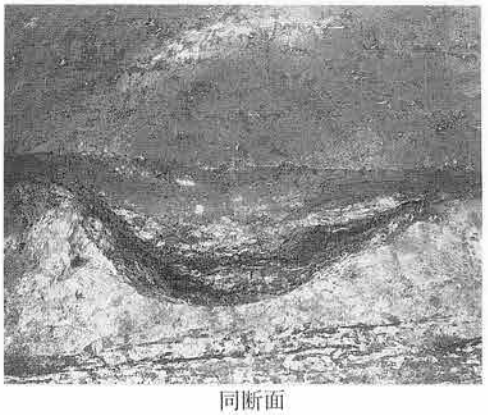
同断面

3号土坑 完掘

同断面

写真図版12　1・2・3号土坑

4 号土坑完掘



同断面

5 号土坑完掘

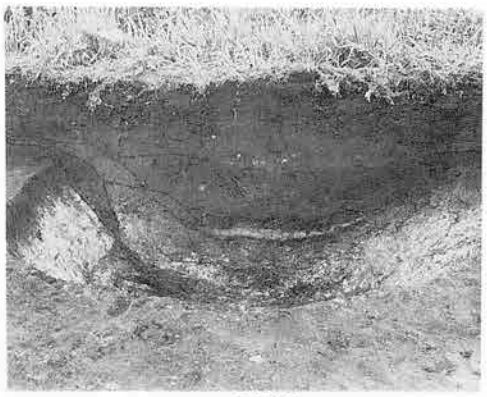
同断面

6 号土坑完掘

同断面

写真図版13　4・5・6号土坑

8号土坑完掘



同断面

9号土坑完掘

同断面

10号土坑完掘

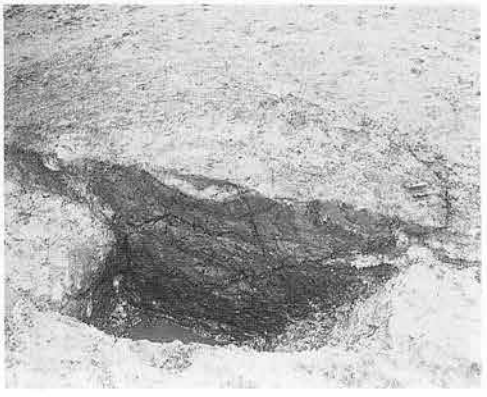
同断面

写真図版14　8・9・10土坑

12号土坑完掘

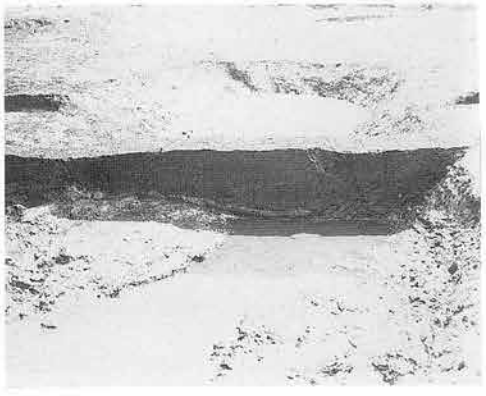
同断面

14号土坑完掘



同断面

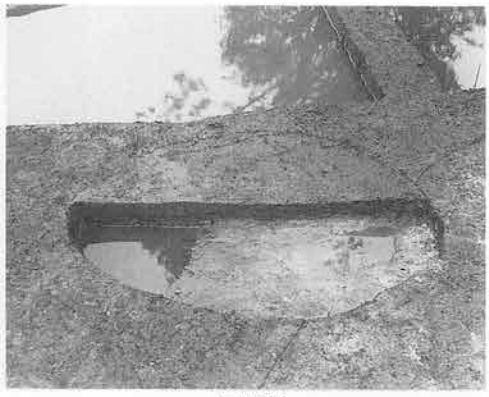
15号土坑完掘



同断面

写真図版15　12・14・15土坑

16号土坑完掘



同断面

17号土坑完掘

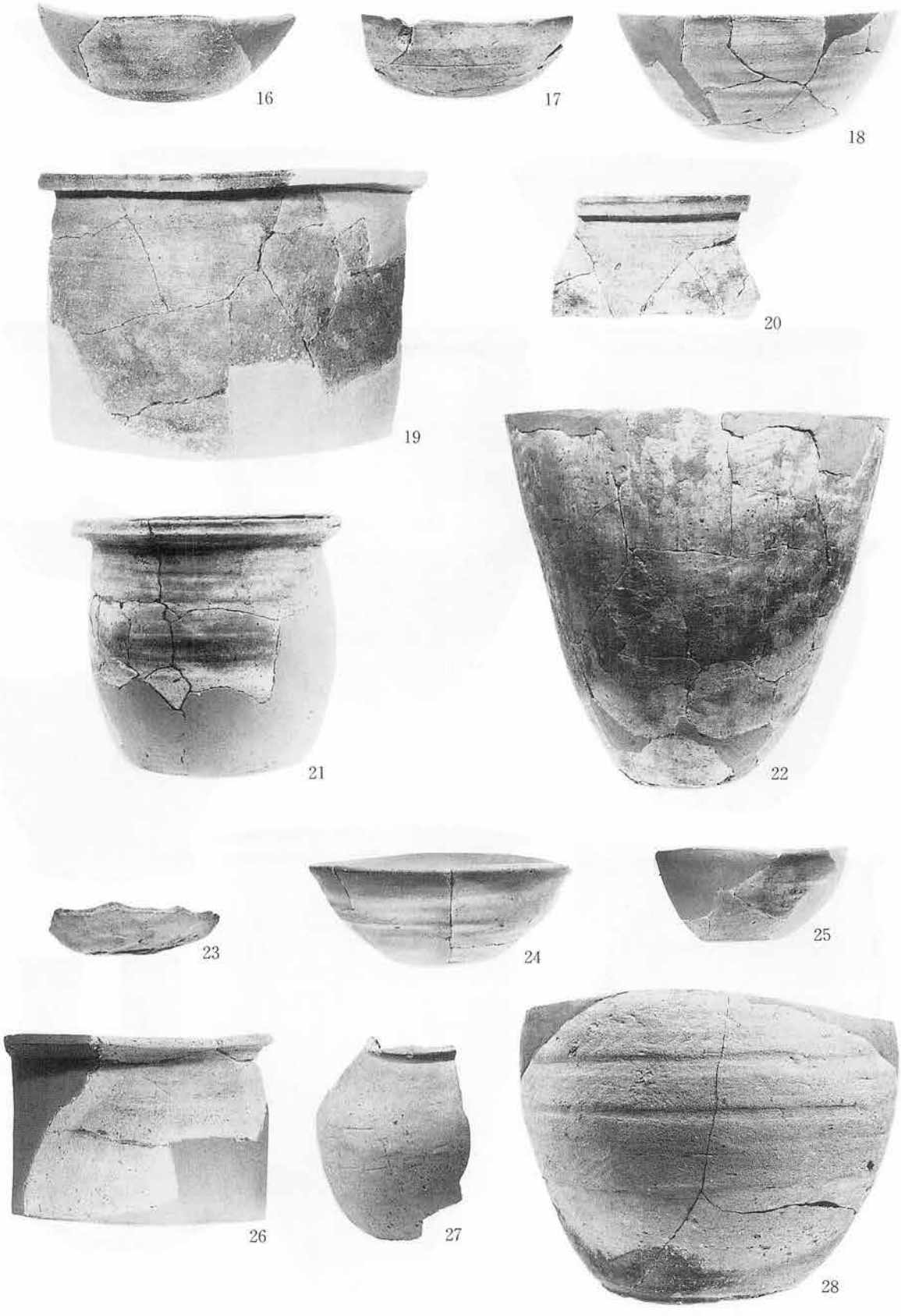
同断面

18号土坑完掘

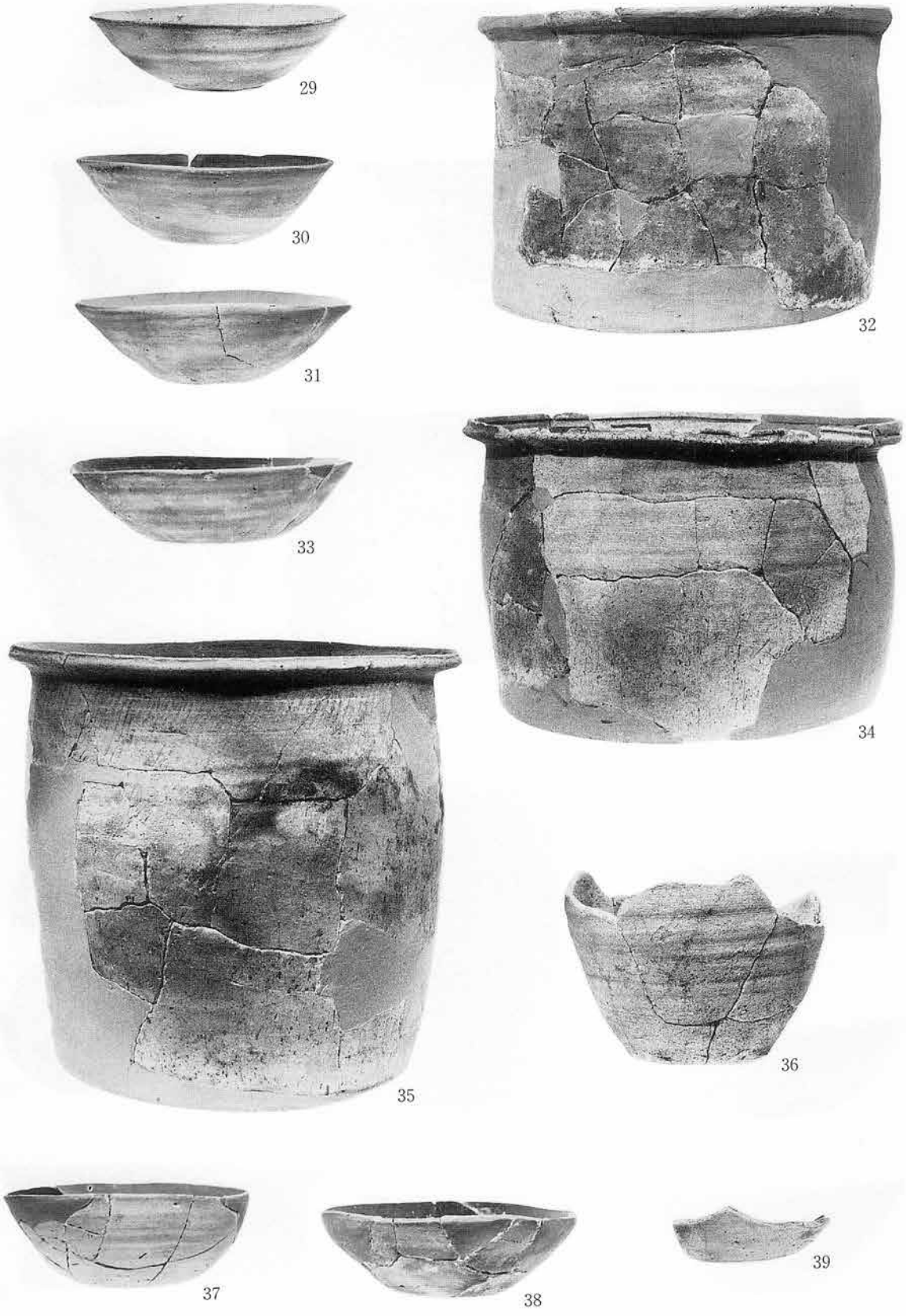
同断面

写真図版16　16・17・18号土坑

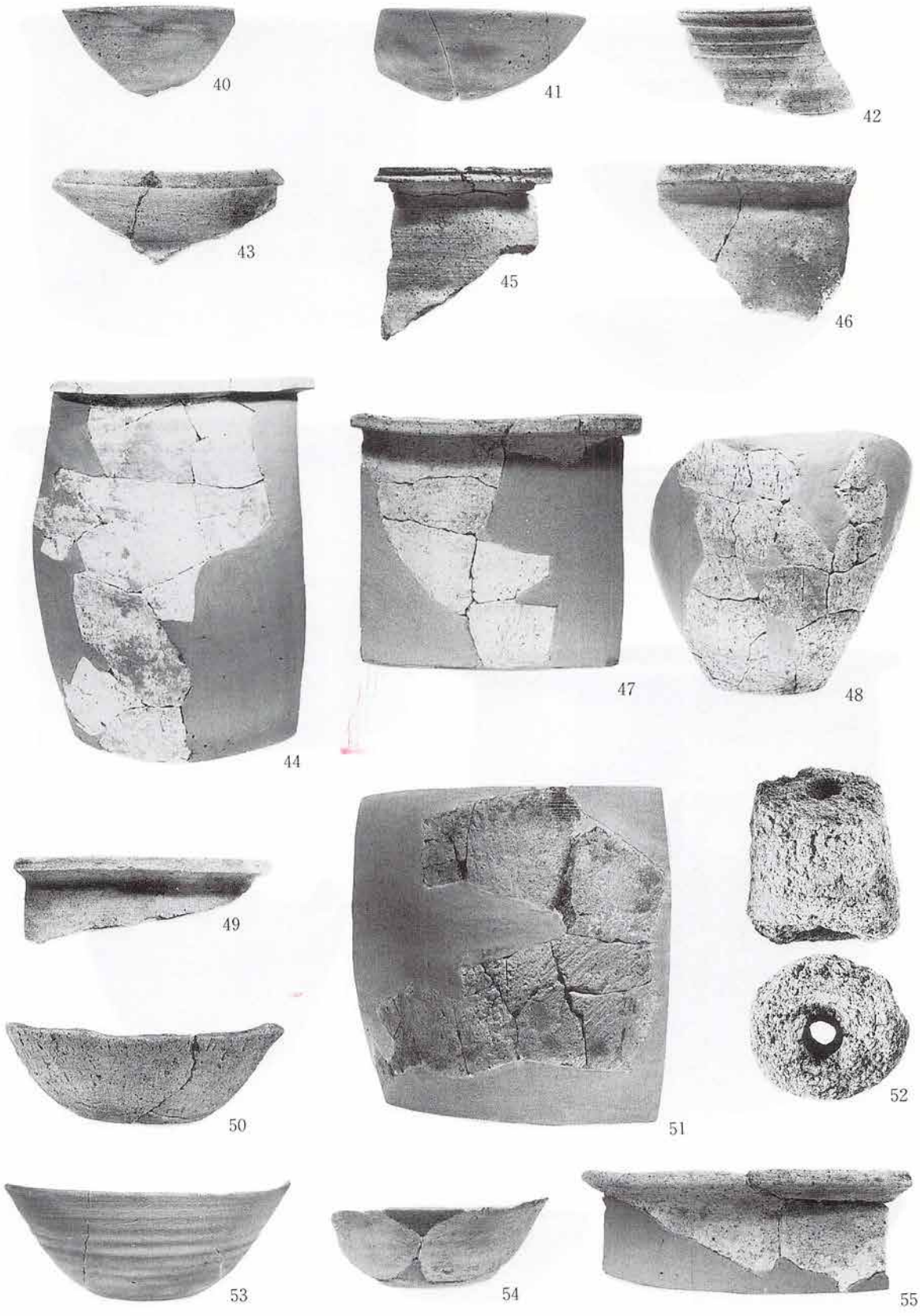
写真図版17　出土遺物ー1



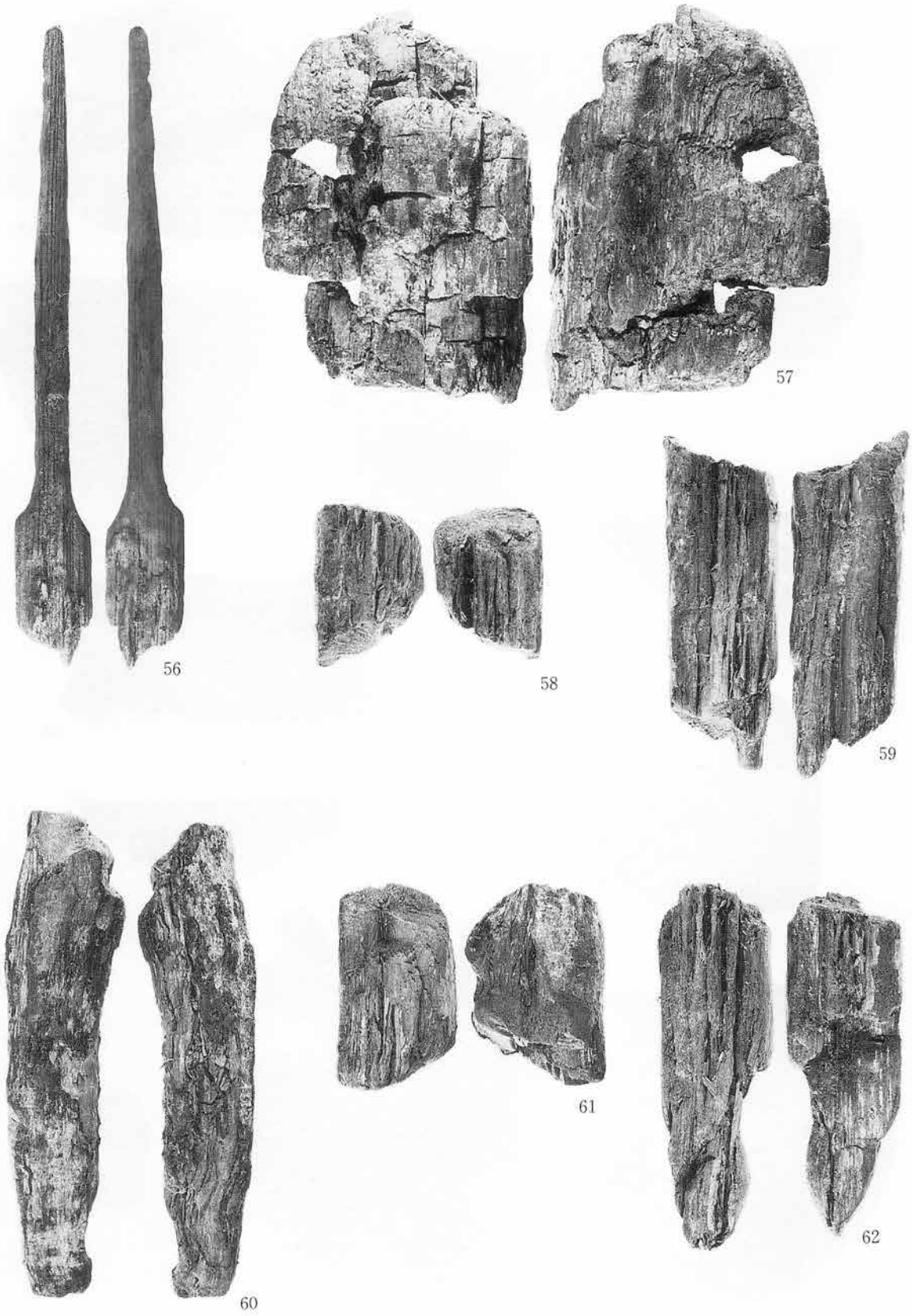
写真図版18　出土遺物－2



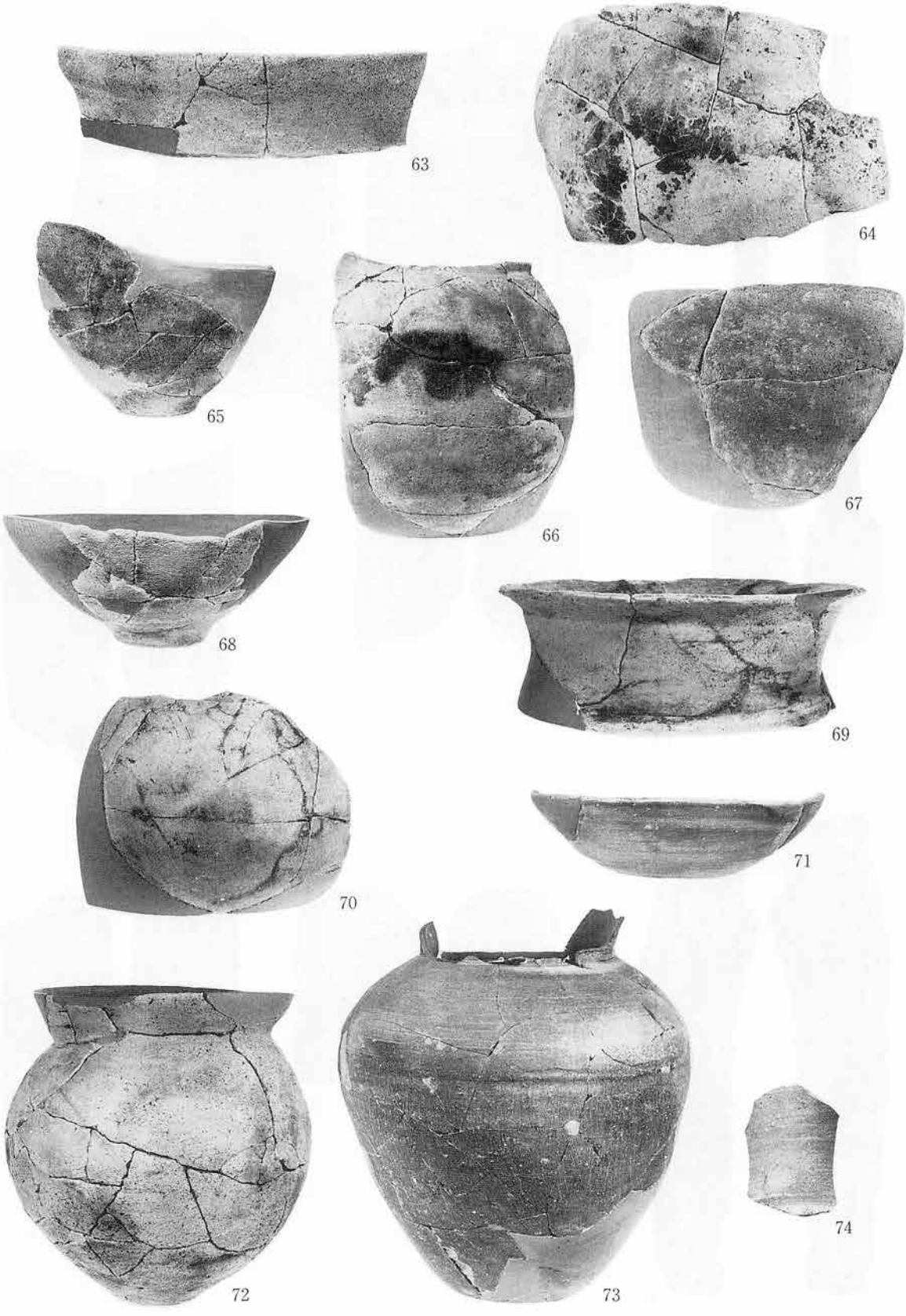
写真図版19　出土遺物ー3



写真図版20　出土遺物－4



写真図版21　出土遺物－5



写真図版22　出土遺物－6

報告書抄録

ふりがな	りゅうがばばいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	龍ヶ馬場遺跡発掘調査報告書
副書名	岩手県立胆沢病院建設関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第243集
編著者名	伊東　格
編集機関	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	盛岡市下飯岡11-185
発行年月日	平成８年　３月　29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
龍ヶ馬場（りゅうがばば）	岩手県水沢市（いわてけんみずさわし） 龍ヶ馬場（りゅうがばば）60－1	03204		39度 07分 10秒	141度 08分 11秒	19940414 ～ 19940722	3,980㎡	県立胆沢病院移転に伴う遺跡発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
龍ヶ馬場	集落跡	奈良 平安	土坑２基 竪穴住居跡　６棟 土坑16基	土師器 土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺、鉄製品、木製品、ふいご羽口	

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所　　長　山影源吉
副 所 長　千葉政男

□管理課□

管理課長　澤田　寛
主　　事　千葉勝彦
〃　　久保田幸恵

□調査課□

調査課長　鈴木惠治
課長補佐　三浦謙一
〃　　高橋　與右衛門
主任文化財専門調査員　工藤利幸
〃　　中川重紀
〃　　佐々木清文
〃　　高橋義介
〃　　酒井宗孝
文化財専門調査員　菊池人見
〃　　吉田　充
〃　　鎌田　勉
〃　　小山内　透
〃　　高橋佐知子
〃　　松本建速
〃　　宮本節子
〃　　金子昭彦
〃　　木戸口俊子
〃　　阿部勝則

□資料課□

資料課長　菊池強一
主任文化財専門調査員　中村英俊
文化財専門調査員　星　雅之
〃　　羽柴直人
〃　　高木　晃
〃　　杉沢昭太郎
〃　　伊藤　拓
〃　　村上　拓
〃　　大道篤史
〃　　溜　浩二郎
〃　　中村直美
期限付専門職員　稲垣雅宏
〃　　高橋英樹
〃　　元吉弘明
〃　　佐々木裕司
〃　　千葉貴子
〃　　沼田和宏
〃　　大場慎也
〃　　吉田　理

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第243集

龍ヶ馬場遺跡発掘調査報告書

岩手県立胆沢病院建設関連遺跡発掘調査

平成８年３月20日　印刷
平成８年３月29日　発行

発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（0196）38－9001
印刷　株式会社　吉田印刷
〒020　盛岡市名須川町23－27
電話（0196）25－2323

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1996